桜井市立埋蔵文化財センター
発掘調査報告書　31集

桜　井　市

平成19年度国庫補助による
発掘調査報告書

2009. 2. 27

桜 井 市 教 育 委 員 会

桜 井 市

平成19年度国庫補助による
発掘調査報告書

2009. 2. 27

桜井市教育委員会

東田大塚古墳後円部と
調査トレンチ（南西より）

墳丘盛土断ち割り断面（北より）

墳丘盛土断ち割り断面（南西より）

矢塚古墳全景（西より）

前方部検出状況（右上が北）

纒向遺跡第154次調査（矢塚古墳第３次）

調査区全景（上が北）

調査区全景（西より）

纒向遺跡第154次調査（矢塚古墳第３次）

序

私たちの桜井市は奈良盆地の東南部に位置し、市域の約7割を山地が占める自然の豊かなまちです。しかし近年は平地部を中心に開発が進み、市民生活の利便性が向上する一方で、かつての桜井市の姿が失われつつあります。市内には纒向遺跡、大福遺跡、上之宮遺跡や、箸墓古墳、茶臼山古墳、メスリ山古墳など全国的にも注目される貴重な文化遺産が数多く分布しており、この地域が古代におけるわが国の中心地であったことが知られていますが、こうした遺跡も開発にともなう破壊が危惧されています。

桜井市ではこれらの遺跡を保護し、啓発するための事業の一つとして市内遺跡の調査・保存に力を入れており、本書には平成19年度に桜井市が国・県の補助を受けて実施した発掘調査のうち風呂坊古墳群、纒向遺跡の調査成果をおさめております。

現地調査にあたりましては指導・助言を頂いた多くの関係機関の方々、地主及び地元協力者の方々、酷暑・厳寒のなか作業に従事して頂いた作業員・学生諸君、遺物の整理・報告書の作成に協力して頂いた整理員の方々に深くご厚礼申し上げます。

本書が文化財の普及・啓発の一助となり、また研究者の方々の資するところとなれば当教育委員会としても望外の喜びであります。

平成21年2月27日

桜井市教育委員会
教育長　雀部克英

例　　言

1．本書は平成19年度国庫補助事業として奈良県桜井市教育委員会が実施した、市内遺跡の緊急調査及び範囲確認調査の報告書である。本報告書では風呂坊古墳群第３次［山本武也氏、高井源二氏］、纒向遺跡第151次［中西喜澄氏］、纒向遺跡第152次［森忠雄氏］、纒向遺跡第153次［森本好彦氏］、纒向遺跡第154次［北島政名美氏］の、５調査の成果を報告している。

2．調査主体：桜井市教育委員会

教育長 石井和典、事務局長 森北好則、教育次長 瀬川憲嗣、

文化財課長 森幹雄、文化財課主幹 北浦良郎、主任 橋本輝彦、松宮昌樹

技師 福辻淳、丹羽恵二、臨時職員 木場佳子、橋爪朝子、岩城圭香、堤野真依、西岡恵美

3．調査担当者：松宮昌樹、福辻淳

4．調査補助員：童浦千景、友永奈津子、西谷麻衣子（奈良女子大学大学院）、相場さやか（奈良大学）、小島宏貴（同）、竹内紫月（同）、山本若菜（同）、落谷博介（天理大学）、岩田映（同）

5．調査作業員：嶋岡辰雄、井上久幹、上田猛、宮前秀年、川島利市郎、北村勝弘、田仲啓治、高奥恵子、中西智子、宮久保吉暉、澤田巳喜雄、生島紀夫、甲谷郷美、甲谷晋平、南幸弘、森貞之、田村則佳、小島弘充、赤崎好子、吉田友伊、吉岡靖夫

6．整理作業及び報告書作成：上記補助員及び嶋岡由美、井ノ本奈津子、北畑陽子、吉川晴美、川田美和、樽原唯、太田久仁子

7．現地調査及び遺物整理に関し、以下の方々からさまざまなご指導・ご教示を頂いた。ここに記し、感謝の意を表します。

石野博信氏（香芝市二上山博物館）、萩原儀征氏（日本考古学協会員）、菅谷浩介氏（同）、清野孝之氏（文化庁）、寺沢薫氏（奈良県立橿原考古学研究所）、福西貴彦氏（同）、小栗明彦氏（奈良県教育委員会）、木場幸弘氏（高取町教育委員会）、菅谷文則氏（滋賀県立大学）、寺沢知子氏（神戸女子大学）

8．本書の執筆は各調査担当者がおこない、文末に明記している。編集は福辻がおこなった。

9．本書における方位・座標はすべて世界測地系によるものを示し、一部日本測地系による数値（括弧付きで記す）も併記する。方位は座標北を表し、レベル高はすべて海抜高を表す。

10．本書記載の遺物実測図は、土師器・土師質系のもの　白、須恵器　黒、瓦器　網目とした。

11．図版の遺物番号は、該当する各節の図の遺物番号に対応する。

12．出土遺物をはじめ調査記録一切は桜井市教育委員会において保管している。活用されたい。

目　　次

序
例言
目次
表・挿図目次
図版目次

第1章　平成19年度の国庫補助による発掘調査 …… 1
第2章　発掘調査の成果
　第1節　鳳呂坊古墳群第3次発掘調査報告 …… 3
　第2節　纒向遺跡第151次（箸墓古墳周辺第17次、上ツ遺隣接地）発掘調査報告 …… 12
　第3節　纒向遺跡第152次発掘調査報告 …… 19
　第4節　纒向遺跡第153次（東田大塚古墳第5次）発掘調査報告 …… 29
　第5節　纒向遺跡第154次（矢塚古墳第3次）発掘調査報告 …… 55

図版
抄録

表目次

表1　平成19年度国庫補助による調査一覧…… 2
表2　纒向遺跡第153次出土土器観察表…… 50

挿図目次

図1　桜井市の位置…… 1
図2　平成19年度国庫補助事業による調査位置図（S＝1/40,000）…… 2
図3　風呂坊古墳群の位置（S＝1/5,000）…… 3
図4　調査トレンチ位置図（S＝1/1,000）…… 4
図5　風呂坊4号墳 墳丘測量図（S＝1/200）…… 5
図6　トレンチ平面・断面図（S＝1/40）…… 6
図7　埋葬施設 平面・断面図（S＝1/20）…… 7
図8　埋葬施設出土土器（S＝1/3）…… 8
図9　埋葬施設出土鉄釘（S＝1/2）…… 9
図10　流土層出土金属製品（S＝1/2）…… 10
図11　纒向遺跡第151次調査地位置図（S＝1/4,000）…… 12
図12　トレンチ平面・断面図（S＝1/100）…… 15
図13　旧耕作土・洪水堆積層出土土器（S＝1/3）…… 16
図14　流水・滞水層下層(図12－42層)出土土器（S＝1/3）…… 17
図15　纒向遺跡第152次調査地位置図（S＝1/4,000）…… 19
図16　トレンチ平面・断面図（S＝1/80）…… 21
図17　柱列1～3　ピット土層断面図（S＝1/40）…… 22
図18　Pit5、Pit18平面・断面図（S＝1/20）…… 22
図19　その他のピット土層断面図（S＝1/40）…… 23
図20　竪穴住居 平面・断面図（S＝1/40）…… 24
図21　柱列2関連遺物（S＝1/3）…… 25
図22　Pit5出土土器（S＝1/3）…… 25
図23　Pit18出土土器（S＝1/3）…… 26
図24　その他のピット出土土器（S＝1/3）…… 26
図25　竪穴住居出土土器（S＝1/3）…… 27
図26　組文包含層出土遺物（S＝1/3）…… 27
図27　纒向遺跡第153次調査地位置図（S＝1/4,000）…… 29
図28　調査トレンチ位置図（S＝1/1,500）…… 30
図29　トレンチ平面図（S＝1/80）…… 31・32
図30　トレンチ北側　南壁・東壁土層断面図（S＝1/80）…… 33
図31　トレンチ南側　東壁土層断面図（S＝1/40）…… 34
図32　墳丘盛土断ち割り部分　土層断面図（S＝1/40）…… 35

図33　トレンチ西壁　土坑1付近上層断面図（S＝1/40）…… 36
図34　土坑1 上層土器出土状況（S＝1/20）…… 38
図35　土坑2 平面・断面図（S＝1/20）…… 39
図36　土坑4 平面・断面図（S＝1/20）…… 39
図37　土坑1 出土土器（S＝1/3）…… 41
図38　土坑4 出土土器（S＝1/3）…… 42
図39　土坑2・土坑6・溝1出土土器（S＝1/3）…… 43
図40　墳丘外濠積層出土土器（S＝1/3）…… 43
図41　墳丘盛土出土土器①（S＝1/3）…… 44
図42　墳丘盛土出土土器②（S＝1/3）…… 45
図43　東田大塚古墳 墳丘復元案（S＝1/800）…… 48
図44　調査位置図（S＝1/25,000）…… 55
図45　網底型推定復元図（S＝1/1,500）…… 56
図46　トレンチ配置図（S＝1/1,500）…… 56
図47　1トレンチ平・断面図（S＝1/80）…… 57
図48　2トレンチ平・断面図（S＝1/80）…… 58
図49　2トレンチ南壁断面図（S＝1/80）…… 59
図50　3トレンチ平・断面図（S＝1/80）…… 59
図51　4トレンチ平・断面図（S＝1/100）…… 60
図52　4トレンチ土坑1・ピット1断面図（S－1/20）…… 61
図53　5トレンチ平・断面図（S＝1/80）…… 61
図54　4トレンチ大溝1出土遺物（S＝1/3）…… 62
図55　4トレンチ大溝2出土遺物（S＝1/3）…… 63
図56　4トレンチ土坑1出土遺物（S＝1/3）…… 63
図57　4トレンチ大溝1・2出土遺物（S＝1/3）…… 64
図58　3トレンチ中世溝出土遺物（S＝1/3）…… 65
図59　矢塚古墳墓定復元ライン（S＝1/800）…… 66
図60　中世溝検出図（S＝1/2,500）…… 67

図版目次

巻頭図版1　纒向遺跡第153次調査
東田大塚古墳後円部と調査トレンチ（南西より）
墳丘盛土断ち割り断面（北より）
墳丘盛土断ち割り断面（南西より）
巻頭図版2　纒向遺跡第154次調査
矢塚古墳全景（西より）
前方部検出状況（右上が北）
巻頭図版3　纒向遺跡第154次調査
調査区全景（上が北）
調査区全景（西より）

風呂坊古墳群第3次調査

図版1　風呂坊古墳群第3次調査（1）
風呂坊4号墳墳丘（西より）
トレンチ掘削前の状況①（北西より）
トレンチ掘削前の状況②（北より）
図版2　風呂坊古墳群第3次調査（2）
流土層断面（北より）
埋葬施設上面検出状況（北より）
墓壙埋土断面（北より）
図版3　風呂坊古墳群第3次調査（3）
墓壙埋土中の遺物出土状況（西より）
鉄釘出土状況①（西より）
鉄釘出土状況②（北より）
図版4　風呂坊古墳群第3次調査（4）
棺外土器出土状況①（西より）
棺外土器出土状況②（南より）
棺外副葬土器①（南より）
棺外副葬土器②（上が北）
図版5　風呂坊古墳群第3次調査（5）
墓壙完掘後の状況①（西より）
墓壙完掘後の状況②（北より）
トレンチ全景（北西より）
図版6　風呂坊古墳群第3次調査（6）
埋葬施設出土土器
流土層出土金属製品
図版7　風呂坊古墳群第3次調査（7）
埋葬施設出土鉄釘

纒向遺跡第151次調査

図版8　纒向遺跡第151次調査（1）
洪水堆積層上面検出状況①（東より）
洪水堆積層上面検出状況②（西より）
図版9　纒向遺跡第151次調査（2）
流水・滞水層上面検出状況①（東より）
流水・滞水層上面検出状況②（西より）
図版10　纒向遺跡第151次調査（3）
流水・滞水層掘り下げ後①（東より）
流水・滞水層掘り下げ後②（西より）
図版11　纒向遺跡第151次調査（4）
トレンチ東端の土層断面（北西より）
トレンチ中央付近の土層断面（北西より）
トレンチ西端の土層断面（北東より）
図版12　纒向遺跡第151次調査（5）
旧耕作土・洪水堆積層出土土器
流水・滞水層下層出土土器

纒向遺跡第152次調査

図版13　纒向遺跡第152次調査（1）
遺構上面検出状況①（北西より）
遺構上面検出状況②（西より）
柱列1上面検出状況（南より）
図版14　纒向遺跡第152次調査（2）
柱列2上面検出状況①（南より）
柱列2上面検出状況②（北より）
柱列3上面検出状況（南より）
図版15　纒向遺跡第152次調査（3）
Pit 1土層断面（西より）
Pit 2土層断面（西より）
Pit 3土層断面（西より）
Pit 6土層断面（南より）
Pit 7土層断面（南より）
Pit 8土層断面（南より）

Pit 9 土層断面①（南東より）
Pit 9 土層断面②（北西より）
図版16 縄向遺跡第152次調査（4）
Pit10土層断面（西より）
Pit11土層断面（西より）
Pit12土層断面（東より）
Pit14土層断面（南より）
Pit15土層断面（南より）
Pit 5 土層断面（北より）
Pit 5 遺物出土状況（北より）
Pit18遺物出土状況（南より）
図版17 縄向遺跡第152次調査（5）
Pit 4 土層断面（北より）
Pit13土層断面（西より）
Pit16土層断面（北より）
Pit17土層断面（北西より）
Pit19土層断面（北より）
Pit20土層断面（北西より）
Pit23土層断面（南より）
Pit25土層断面（西より）
図版18 縄向遺跡第152次調査（6）
Pit26土層断面（南より）
Pit27土層断面（西より）
Pit29土層断面（北西より）
Pit30土層断面（西より）
Pit31土層断面（東より）
Pit32土層断面（西より）
Pit33土層断面（西より）
Pit34土層断面（東より）
図版19 縄向遺跡第152次調査（7）
竪穴住居 上面検出状況（南より）
焼土・炭化物集中部分（東より）
焼土集中部分の遺物出土状況（東より）
図版20 縄向遺跡第152次調査（8）
焼土・炭化物層断面（北より）
住居床面検出状況（南より）
床面遺構完掘後の状況（南より）
図版21 縄向遺跡第152次調査（9）
竪穴住居 完掘状況（南より）
竪穴住居 土層断面（南東より）
落ち込み1付近の土層断面（東より）
図版22 縄向遺跡第152次調査（10）
縄文包含層断面（北より）
トレンチ全景①（西より）
トレンチ全景②（北西より）
図版23 縄向遺跡第152次調査（11）
柱列2関連遺物
Pit 5 出土土器
Pit18出土土器①
Pit18出土土器②
図版24 縄向遺跡第152次調査（12）
Pit29出土土器
Pit35出土土器
竪穴住居出土土器
縄文包含層出土遺物

縄向遺跡第153次調査
図版25 縄向遺跡第153次調査（1）
トレンチと東田大塚古墳遺丘（南西より）
拡張前のトレンチ全景（上が北）
図版26 縄向遺跡第153次調査（2）
トレンチ掘削前の状況（南より）
南区の遺構上面検出状況（南より）
土坑1・土坑2上面検出状況（南西より）
図版27 縄向遺跡第153次調査（3）
土坑1上層遺物出土状況①（西より）
土坑1上層遺物出土状況②（東より）
土坑1上層断面（東より）
図版28 縄向遺跡第153次調査（4）
土坑2土層断面（西より）
土坑2遺物出土状況（西より）
土坑2完掘状況（西より）
図版29 縄向遺跡第153次調査（5）
土坑3上層断面（西より）
土坑4遺物出土状況（西より）
溝1遺物出土状況（西より）
図版30 縄向遺跡第153次調査（6）
トレンチ北区全景（南西より）
北区南壁の土層断面（西より）
トレンチ南区全景（南より）
図版31 縄向遺跡第153次調査（7）
墳丘盛土と墳丘外堆積（北西より）

南区東縁の墳丘盛土断面（西より）
拡張区・墳丘断ち割り部分北壁（南より）
図版32　纒向遺跡第153次調査（8）
土坑6土層断面（南より）
墳丘盛土・土坑7土層断面（南より）
墳丘盛土断面（北より）
図版33　纒向遺跡第153次調査（9）
拡張区 墳丘盛土断ち割り部分（南西より）
拡張区西端土層断面（東より）
拡張区西壁・南壁土層断面（北東より）
図版34　纒向遺跡第153次調査（10）
土坑1周辺の土層断面（南東より）
南区北端の墳丘盛土断面（西より）
北区北東端の墳丘盛土断面（西より）
図版35　纒向遺跡第153次調査（11）
土坑1出土土器①
図版36　纒向遺跡第153次調査（12）
土坑1出土土器②
土坑4出土土器①
図版37　纒向遺跡第153次調査（13）
土坑4出土土器②
土坑2出土土器
土坑6出土土器
溝1出土土器
図版38　纒向遺跡第153次調査（14）
墳丘外堤積層出土土器
墳丘盛土出土土器①
図版39　纒向遺跡第153次調査（15）
墳丘盛土出土土器②
図版40　纒向遺跡第153次調査（16）
墳丘盛土出土土器③
図版41　纒向遺跡第153次調査（17）
墳丘盛土出土土器④
図版44　纒向遺跡第154次調査（3）
2トレンチ全景（西より）
墳丘盛土・二次堆積層断面（南より）
図版45　纒向遺跡第154次調査（4）
墳丘裾検出状況（西より）
二次堆積層断面（北より）
図版46　纒向遺跡第154次調査（5）
3トレンチ全景（東より）
中世溝断面（北より）
図版47　纒向遺跡第154次調査（6）
4トレンチ全景（南より）
大溝2断面（東より）
図版48　纒向遺跡第154次調査（7）
大溝2断面（東より）
大溝1遺物出土状況①（東より）
図版49　纒向遺跡第154次調査（8）
大溝1遺物出土状況②（東より）
土坑1断面（南より）
図版50　纒向遺跡第154次調査（9）
土坑1完掘状況（南より）
5トレンチ全景（北より）
図版51　纒向遺跡第154次調査（10）
4トレンチ大溝1出土遺物
図版52　纒向遺跡第154次調査（11）
4トレンチ大溝1・2出土遺物
図版53　纒向遺跡第154次調査（12）
4トレンチ土坑1出土遺物
4トレンチ大溝1・2出土遺物
図版54　纒向遺跡第154次調査（13）
4トレンチ大溝1・2出土遺物
3トレンチ中世溝出土遺物

纒向遺跡第154次調査

図版42　纒向遺跡第154次調査（1）
1・5トレンチ全景（南より）
前方部墳丘検出状況（南より）
図版43　纒向遺跡第154次調査（2）
前方部墳丘検出状況（西より）
周濠断面（北より）

第１章　平成19年度の国庫補助による発掘調査

１．桜井市の位置と環境

奈良県北部に位置する桜井市は、人口６万人余、面積98.93㎢の都市である。市域の北西部は奈良盆地東南部にあたる平地が広がり、北東部から東部・南部にかけては大和高原や龍門山地などの山地部で構成されている。付近は奈良盆地と山間部の宇陀・古野地域との結節点にあたっており、古くから交通の要衝であったと考えられ、市域には数多くの遺跡が分布する。

図１　桜井市の位置

市域北西部の平地部からその周縁の丘陵部にかけては、特に多くの遺跡が存在する。天理市境に近い市域北部の纒向遺跡は、古墳時代前期の大規模な集落遺跡として知られている。ここには箸墓古墳をはじめとする出現期の古墳が分布し、多くの外来系土器が出土することなどから、当時の日本列島における中心的な集落が存在したことが推定されている。このほか突線紐式銅鐸が埋納された状態で見つかった大福遺跡や、絵画土器の出土で知られる芝遺跡などの弥生時代集落遺跡が平地部に立地する。

丘陵に近い平地の南縁付近に目を向けると、桜井茶臼山古墳・メスリ山古墳という２基の大型前方後円墳が存在し、赤坂天王山古墳や文珠院西古墳など横穴式石室を持つ著名な古墳が多数分布している。上之宮遺跡では聖徳太子の「上宮」の可能性が推定される大型掘立柱建物や関池遺構が見つかっており、吉備池廃寺・安倍寺・山田寺など、大王家や有力氏族と密接な関連を持つ古代寺院跡がいくつも存在している。

このように桜井市には、古代国家の形成期に重要な役割を果たしたと考えられる遺跡が多数見られ、現在12件の史跡と２件の特別史跡を有している。桜井市ではこれら市内遺跡の範囲確認調査を行なうとともに、開発に先立つ緊急調査を日々実施している。

２．平成19年度の発掘調査

平成19年度に実施した国庫補助による発掘調査は５件である（表１）。このうち纒向遺跡第151次・152次調査は個人住宅建築に伴う発掘調査であり、纒向遺跡第153次・154次調査の２件が重要遺跡範囲確認調査、風呂坊古墳群第３次調査が自然崩落に伴う緊急調査であった。本書ではこれら計５件の発掘調査の成果について報告している。

表1　平成19年度国庫補助事業による調査一覧

地図No.	調査名称	所在地	期間	面積	主な遺構・遺物	担当者
1	風呂坊古墳群第3次	阿部681－3、681－4	6月4日～6月21日	9㎡	木棺墓、鉄剣、土器	福辻
2	観向遺跡第151次	笥中1040	7月9日～8月10日	55㎡		福辻
3	観向遺跡第152次	巻野内415－2	8月28日～9月20日	144㎡	竪穴住居 柱穴列、縄文土器	福辻
4	観向遺跡第153次 （東田大塚古墳5次）	東田158	12月10日～2月25日	72㎡	東田大塚古墳前方部	福辻
5	観向遺跡第154次 （矢塚古墳3次）	東田251－1、268－1、269－1	12月17日～3月13日	127.5㎡	矢塚古墳前方部 観向大溝	松富

図2　平成19年度国庫補助事業による調査位置図（S＝1/40,000）

第２章　発掘調査の成果

第１節　風呂坊古墳群第３次発掘調査報告

１．はじめに

風呂坊古墳群第３次調査は、桜井市大字阿部681－３、681－４番地において、平成19年６月４日から６月21日にかけて行なわれた。風呂坊古墳群は桜井市街地のすぐ南側に位置する安倍山丘陵の南端部に立地しており、この丘陵上には双葉１号墳や稲荷西２号墳（桜井公園２号墳）、神墓古墳、文殊院西・東古墳など多くの古墳が存在するほか、丘陵の北側では環濠を巡らす弥生時代集落の存在が確認されている[1]。現在安倍山丘陵の周辺では開発が進んでおり、北半部は桜井公園として旧来の地形がよく残されているが、南半部は宅地造成による改変が著しく、風呂坊古墳群の周囲でも西側を除く３方は住宅地となっている（図３）。

風呂坊古墳群は丘陵の南端に突出する尾根上に立地しており、昭和33年の宅地造成工事の際に横穴式石室を有する３基の古墳（１～３号墳）が確認され、金属製の鏡子や銀製釧、山梔玉など多くの遺物が出土している（第１次調査）[2]。これらの古墳は造成工事の際に失われたものと考えられ、平成18年度に実施した第２次調査（図４）においても古墳の痕跡は確認されていない。なお第２次調査では、丘陵斜面上の流土中から弥生土器片が出土しており、丘陵上に弥生時代後期の集落が存在した可能性を考えることができる。

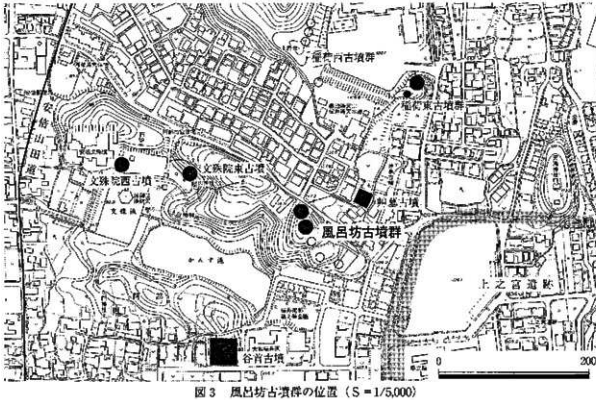


図３　風呂坊古墳群の位置（S＝1/5,000）

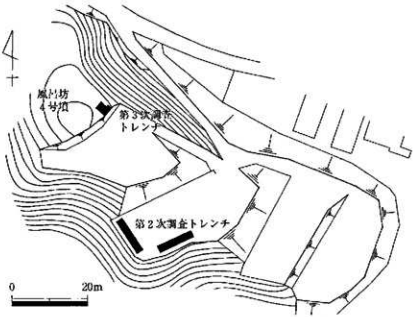


図4　調査トレンチ位置図（S＝1/1,000）

このほか古墳群が立地する尾根の最高部には古墳状隆起が存在する。その南東側は第1次調査後の造成により削られたものと見られ、この部分には高さ2m余りの崖面が形成されている。第2次調査時にこの崖面を観察した際、埋葬施設と見られる遺構の断面と鉄製品の存在が確認された。こうしたことから上記の古墳状隆起は古墳である可能性が高いと判断された（以下では「風呂坊4号墳」とする）。

第3次調査は、風呂坊4号墳に存在する上記の遺構が自然崩壊により失われる可能性を考慮し、実施されることとなった。

2．調査の経過

平成19年6月4日より風呂坊4号墳墳丘の平板測量を実施し、これと並行して崩壊のおそれのある遺構部分の発掘調査を実施した。調査トレンチは当初崖面を南端として3.3m×2.4mの規模で設定し、人力により掘削を行なった。その後遺構の広がりに応じて東側へ拡張し、最終的な調査面積は約9㎡となっている。

調査の結果、崖面で確認された遺構は木棺を直葬する埋葬施設であることが明らかとなり、墓壙内からは鉄釘、土器などが出土した。なお墓壙埋土については現地において篩い掛けを行ない、微細な遺物の検出に努めたが、土器小片以外の遺物は確認されなかった。

墓壙内を完掘した後にトレンチを埋め戻し、平成19年6月21日に調査を完了している。

3．測量調査の成果

風呂坊4号墳の墳丘形態　図5に風呂坊4号墳周辺地形の平板測量図を示した。墳丘の南側は宅地造成に伴い大きく改変されているものの、それ以外の部分では概ね円弧を描く等高線を読み取ることができる。比較的旧来の地形をとどめていると見られる墳丘の北側に注目すると、126.25～126.5mライン付近で傾斜の変化が見られ、これより北側はほぼ平坦な地形となり、南側すなわち墳丘側へ向かっては緩やかに立ち上がる状況が見てとれる。発掘調査を実施していないため確定的ではないが、この傾斜変化点付近（126.25～126.5mライン付近）に北側の墳丘端を推定しておきたい。

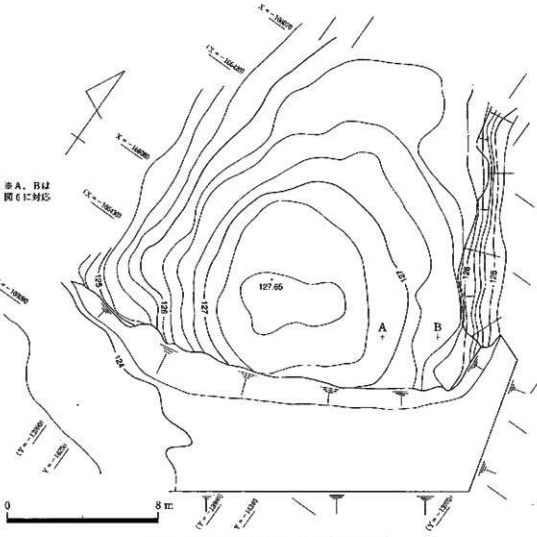


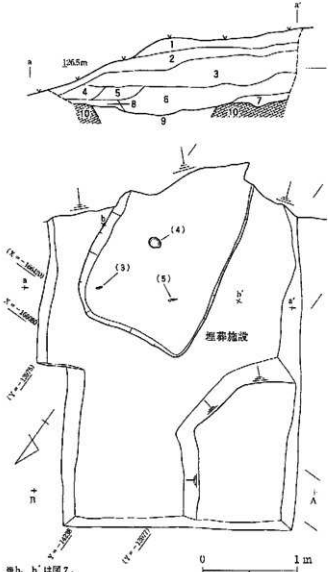
図5　風呂坊4号墳 墳丘測量図（S＝1/200）

現況の最高点（127.65m）付近を墳丘の中心と見ると、全長は約20mに復元することができる。現状の墳丘高は1m余りと低平であり、後世に大きく削平されていると考えられるが、等高線が円弧を描くことから円墳である可能性を指摘しておきたい。なお葺石に由来すると思われる石の存在は見られず、埴輪などの遺物の存在も確認されていない。

4．発掘調査の成果

（1）層序

既述のように、風呂坊4号墳の南側崖面で確認された遺構の調査を目的として調査トレンチを設定した。トレンチは風呂坊4号墳墳丘の中心より東側に位置するため、地表面は西側が高く、東側が低くなる状況にあったが、後述する埋葬施設が検出された地山面は比較的平坦であった。このためトレンチ西側では地表下約75cmで地山面に到達したのに対し、トレンチ東側ではわずか10cm余りで地山面を検出している（図6）。地山面の上に形成された土層（図6－2～8層）は、いずれも埋葬施設が埋まった後に形成されたものであり、4号墳の墳丘盛土に相当するものは確認されなかった。これら



※b、b'は図7、
A、Bは図5、(3)～(5)は図8・9に対応

1 暗褐色（10YR3/3） 細粒砂混じりシルト ［表土］
2 褐色（10YR4/6） 細粒砂混じりシルト
3 明黄褐色（10YR6/6） 細粒砂混じりシルト（径3mm程度の灰含む 炭化物粒わずかに含む）
4 明黄褐色（10YR6/6） 細粒砂混じり細粒粘砂
5 黄褐色（10YR5/6） 細粒砂混じりシルト（炭化物粒含む）
6 黄橙色（10YR7/8） 細粒砂混じりシルト（径3mm程度の灰含む）
7 明黄褐色（10YR7/6） 細粒粘砂混じりシルト（地山ブロックを3%程度含む）
8 明黄褐色（10YR6/8） 細粒砂混じりシルト（固くしまる）
9 ［墓壙埋土］
10 花崗岩［地山］

図6 トレンチ平面・断面図（S＝1/40）

は丘陵頂部側から流れ落ちて堆積した流土層と考えられる。

なお流土中からは、鉄釘などの金属製品が出土している。これらは後述する埋葬施設に由来するものではなく、その他の埋葬施設、あるいは後世の遺構に伴うものと理解できる。

（2）埋葬施設

埋葬施設の形態　風呂坊4号墳墳丘の中心から東へ約8mの地点に位置している。竪穴の墓壙を有しており、南側部分は第1次調査後の造成工事により失われたものと考えられる。地山の岩盤を穿つ深さ約50cmの墓壙は、平面形が幅約1.3m、長さ2m以上の長方形を呈し、主軸はほぼ南北方向に向けられている。墓壙底は平坦で、墓壙壁は急角度で立ち上がっている。後述する遺物の状況から、木棺が直葬されていたことが明らかとなっている。

遺物の出土状況　墓壙底面付近と墓壙埋土中より遺物が出土している。墓壙底面付近では、木棺の緊結に用いられた鉄釘が9点（図9－6～14）出土したほか、土師器坏（図8－1）と須恵器平瓶（同2）が検出されている。鉄釘は墓壙北壁より15～20cmの位置で5点が並ぶように検出されているほか、墓壙残存部の南端西壁沿いの位置で3点が集中してみとめられた。このうち前者は木棺の北小口部分に使用されたと考えることができる。後者の3点については北小口より約1.7m離れた位置にあり、南小口の西端部分に使用されたものと推定される。この他の1点（図9－6）は墓壙中央付近で検出されているが、これは墓壙底よりやや浮いた位置にあったことから、埋葬時より大きく移動しているものと考えられる。なお南北の小口に使用されたと見られる鉄釘の出土位置を参考とすると、木棺の規模は長さ約1.7m、幅約1mに推定することができる。頭位方向については判断が難しいが、墓壙底がわずかながら北側で高くなることから、北頭位の可能性を指摘しておきたい。

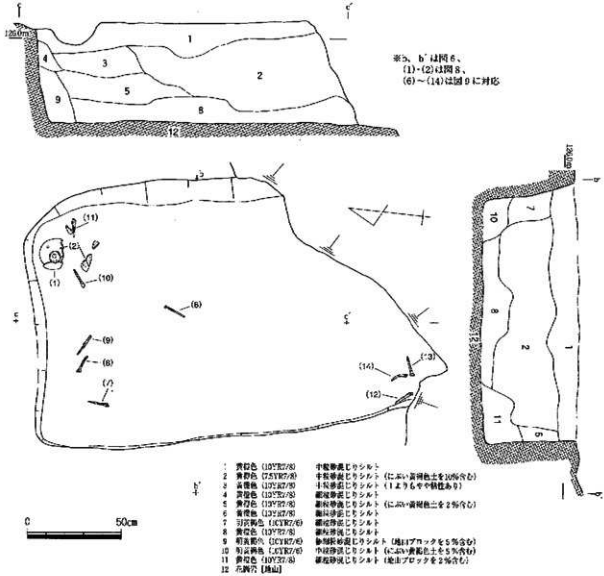


図7　遺構配置 平面・断面図（S＝1/20）

上師器坏（図8－1）と須恵器平瓶（同2）は、墓壙底の北東隅において出土している。須恵器平瓶は墓壙底に正位で置かれ、その体部側面に土師器坏が被せられるような状態で検出されている（図7、図版4）。これらは墓壙北壁と木棺北小口の鉄釘の間に位置しており、埋葬に際して北小口側の木棺外に副葬されたものと考えることができる。なお須恵器平瓶は胴部の一部が破損しており、その破片が周辺で出土している。破損部分が木棺蓋にあたることから、木棺が腐朽して崩れ落ちた際に破損した可能性が推定される。

このほか墓壙埋土中より土器が出土している。多くは小片であったが、須恵器坏（図8－4）が唯一完形の状態で検出されている。墓壙底からは約30cm浮いた位置にあり、墓壙埋土上面におかれた可能性が考えられる。

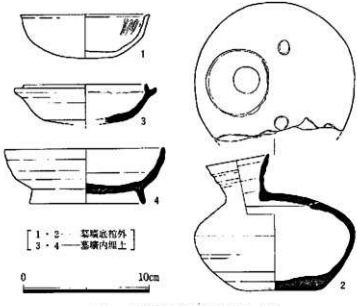


図8　埋葬施設出土土器（S＝1/3）

5．出土遺物と遺構の時期

（1）埋葬施設の出土遺物と時期

埋葬当時の位置あるいはそれに近い状態で検出された遺物と、埋土中より出土した遺物が存在する。前者は木棺外に副葬された土器2個体のほか、木棺の緊結に用いられた鉄釘があり、後者としては少量の土師器小片のほか、須恵器坏、鉄釘が確認されている。以下で遺物を種類別に見ていくことにする。

土器（図8）　木棺北小口側の棺外に副葬された土器が2点（1・2）と、埋土中より出土した須恵器2点（3・4）の計4点を図示することができた。

土師器坏（1）は、須恵器平瓶（2）の体部側面に被さるようにして検出された。ほぼ完形の状態にあり、口径は10.1cm、器高は3.5cmを測る。体部は丸みのある形態で、口縁端部には内傾する面が形成されている。内面にはミガキ調整が見られる。

（2）は須恵器平瓶で、胴部側面の約1/4を欠損する個体である。口頸部はやや外反して開く形態で、外面には2条の沈線が巡らされる。体部は上面がふくらんで丸みを帯びる形態で、底部は平底である。なお体部外面の上面には、径1cm前後の円形の粘土粒が2箇所に貼り付けられている。

（3）は全体の約1/5が残存する須恵器坏で、やや丸みのある体部に、短く内傾するたちあがり部を伴う個体である。口縁端部は丸くおさめられ、口径は9.8cmに復元される。（4）はほぼ完形の状態で出土した須恵器坏である。体部は丸みのある形態で、底部にはやや外側に向かって短く伸びる高台が伴う。口径は12.6cm、高台径は9.1cmを測る。

鉄釘（図9）　床面より浮いた位置で出土した1点（5）と、床面に近い位置で出土した9点（6～14）の、計10点が検出されている。これらは出土状況から、木棺材の緊結に用いられたものと考えることができる。いずれも鍛造品と見られ、頭部をほぼ直角に折り曲げてつくる形態であり、身部の断面形は一辺0.5～0.6cmの正方形に近い方形を呈する。全長は各個体とも10cm前後であり、（6）が約11.1cmで最も大きく、（12）や（14）が9.0cm前後で最も小さいが、大きなばらつきは見られない。

なお各個体の表面には、木棺材の木質が付着して残存している。木質の残存状況は個体差があり、（5）では木質が観察されなかったが、表面のほぼ全体に存在するものが多く存在する。詳細を見ると、多くの個体が頭側より3～4cmの部分を境として木質の状況に変化が見られ、（8）については木目の方向は同じであるが付着面が異なっており、（6）・（7）および（10）～（14）では木目方向が異なっている。これらの木質の状況は鉄釘の使用部位に起因するものと見られ、前者については蓋板材

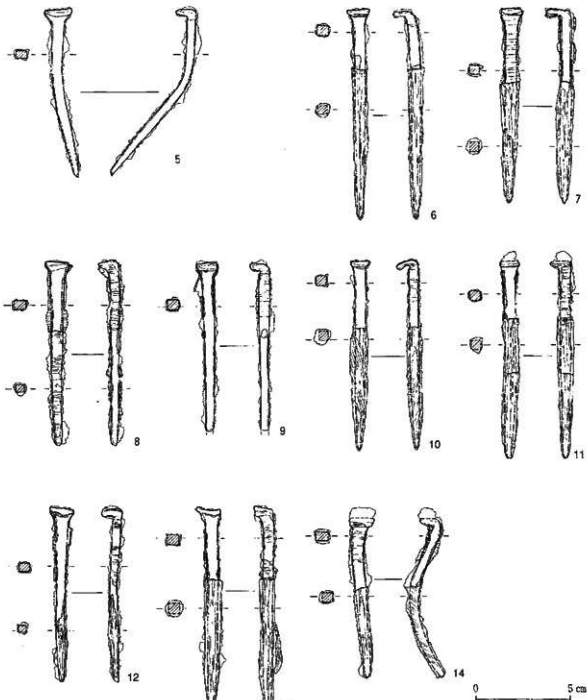


図9　埋葬施設出土鉄釘（S＝1/2）

あるいは底板材より小口板に打ち込まれたと推定され、後者は側板より小口板に向かって打ち込まれたものと考えることができる。こうした木質の状況から、木棺に使用された板材は3～4㎝の厚さであったと考えられる。

埋葬施設の時期　棺外に副葬された須恵器平瓶（2）及び埋土中出土の須恵器坏（3）・（4）は、その形態的特徴から7世紀初頭から前半に属するものと考えられる。したがって埋葬施設の時期についても7世紀前半の範疇で考えることができる。

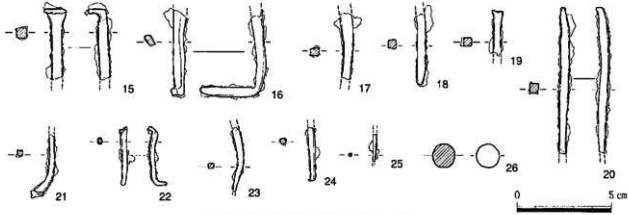


図10　流土層出土金属製品（S＝1/2）

（2）流上層出上遺物（図10）

埋葬施設の上面を覆う流土層からは、図10に示した金属製品類のほか、土器小片が少量出土している。土器に関しては時期を限定できるような個体が存在しなかったため、ここでは金属製品類のみを示すこととした。

鉄製品類（図10－15～25）　計11点が確認されている。(15)～(20) は、断面形が一辺0.4～0.5cmの方形を呈する個体である。このうち (15) は、埋葬施設で検出された鉄釘（図９）の頭部付近と共通する形態を持つことから鉄釘と考えられ、その他についても鉄釘の可能性が高いと考えられる。これらはいずれも残存状況が悪く、原位置を保つものではないことから、上記の埋葬施設と同様の遺構に用いられたものが、後世の撹乱などによりここにもたらされたものと推定される。遺物の時期については、埋葬施設出土の鉄釘と同様に７世紀代に属する可能性が考えられる。

(21)～(25) は断面形が一辺0.3cm以下の正方形を呈する個体である。残存長が３～４cmで全体像は不明であり、用途も不明である。

鉛製品（図10－26）　径1.2cmを測る球形の鉛製品である。鉄砲玉である可能性が考えられるが、その時期については不明である。

６．まとめ

第２次調査時に屋内で確認された遺構は、当初の想定どおり埋葬施設であることが確認された。時期は出土遺物から７世紀代の前半に考えられ、第１次調査で確認された３基の古墳よりも新しい時期に位置付けることができる。また流土層から出土した鉄釘の存在から、同様の埋葬施設が古墳群の立地する丘陵上に複数存在した可能性を考えることができる[3]。

風呂坊４号墳については、測量の結果から径約20mの円墳であると考えられた。その墳丘形態や立地環境などから上記の埋葬施設と同時期のものである可能性は低いものと考えられる[4]。埋葬施設は風呂坊４号墳築造後に、墳丘の東側に設けられたものと推定される。

風呂坊古墳群の周辺には、すぐ北東側に近接する神塚古墳をはじめとして、確認された埋葬施設と

同じ7世紀代の有力墳が複数存在している点が注意される。これらの古墳の被葬者と今回確認された埋葬施設の被葬者の関係をどのように考えるか、今後検討していく必要がある。

（福辻）

【註記】

1）増田一裕　1977「安倍山丘陵における弥生遺跡と古墳群の再検討」『古代学研究』85　古代学研究会
福辻淨(編)　2007『桜井公園遺跡群』（財）桜井市文化財協会
松宮昌樹　2008「桜井公民遺跡群第6次調査概要報告」『奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会年報－平成19年度－』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会

2）伊達宗泰　1960「桜井市風呂坊の古墳」『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第3集　奈良県教育委員会

3）風呂坊古墳群の立地する丘陵上では、平成20年度に実施した風呂坊古墳群第4次調査においても7世紀代の木槨墓が1基と土壙墓1基が確認されている。

4）風呂坊4号墳は平成20年度の第4次調査において、横穴式石室を主体とする6世紀前半頃の古墳であることが確認されている。

第２節　纒向遺跡第151次（箸墓古墳周辺第17次、上ツ道隣接地）発掘調査報告

１．はじめに

纒向遺跡第151次調査は、桜井市大字箸中1040番地において、個人住宅の建築に先立って実施された。調査対象地は纒向遺跡の南端部に位置しており、北側およそ30mには箸墓古墳後円部が存在する。また対象地は奈良と桜井を結ぶ南北道である上街道の西側に面しており、周辺には街村型の集落形態を見ることができる。

最古の大型前方後円墳として知られる箸墓古墳では、これまでに周辺で実施された調査により周濠が巡ることが明らかにされている。今回の調査地は周濠の外側の周堤が推定される付近に位置しており、箸墓古墳に関連する遺構の存在が期待された。また調査地東側を走る上街道は、古代の上ツ道に由来するものと考えられており、上ツ道に関連する遺構が確認されることも想定された。

なお調査は平成19年７月９日～８月10日に実施した。調査面積は55㎡である。

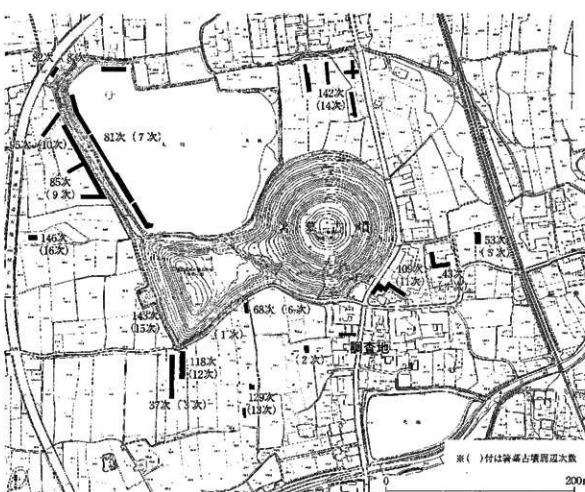


図11　纒向遺跡第151次調査地位置図（S＝1/4,000）

2．調査前の知見

（1）箸墓古墳周辺

箸墓古墳は測量図から全長276m、後円部は5段、前方部前面は4段に築成されていることが指摘されているが[2]、現在その大部分が倭迹迹日百襲姫の墓として宮内庁により管理されており、現状を観察することができない。そのような中で平成17年度に宮内庁により実施された第143次調査（箸墓15次）では、前方部前面でほぼ原位置を保つものと考えられる葺石が確認されており、前方部端を推定する上での重要な資料が得られている[2]。内部施設に関しては、墳丘周辺で大阪府柏原市芝山産の板石が採集されていることから、竪穴式石室の存在が推定されている[3]ものの、詳細は不明である。また箸墓古墳に伴う遺物としては、墳丘上で採集された特殊器台形埴輪や特殊壺形埴輪が報告されている程度である[4]。

一方で箸墓古墳の周辺では、墳丘を囲繞する周濠に関して多くの知見が得られるようになっている。周濠については以前より、後円部北東側に見られる円弧状の水田畦畔の状況などから、大規模な盾形周濠の存在が推定されてきたが[3]、発掘調査によって実際の周濠の形状が確認されるようになったのは1990年代以降のことである。第81次調査（箸墓7次）では、前方部北側の葺石と、盛土による周堤が確認され、両者の間に周濠が存在することが明らかにされた。この周濠からは布留0式期の遺物が出土しており、これにより箸墓古墳の築造時期は3世紀中頃～後半に考えられている[4]。また後円部東側で実施された第109次調査（箸墓11次）では、同様の広濠・周堤状遺構とともに、葺石を伴う渡り堤が検出されている[2]。このほか前方部南側で実施された第68次調査（箸墓6次）で検出されている遺構[4]もまた周濠である可能性が高くなっている。以上のような調査成果から、箸墓古墳の墳丘裾を巡る幅10～12m程度の周濠の姿が明らかになりつつある。

これに加えて、幅の広い「外濠」の存在が近年想定されている。大規模な濠の存在については以前から推定されてきたが、発掘調査でもその存在を示唆するような成果が得られている。上述の纒向遺跡第81次調査では、周堤の外側で大規模な落ち込みが確認された。盛土遺物から、箸墓古墳とほぼ同時期に掘削されたものであることがわかっている。この落ち込みは、西側の隣接地で実施された第85次調査（箸墓9次）でも続きが確認され[9]、第118次調査（箸墓12次）では、前方部南側でも周堤の外側に落ち込みが存在することが明らかにされた[10]。これらの調査結果と周辺の地形から推定されている「外濠」の平面形態は、幅50m前後で馬蹄形を呈するものである[11]。なおこの「外濠」推定域で行なわれた纒向遺跡第129次調査（箸墓13次）では、布留0～1式期の遺物を含む腐植土層が確認されている[12]。「外濠」の堆積物である可能性を持つものとして注意する必要があるだろう。

（2）上ツ道

古代の奈良盆地には、上・中・下ツ道と呼ばれる南北方向の直線道路が存在した。このうち上ツ道は盆地の東縁付近に位置するもので、現在の桜井市大字谷付近から天理市を経て奈良市街地に至るものと推定されている。

上ツ道に関する史料としては、『日本書紀』巻第28の壬申の乱の記事があげられるが、ここには「上

道」や「箸陵」付近での戦いの記述があり、これにより上ツ道が箸墓古墳付近を走るものであったこと、あるいは上・中・下ツ道が7世紀後半段階に既に存在していたことがわかる。しかし近年まで上ツ道に関する考古学的資料は確認されておらず、設置時期については7世紀後半の斉明朝とする考え[19]と、7世紀初頭の推古朝と見る考え[20]が存在している。位置についても、現代に至るまでこの地域における主要な南北道路であった上街道が、その痕跡を留めるものと推定されてきた。

上ツ道に関連すると見られる遺構としては、箸墓古墳北側で実施された第142次調査（箸墓14次）で確認された7世紀代の盛土状遺構が唯一のものとして挙げられる。これにより現在も残る上街道が上ツ道を踏襲するものである可能性は極めて高くなったと言うことができる。[21]

3．調査の方法と層序

（1）調査の方法

トレンチは調査対象地の南側において、東西22m、南北2.5mの規模で設定した。コンクリート基礎を除去した後、バックホーにより近現代の造成土を掘削し、旧耕作上層以下は人力により掘り下げることとした。調査の手順としては、まず上ツ道に関連する遺構の確認を目的として、洪水堆積層上面で精査を行なった。その後現代の井戸などの存在から掘り下げが困難と見られたトレンチ東側部分を除く範囲で、洪水堆積層以下を掘り下げ、箸墓古墳に関連する遺構の確認を目指すこととした。

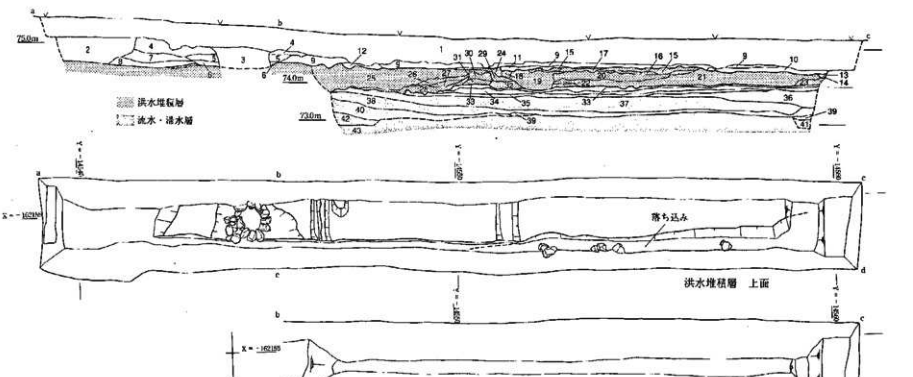
（2）各層位の状況（図12）

現地表下より近現代の造成土、旧耕作土、洪水堆積層の順に続いており、さらに下層では腐植土層と粘質シルト層あるいは砂層が交互に堆積するような状況（流水・滞水層）が確認されている。近現代造成土（1・2・4～8層）はトレンチ東側で約130cm、西側では約70cmの厚さを測り、多量の瓦礫を含んでいた。旧耕作土層（9・10層）はトレンチ南壁側では厚さ20cm程度で、洪水堆積層（15～32層）は厚さ50～60cmであった。この洪水堆積層は最大で径30cm程度の塊石を含むもので、出土遺物から5世紀末以降の堆積であることがわかる。流水・滞水層（33～43層）は、最大で厚さ120cm分を確認したが、湧水などの影響により、それ以下を確認することができなかった。ここでは腐植土層（33・35・38・40・42層）と砂層（34・36・39層）、シルト層（37・41層）などが数度にわたって形成されており、弱い流水がある時期と滞水する時期が繰り返されていたことがわかる。なおこの流水・滞水層のうち、確認できた範囲での下層（42層）より古式土師器片が出土している。

4．検出遺構

洪水堆積層の上面で精査を行なった結果、トレンチ北壁沿いで落ち込みを確認している。なおトレンチ東半部に石組井戸が存在したが、これは近現代造成土より切り込む新しい時期のものである。

落ち込み　トレンチ北壁沿いで確認された落ち込みは、深さ約20cm程度のもので、北側に向かって落ち込む状況が見られた。トレンチ内では東西方向に直線的に伸びる落ち込みの南肩部分が検出されており、長さおよそ10m分が確認されている。埋土はトレンチ南壁付近で確認されている旧耕作土



1 灰黄褐色（10YR4/2）シルト混じり強細粒砂（径20cm以下の礫を含む）　［表現代造成土］
1-1 1-1は0～50cmの間若を手当に大力　［表現代掘り込み］
2 黄灰色（2.5Y4/1）シルト（灰色シルトブロックを5%、人頭大以下の石を多量に含む）　［石積井戸］
3 黄灰色（2.5Y4/1）シルト混じり強細粒砂（灰色シルトブロックを10%、拳大の礫を含む）
4 黒褐色（2.5Y3/2）細粒砂混じり粘質シルト（灰色シルトブロックを2%含む）　［造成土？］
5 黒褐色（2.5Y3/1）細粒砂混じり粘質シルト（拳大の礫を含む）
6 灰色（7.5Y4/1）シルト（細粒砂を5%、拳大の礫を含む）
7 灰色（7.5Y4/1）シルト（拳大の礫を含む）
8 黒褐色（2.5Y3/2）極細粒砂混じりシルト（小礫含む）
9 オリーブ黒色（5Y3/2）シルト（細粒含む）　［掛絵作土］
10 オリーブ黒色（5Y3/1）粘質シルト（小礫含む）
11 黄灰色（2.5Y4/1）極細粒砂混じりシルト　［墨痕面］
12 黒褐色（2.5Y3/1）細粒砂混じり粘質シルト（拳大～人頭大の石を含む）
13 黄灰色（2.5Y4/1）細粒砂混じり粘質シルト　［落ち込み埋土］
14 灰色（5Y4/1）細粒砂混じりシルト（灰オリーブ色シルトブロックを10%含む）
15 灰色（7.5Y4/1）粘質シルト（小礫含む）
16 灰オリーブ色（5Y5/2）強細粒砂～細粒砂
17 灰色（5Y4/1）シルト～細粒砂（径1cm程度の礫含む）
18 灰黄色（2.5Y6/2）中粒砂～粗粒砂
19 灰色（10Y4/1）極細粒砂～シルト　［洪水堆積層］
20 暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂～十径20cm程度の礫
21 暗灰黄色（2.5Y4/2）強細粒砂
22 暗オリーブ灰色（2.5GY4/2）シルト
23 灰色（7.5Y5/1）シルト～中粒砂（径5cm程度の礫含む）
24 灰黄褐色（10YR5/2）粗粒砂～径5cm程度の礫（径30cm程度の礫も含む）
25 灰オリーブ色（5Y5/2）強細粒砂～細粒砂
26 26に、黒色（2.5Y2/1）黒色粘土ブロックを10%程度含む
27 暗灰黄色（2.5Y5/2）細粒砂～径5cm程度の礫
28 暗灰黄色（2.5Y5/2）細粒砂～径5cm程度の礫
29 オリーブ黒色（5Y3/1）シルト～細粒砂（黄灰色粘土ブロックを5%程度含む）
30 黄灰色（2.5Y4/1）強細粒砂～細粒含む
31 黄灰色（2.5Y4/1）シルト（細粒砂を10%程度含む）
32 灰黄色（2.5Y6/2）細粒砂～径10cm程度の礫
33 オリーブ黒色（5Y3/1）粘土～シルト（腐植土層）
34 灰オリーブ色（5Y6/2）細粒砂～中粒砂
35 黒色（5Y2/1）粘土（腐植土層　植物遺体含む）
36 灰色（5Y4/1）シルト～細粒砂
37 灰色（7.5Y4/1）粘土～シルト（上半は細粒砂に近く、下半は粘性が強い）
38 黒褐色（10YR3/2）粘土～シルト（腐植土層　植物遺体含む）
39 灰黄褐色（10YR5/2）細粒砂～径5cm程度の礫
40 黒褐色（10YR3/1）粘土～シルト（腐植土層　植物遺体含む）
41 暗灰色（2.5Y4/1）シルト（3層と非常の腐植土を一部含む）
42 黒褐色（10YR3/1）細粒砂混じり粘質シルト（腐植土層（径5cm以下の礫を含む）
43 オリーブ黒色（5Y3/1）　細粒砂混じり極細粒砂（径5cm以下の礫を含む）

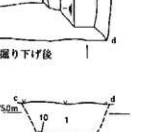


図12　トレンチ平面・断面図（S＝1/100）

層と類似するものであるが、人頭大程度の塊石を多く含むという特徴が見られた。

この落ち込みは、埋土の状況から耕作に伴うものである可能性が高いと考えられる。時期については、出土遺物が少ないため限定することは難しいが、トレンチ南壁側で確認されている旧耕作土層が中世以降のものであることから、同様の時期のものと推定される。

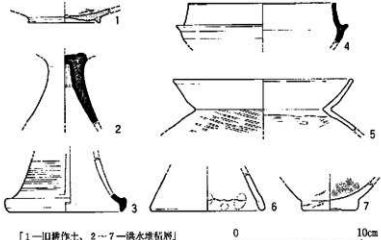


図13　旧耕作土・洪水堆積層出土土器（S＝1/3）

5．出土遺物と各層位の時期

今回の調査では、土器片を中心としてコンテナケース2箱分の遺物が出土している。図13・14では各層位の形成時期を考える上で基準となる遺物を中心に示すこととした。

旧耕作土出土遺物（図13－1）

瓦器塊の底部付近の小片であり、底面には断面形が三角形を呈する低い高台が存在する。12世紀後半から13世紀代頃のものと考えられ、旧耕作土の形成時期がこれより新しいことがわかる。

洪水堆積層出土遺物（図13－2～7）　（2）は須恵器高坏で、「ハ」字状に広がる脚部の上半部のみが残存する。（3）もまた須恵器高坏で、外反して広がる脚部を持ち、その端部は下方に屈曲する形態で、屈曲部外面には稜が形成される。脚部の外面にはカキメが施され、長方形の透孔が4方に配されている。（4）は須恵器坏身の上半部の破片で、約1/7周分が残存している。受部は外側やや上方へと短く突出し、たちあがり部は内傾し、わずかに外反して伸びる形態である。口径は11.6cmに復元される。（5）～（7）は古式土師器で、（5）は内湾する口縁部を持つ甕、（6）は台付甕の脚台部、（7）は甕の底部である。

これらのうち（5）～（7）は古墳時代初頭の3世紀後半頃、（3）・（4）については5世紀末～6世紀初頭頃の時期が考えられる。洪水堆積層の形成時期としては、後者から6世紀頃に推定され、前者については上流に存在した当該期の遺物が、洪水により流されてきたものと考えられる。

流水・湧水層下層出土遺物（図14）　確認された流水・湧水層のうち、砂礫を含む腐植土層（図12－42層）において複数の古式土師器片が検出されている。（8）は口径8.0cm、器高7.5cmを測る個体である。全体の形状としては小型の丸底鉢に類似するが、体部の外面にタタキ、内面にケズリを施すことから小型の甕と判断できる。体部は球形に近い形状で、底部は丸底である。口縁部は短く、端部は丸くおさめられている。（9）・（10）・（13）は甕の口縁部付近が残存する個体である。口縁部の形態を見ると、（9）・（10）では外反して広がり、その端部を上方につまみ上げる形態で、（13）ではほぼ直線的に伸びる形態で、端部は上方へつまみ上げている。（11）は甕で、底部は明瞭に突出する形態である。

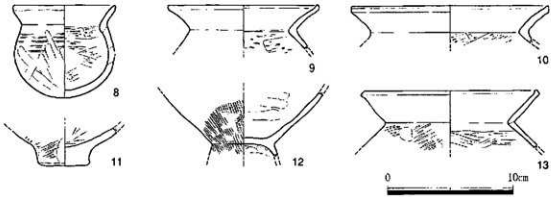


図14　流水・滞水層下層(図12－42層)出土土器（S＝1/3)

(12) はS字状口縁台付甕で、体部下半から脚台部の外面には明瞭なハケ調整が観察できる。

上記の土器のうち、時期的な特徴が現れやすい甕の口縁部付近の形態に注目すると、(9)・(10)・(13)はいずれも庄内形甕の形態を示している。特に (13) では寺沢分類における e 手法[16]の口縁部形態が見られ、庄内式期でも新しい段階に位置付けることができるだろう。出土土器が少なくこの層位の形成時期を限定することは難しいが、図14に示した土器群が庄内式期の新相に考えられることから、一連の流水・滞水層は庄内式期の新相以降に形成されたものとすることができる。

6．調査成果の評価とまとめ

今回の調査は小規模なものであったが、箸墓古墳と上ツ道という、歴史上重要な意義を持つ古墳・道路に隣接する位置において実施されている。以下ではこれらと調査成果との関係を見ていきたい。

上ツ道　今回の調査で確認された層位のうち洪水堆積層は、出土遺物から6世紀頃の堆積と推定され、7世紀代に下る可能性は低いと判断されるものであった。したがって上ツ道に関連する遺構が存在するとすれば、この洪水堆積層上面で検出されると思われたが、結果的には確認されていない。

箸墓古墳　上記の洪水堆積層の下層では、庄内式期以降に形成されたと見られる流水・滞水層が、厚さ1m以上にわたって続く状況が確認できた。これらは緩やかな流水と滞水を繰り返す状況下において形成されたものと考えられる。こうした層位の形成要因としては、調査地一帯が古墳時代初頭の段階において、低湿地状の環境にあったことによるものと考えられる。また流水堆積の介在は、比較的流水が入り込みやすい環境にあったことを示している。

この流水・滞水層と箸墓古墳の関係性を考える上では、これらの層位が形成された時期が問題となる。箸墓古墳周辺では、これまでに周濠堆積に相当する腐植土層が確認されており、布留1式期に属する土器が出土している（箸墓11次など、註記7）文献参照)。今回の流水・堆積層の中にも腐植土層が含まれているが、確認できた範囲での下層（図12－42層）出土の土器は少し古い様相を示しており、箸墓古墳の築造時期である布留0式期より先行する可能性も考えられる。

箸墓古墳の築造とこの流水・滞水層形成の先後関係を即断することはできない。しかし、少なくとも後者は箸墓古墳の築造と近い時期に形成が開始し、その後1m近く堆積する時間幅の中では、調査

地付近で大きな環境変化が無かったと考えられる。箸墓古墳の築造に際しては、冒頭にも示したように周濠掘削や土取りなどに伴う改変が墳丘周辺で行なわれたと考えられる。墳丘の至近距離に位置する調査地付近もまた例外ではなく、墳丘築造を前後して環境変化が無かったとは考えにくいであろう。堆積の時間幅をどの程度見積もるかという問題はあるが、ここでは一連の流水・滞水層の堆積は、箸墓古墳築造後のものである蓋然性が高いと考えておきたい。

上記のことを踏まえ、これまでに想定されている箸墓古墳築造プランの中で、今回の調査成果がどのような意味を持つのかを考えてみたい。調査対象地付近は、近年考えられている箸墓古墳周辺の想定復元図においては、周堤部分にあたっている[17]。確認された低湿地状の環境が、調査地の200m余り南側を流れる纒向川の後背湿地であるのか、あるいは箸墓古墳築造時の土取りにより形成された窪地であるのかを判断することは難しいが、少なくともトレンチ設定部分に周堤状の施設が存在したとは考え難い状況にあると言えるだろう。

今回の調査では、残念ながらヒツ遺に伴う遺構は確認できなかったが、箸墓古墳の周辺状況を復元する上で参考となる資料を得ることができた。箸墓古墳の全体像については、こうした調査資料のさらなる蓄積を待って、あらためて検討しなければならない。（福辻）

【註記】

1）白石太一郎他　1984「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集　国立歴史民俗博物館

2）有馬伸　2007「儀迹迫日百襲姫命大市墓見張所改築工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』58　宮内庁書陵部

3）前掲1）文献参照

4）中村一郎　笠野毅　1976「大市墓の出土品」『書陵部紀要』27　宮内庁書陵部
及び前掲1）文献参照

5）石野博信　1982「前期古墳周辺区画の系譜」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻　森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会

6）寺沢薫（編）　2002「箸墓古墳周辺第7次の調査」『箸墓古墳周辺の調査』　奈良県立橿原考古学研究所
なお「箸墓古墳周辺」次数については、上記の文献において設定され、それ以前の調査については次数がカウントされている。本文中では煩雑になることを避けるため「箸墓●次」と記した。

7）橋本輝彦　1999「纒向遺跡第109次調査概要報告（箸墓古墳陵域）」『桜井市平成10年度国庫補助による発掘調査報告書』
桜井市教育委員会

8）清水眞一　1993「箸墓古墳南隣接地の調査」『箸墓古墳南　上之宮遺跡第7次発掘調査報告書』　桜井市教育委員会

9）佐々木好直（編）　2002「箸墓古墳周辺第9・10次調査」『箸墓古墳周辺の調査』　奈良県立橿原考古学研究所

10）橋本輝彦　2001「纒向遺跡第118次調査概要報告（箸墓古墳第12次）」『桜井市平成12年度国庫補助による発掘調査報告書』
桜井市教育委員会

11）前掲5）文献参照

12）福辻淳　2003「纒向遺跡第129次（箸墓古墳周辺第13次）発掘調査報告」『桜井市平成14年度国庫補助による発掘調査報告書』　桜井市教育委員会

13）和田萃　1979「歴史編　古代」『桜井市史』上巻　桜井市役所

14）小澤毅　2002「三道の設置と五条野丸山古墳」『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所創立50周年記念論文集

15）福辻淳　2005「纒向遺跡第142次発掘調査報告（箸墓古墳周辺第14次）」『桜井市平成16年度国庫補助による発掘調査報告書』
桜井市教育委員会

16）寺沢薫　1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県文化財調査報告書34　奈良県立橿原考古学研究所
本文中における古式土師器の古式土師器の編年観は、主にこの文献を参考とした。

17）註6）文献参照

第３節　纒向遺跡第152次発掘調査報告

１．はじめに

纒向遺跡第152次調査は、桜井市大字巻野内415－2番地において、個人住宅の建築に先立って実施された。調査対象地はＪＲ巻向駅の東北東約500m、遺跡範囲の中央からやや東寄りの水田耕作地に位置している。対象地の北側一帯では纒向遺跡の中でも特殊な遺構・遺物が確認されており、第50次調査では木樋や木塁で構成される導水施設が検出され[1]、第80次調査では幅約２mの区画溝とこれに伴う柱列が見つかっている[2]。また韓式系土器（90次）や弧文板（50次）の出土も報告されており、付近が纒向遺跡の中でも重要な地区であったと考えられている[3]。また調査地の東側約150mの丘陵上には古墳時代後期の３基の前方後円墳で構成される珠城山古墳群が存在しており、対象地から市道を隔てた北側には「垂仁天皇纒向珠城宮跡」碑が建てられている。

対象地の周囲に目を向けると、西側の隣接地で実施された第29次調査において、古墳時代後期～平安時代の遺構や祭祀土器などが確認されている[4]。このことから、本調査地においても同様の時期の遺構・遺物が確認されることが推定された。なお調査は平成19年８月28日から９月26日に実施した。調査面積は144㎡である。

２．調査の方法と層序

調査トレンチは当初対象地のほぼ中央に、東西方向に長さ14m、幅４mの規模で設定した。バックホーにより現代耕作土・旧耕作土を除去したところ、地表面下約30cmで遺構面を検出している。柱穴

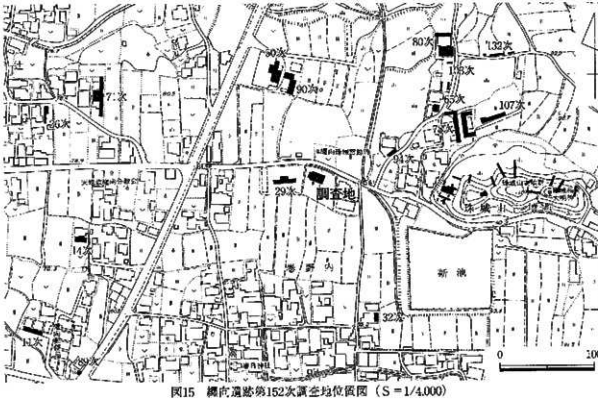


図15　纒向遺跡第152次調査地位置図（S＝1/4,000）

などの遺構の存在が確認されたことにより、再びバックホーによりトレンチの幅を北側へ5m分拡張し、さらに後述する竪穴住居の検出を受けて、西壁の一部を人力により幅2m分拡張している。

遺構面はトレンチ内の北東側では灰色粘質シルト、南西側では黄褐色シルトなどで構成されており、部分的には砂礫を多く含む部分（図16－11層）も存在した（以下ではこれらを「基盤層」とする）。なお黄褐色シルト層よりも下層にあたる黒褐色土層（図16－13層）からは、縄文土器片が出土している。

精査は上記の基盤層の上面で行ない、竪穴住居やピット、落ち込みを検出している。その後下層の状況を確認することを目的として、トレンチ南壁に沿う位置で断ち割り調査を行なった。記録作業終了後、バックホーによりトレンチを埋め戻している。

3．検出遺構

基盤層の上面において、柱穴と見られる複数のピット、竪穴住居などが確認されている。なおピットとした遺構の中には柱穴以外の用途を持つ可能性のあるものも含まれるが、形態や出土遺物からそれらを峻別することは困難である。したがってここではすべてをピットと呼称している。

柱列1～3（図16・17）　検出されたピットは計35基を数えるが、これらの中には列をなして同一の構造物を構成すると考えられるものが複数存在する。

柱列1としたものはトレンチのほぼ中央に位置し、南北方向に並ぶPit1～3で構成される。Pit1の南側ではトレンチ南壁でピットの断面が確認されており、さらに南側へと続いていたものと考えられる。各ピットは方形ないし円形に近い平面形態で、規模も40～60cmと様々であるが、埋土断面に径約15cmの柱痕跡を観察することができ、Pit2の底には楔石状の石が存在していた。柱間距離は約1.6～1.7mを測り、南北方向を指向する柵列状の構造物が推定される。

柱列2はトレンチ内の北西側部分で検出された。一辺80cm前後の隅丸方形の平面形を持つ7基のピットで構成され、Pit6～9は東西方向に、Pit9～12はほぼ南北方向に並んでおり、さらに北へと続く可能性も考えられる。Pit6より北側や東側には同様のピットが見られないことから、確認できた範囲では「L」字状に配されたものと理解できる。これらのピットのうち埋土断面に柱痕跡が確認できるのはPit12のみであるが、Pit9などでは楔石に由来すると思われる塊石が埋土中に含まれており、いずれも柱穴であると判断できる。柱間の距離は1.0～1.2mであり、「L」字状に区画する柵列状のものと推定される。

トレンチ北壁に沿う位置で検出されたPit14・15は、いずれも平面円形で径約60cmと類似する形態であり、なおかつ埋土も類似している。ともに埋土断面では径20cm程度の柱痕跡が明瞭に確認されており、同一の構造物を構成する可能性が高いと言うことができる。したがってこれらを柱列3とした。これら2基は西北西から東南東方向に並ぶが、その東西側には同様のピットは見受けられない。北側へと続くものかどうかも不明である。

その他のピット　明確に遺物を伴う遺構として、Pit5、Pit18、Pit29が挙げられる。Pit5は埋土中より高坏（図22－5）が出土しているが、底面の北寄りの部分が一段深くなっており、柱穴である

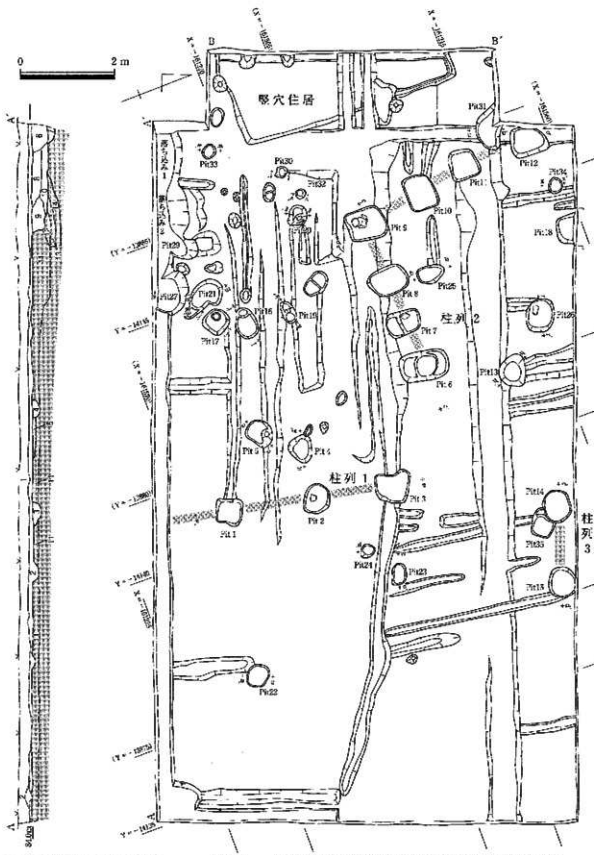


図16　トレンチ平面・断面図（S＝1/80）

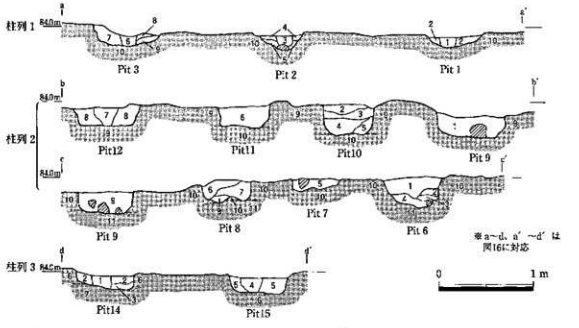


図17　柱列１～３　ピット土層断面図（S＝1/40）

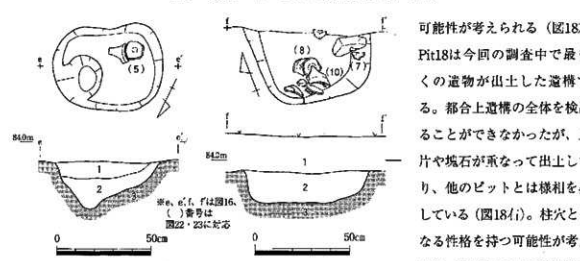
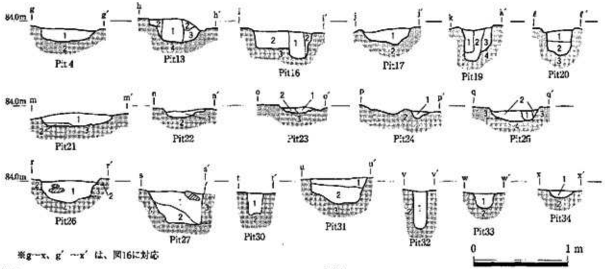


図18　Pit５、Pit18平面・断面図（S＝1/20）

可能性が考えられる（図18右）。Pit18は今回の調査中で最も多くの遺物が出土した遺構である。都合上遺構の全体を検出することができなかったが、上器片や塊石が重なって出土しており、他のピットとは様相を異にしている（図18右）。柱穴とは異なる性格を持つ可能性が考えられる。Pit29については図示することができなかったが、塊形の高坏坏部（図24－11）が出土し



※g〜x、g′〜x′は、図16に対応

<Pit4>
1 灰黄褐色（10YR4/2）細粒砂混じり粘質シルト（黒褐色粘質シルトを30%含む 炭化物粒含む） [Pit4埋土]
2 にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト～細粒砂 [基盤層]

<Pit13>
1 黄灰色（2.5Y4/1）粘土～シルト（径3cm程度の礫含む）
2 灰色（7.5Y6/1）粘質シルト（小礫含む） [Pit13埋土]
3 灰オリーブ色（7.5Y6/2）粘質シルト（小礫含む）
4 灰色（5Y6/1）砂礫層（径5cm以下の砂礫で構成） [基盤層]

<Pit16>
1 黒褐色（10YR3/2）細粒砂混じり粘質シルト（黄褐色粘土ブロック2%含む 炭化物粒含む）
2 灰黄褐色（10YR4/2）細粒砂混じりシルト（黄褐色粘土ブロック2%含む） [Pit16埋土]
3 黄褐色（2.5Y5/3）シルト～[illegible]（小礫含む） [基盤層]

<Pit17>
1 黒褐色（2.5Y3/2）細粒砂混じり粘質シルト（2のブロック3%含む 炭化物・焼土含む）
2 黄褐色（2.5Y5/3）シルト～[illegible]（小礫含む） [基盤層]

<Pit19>
1 黒褐色（10YR3/2）細粒砂混じりシルト（炭化物粒含む）
2 灰黄褐色（10YR6/2）粘質シルト（4のブロックを20%含む） [Pit19埋土]
3 暗褐色（10YR3/3）細粒砂混じりシルト（4のブロックを3%含む）
4 オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト混じり細粒砂

<Pit20>
1 黒褐色（10YR3/2）細粒砂混じりシルト（3のブロック10%程度含む 炭化物粒含む）
2 黒褐色（2.5Y3/2）細粒砂混じりシルト（3のブロック2%程度含む） [Pit20埋土]
3 オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト混じり細粒砂 [基盤層]

<Pit21>
1 暗灰黄色（2.5Y4/2）細粒砂混じり粘質シルト（黄褐色粘土ブロック2%含む）
2 暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）[illegible]混じり粘質シルト（炭化物粒含む） [Pit21埋土]
3 黒褐色（7.5YR3/2）砂礫層（径10cm以下の砂礫で構成） [基盤層]

<Pit22>
1 褐灰色（10YR5/1）粘質シルト [Pit22埋土]
2 黒褐色（7.5YR3/2）砂礫層（径10cm以下の砂礫で構成） [基盤層]

<Pit23>
1 褐色（10YR4/4）シルト（3のブロック3%含む）
2 黄灰色（2.5Y4/1）粘質シルト（3のブロック10%含む） [Pit23埋土]
3 黄褐色（10YR5/6）シルト（Mn沈着） [基盤層]

<Pit24>
1 暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト混じり[illegible]（黄灰色シルトブロック10%含む） [Pit24埋土]
2 黄褐色（10YR5/6）シルト（Mn沈着） [基盤層]

<Pit25>
1 褐灰色（10YR4/1）粘土～シルト
2 にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト混じり細粒砂（灰黄褐色シルトブロック10%含む） [Pit25埋土]
3 黄褐色（10YR5/6）シルト
4 にぶい黄褐色（10YR5/4）粗粒砂～小礫（径10cm程度の礫含む） [基盤層]

<Pit26>
1 灰黄褐色（10YR4/2）細粒砂混じりシルト（3のブロック20%含む） [Pit26埋土]
2 黄褐色（10YR5/6）小礫混じり細粒砂
3 オリーブ黄色（5Y6/3）粘質シルト [基盤層]
4 灰色（5Y6/1）砂礫層（径5cm以下の砂礫で構成）

<Pit27>
1 黒褐色（10YR3/2）細粒砂混じりシルト（径30cm程度の礫含む）
2 暗褐色（10YR3/3）シルト混じり中粒砂（4のブロック1%含む） [Pit27埋土]
3 黒褐色（7.5YR3/2）砂礫層（径10cm以下の砂礫で構成）
4 褐色（10YR4/4）シルト～細粒砂 [基盤層]

<Pit30>
1 黒褐色（2.5Y3/2）粘質シルト（径1cm程度の礫含む 炭化物粒含む） [Pit30埋土]
2 オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト混じり[illegible] [基盤層]

<Pit31>
1 にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂混じりシルト（径1cm以下の礫含む 3のブロック1%含む）
2 黒褐色（2.5Y3/1）細粒砂混じりシルト（3のブロック3%含む） [Pit31埋土]
3 暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト～細粒砂 [基盤層]

<Pit32>
1 暗灰黄色（2.5Y4/2）細粒砂混じりシルト（2のブロック2%含む） [Pit32埋土]
2 オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト混じり[illegible] [基盤層]

<Pit33>
1 黒褐色（2.5Y3/2）小礫混じりシルト [Pit33埋土]
2 黒褐色（7.5YR3/2）砂礫層（径10cm以下の砂礫で構成） [基盤層]

<Pit34>
1 黒褐色（2.5Y3/2）小礫混じり粘質シルト [Pit34埋土]
2 明褐色（7.5YR5/6）粗粒砂～小礫（径1cm程度の礫多く含む） [基盤層]

図19 その他のピット土層断面図（S＝1/40）

ている（図版18）。

この他のピットについては可能な限り土層断面図を図19に示した。中にはPit13・16・19のように柱痕跡が明瞭なもののほか、Pit21のように残存部が浅いものもあり、性格は一様ではないと思われる。また後述するように、時期も様々であると考えられる。

竪穴住居（図20） トレンチの西端部分で、方形の平面形を持つ竪穴住居が確認された。この部分では当初住居の南東隅部分が検出されたことを受けて、トレンチ西側に可能な限り拡張を行なっている。その結果北東隅部分を確認し、これにより住居の東側辺の長さが4.6mであることが明らかとなった。住居の側辺は概ね方位に平行するものであった。

耕作土を除去して上面を検出した段階では、基盤層のシルトブロックを少量含む黒褐色土（3層）が住居の上面を広く覆っていた。また南東隅に近い位置では炭化物や焼土が面的に広がり、それに近

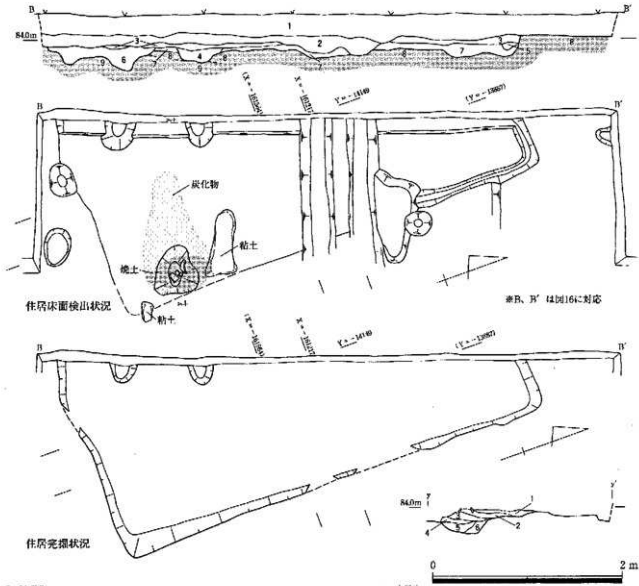


図20　竪穴住居 平面・断面図（S＝1/40）

接して褐灰色の粘土塊が見られた。このうち炭化物や焼土は炉に伴うものと考えられ、住居の南東隅に近い位置に炉の存在を想定することができる。また粘土塊については、竈を構成するものであったと推定される。

3層及び炭化物・焼土を除去すると、基盤層を起源とするシルトブロックを多量に含んだにぶい黄褐色土（7層）が広く存在していた。これは床面の整地土に相当するものと考えられ、この上面で周壁溝（5層）が検出されている。周壁溝は住居検出範囲の北側部分では残存していたが、南側部分では後世の耕作による撹乱が深くまで及んでいるためか、検出されなかった。このほか南東隅部分では竈を構成するものと推定される浅い凹みが存在し、トレンチ西壁に沿う位置でもピット状の遺構が検

出されている。

その後整地土を除去し、住居検出範囲で底面を検出した。底面には凹凸が見られたが、下層遺構などは検出されなかった。

4．出土遺物と遺構の時期

（1）柱列関連遺物と時期

柱列2関連遺物（図21）　ピット埋土中より出土した遺物を図示した。いずれも小片であり、ピット内に意図的に入れられたと考えられるものは存在しない。（1）～（3）は、古式土師器の甕の口縁部である。（1）は口縁部の外面に擬凹線文が巡らされており、北陸系の甕と考えられる。（2）は内湾してその端部が内側に肥厚する口縁部を持ち、（3）は外反して端部を上方につまみ上げる口縁部を有する。（4）は須恵器甕の胴部片と考えられ、内面には同心円状のあて具痕が見られる。外面はタタキ調整ののち、ヨコ方向のカキメが施される。

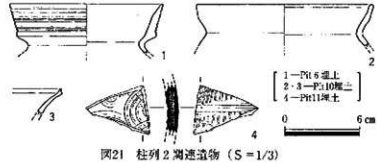


図21　柱列2関連遺物（S＝1/3）

柱列2の時期　図21に示した遺物のうち、（1）～（3）については古墳時代初頭頃、（4）については古墳時代後期頃の時期が考えられる。いずれも直接的に柱列の時期を示すものではなく、柱列に先行する時期の遺物が埋土に含まれたものと言えるだろう。これにより柱列2の時期は、少なくとも（4）の示す時期よりも新しい古墳時代後期以降に考えられる。

その他の柱列の時期について　柱列1・柱列3については、その時期を示唆するような遺物が得られておらず、時期不明としなければならない。しかし、両者は概ね直交する方向に並ぶものであり、近い時期に存在した可能性も考えられる。またこれらの柱列の方向は、柱列2のそれとは異なっており、時期的な隔たりがあるものと推定される。時期および前後関係が不明であるため、ここでは時期差が存在する可能性を指摘するにとどめておきたい。

（2）ピット出土遺物と時期

Pit 5 出土遺物と時期（図22）　古式土師器の高坏（5）1点が出土している。有段高坏と呼ばれる形態で、口縁部が体部より立ち上がったのちに外側へ屈曲し、大きく広がる形態を有している。庄内式期の新相によく見られる形態であり、寺沢編年[5]の庄内3式かそれに就後する時期のものと考えられる。Pit 5においては他に出土遺物がなく、その所属時期も同様に考えることができる。

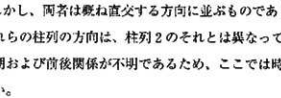


図22　Pit 5 出土土器（S＝1/3）

Pit18出土遺物（図23）　（6）は土師器坏あるいは高坏と考えられる個体で、口縁上半部は内湾し、その端部は丸くおさめている。外面にはタテハケ調整が見られる。（7）は土師器高坏で、中空

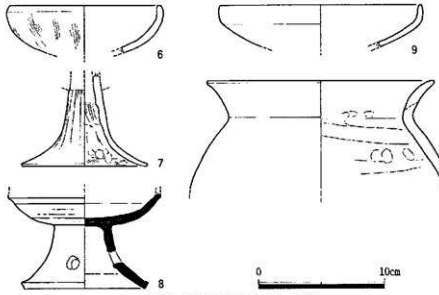


図23　Pit18出土土器（S＝1/3）

の脚柱部に外反して広がる脚裾部が伴う個体である。脚柱部の内面にはシボリ痕、脚裾部の内面にはヨコ方向のハケメや指オサエ痕が観察できる。（8）は須恵器高坏である。脚は低脚の部類で「ハ」字状に外反する形態であり、その中ほどに円形透孔が3方に開けられている。坏部は上半が欠われているが、体部と口縁部の境界外面に明瞭な稜が存在していることから、無蓋高坏である可能性が高いと言えるだろう。（9）は坏形の土師器である。高坏の可能性も考えられる。（10）は外反する口縁部を持つ土師器甕である。体部内面はヨコナデにより仕上げられている。

Pit18の時期　Pit18はそれほど大きなものではなかったが、他の遺構とは異なり、比較的まとまった量の遺物が出土している。このうち須恵器高坏（8）は、脚部の約90%が残存しており、偶然的にまぎれ込んだものとは考え難い状況にある。（8）は長脚化の傾向が見られるMT15型式期[5]以前に属するものと考えられ、5世紀末頃の時期が考えられる。したがってピット18の時期についても、5世紀末頃と考えてよいであろう。

その他のピット出土遺物と時期（図24）　Pit29より古式土師器の高坏（11）、Pit35より土師器皿（12）、黒色土器椀（13）が出土している。（11）は庄内式期のものと見られ、これによりPit29の時期は3世紀代に考えられる。Pit35は9～10世紀のものと考えてよいであろう。

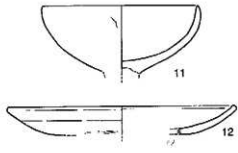


図24　その他のピット出土土器（S＝1/3）

（3）竪穴住居出土遺物と時期

竪穴住居出土遺物（図25）　竈の存在が推定される南東隅の浅い凹みより、炭化物・焼土とともに長胴の胴部を持つ土師器甕（14）、土師器鉢と考えられる個体（15）が破片となって出土している。また床面を形成する整地土中より須恵器坏蓋（16）が出土している。（16）は口縁部付近のみが残存する個体で、体部と天井部の境界が明瞭ではなく、口縁端部は丸くおさめられている。

竪穴住居の時期　出土遺物が少なく、時期を限定して考えることは難しい。しかし整地土中より出土した須恵器蓋（16）がTK209ないしTK217型式期頃のものと考えられることから、7世紀初頭

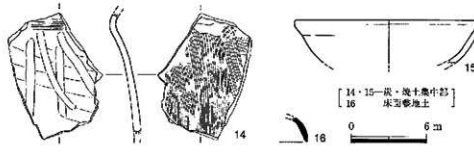


図25 竪穴住居出土土器（S＝1/3）

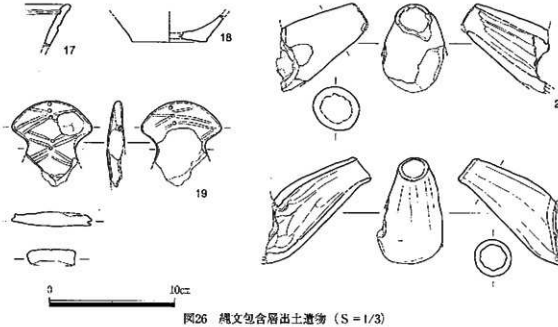


図26 縄文包含層出土遺物（S＝1/3）

頃を上限とすることができる。(14)・(15) についてもこれと大きな時期差が考えられないことから、これに基づき、7世紀前半頃の時期を推定しておきたい。

（4）縄文包含層出土遺物と時期

縄文包含層出土遺物（図26）　これまで見てきた遺構の基盤となる層（図16－11～14層）を一部断ち割った結果、若干量の縄文時代遺物が検出されている。(17) は深鉢の口縁部、(18) は深鉢の底部付近の小片である。前者では口縁下の内外面に沈線が観察できる。

(19) は性格不明の土製品である。完形の状態にはなく、全体像もまた不明である。残存部分は長さ6.9cm、幅6.4cmで、全体に1.0～1.5cmほどの厚みを有しており、分銅形に近い平面形態を推定することができる。両面の平面部分には、径0.25cmほどの円形の刺突が残存部の主軸に沿って複数存在し、一部は列点状に並んで配されている。またその刺突を中心として「X」字状に複数の沈線が施される状況が観察できる。なお円形の刺突は、図の左右方向に突出する部分の側面にも見られる。

(20)・(21) は、注口土器の注口部分である。ともに基部から先端側に向かって断面径が小さくなる形態で、長さは (20) で8cm前後、(21) で10cm余りを測る。外面は凹凸なく仕上げられるが、内面には整形時のナデ痕跡が深く残存している。いずれも体部を欠いており、全体の形状は不明である。

出土遺物の時期　上記の遺物は遺構に伴うものではなく、同時期のものとして一括することはできないが、いずれも縄文時代後期中頃から後半のものと理解できる。[7] これにより遺構の基盤層が縄文時代後期後半以降に形成されたと考えることができる。いっぽうで、今回調査地の西側で実施された第29次調査では、遺構基盤層より縄文時代晩期の遺物が出土している。[8] このように両者の間には時期差が見られることから、付近における古墳時代以降の遺構の基盤層は、縄文時代後期後半から晩期までの長い時間幅の中で形成されたものであると理解することができる。

5．まとめ

今回の調査では柱列や竪穴住居など複数の遺構が確認された。このうち「L」字状にピットが並ぶ柱列2は、概ね方位に沿って配置されているものと見ることができる。出土遺物から古墳時代後期以降のものと推定され、同様に方位に沿うように配された竪穴住居についても、これに近い時期である可能性が考えられる。

このように古墳時代後期以降の遺構・遺物が存在する状況は、すでに触れた西側隣接地の第29次調査においても見ることができる。相互の遺構の関係性は明確ではないが、少なくとも今回の調査地一帯に古墳時代後期～飛鳥時代の遺構が複数存在する可能性を指摘しておきたい。なお纒向遺跡で通有多く見られる古墳時代前期の遺構は、上記の時期の遺構よりも希薄であるということができる。

今回確認された古墳時代後期以降の遺構を理解する上では、調査地の東方に近接して立地する珠城山古墳群の存在が注意される。3基の前方後円墳で構成される珠城山古墳群は6世紀前半から後半に築造されたと考えられ、今回確認された遺構の中にはこれに近い時期に属する可能性があるものも存在する。しかしこれらの遺構を珠城山古墳群の造営集団と結びつけて理解するには、現状では根拠が乏しいと言わねばならないだろう。今後の周辺での調査において同時期の遺構が確認された際には、そうした関係性を検討する必要がある。（福辻）

【註記】

1）萩原儀征　1987『纒向遺跡発掘調査概報』桜井市埋蔵文化財発掘調査概要1987－7　桜井市教育委員会
　橋本輝彦　1997『纒向遺跡第90次発掘調査概要報告』『奈良県桜井市平成8年度国庫補助事業による発掘調査報告書』桜井市教育委員会
2）橋本輝彦　1995『纒向遺跡第80次発掘調査報告』『桜井市平成6年度国庫補助による発掘調査報告書2』桜井市教育委員会
3）註2）文献を参照
4）萩原儀征　1982『纒向遺跡－昭和56年度遺跡範囲確認発掘調査概報－』桜井市教育委員会
5）寺沢薫　1986『纒向古式土師器の編年と二・三の問題』『矢部遺跡』奈良県文化財調査報告書34　奈良県立橿原考古学研究所
　本文中における古式土師器の編年観は、主にこの文献を参考とした。
6）田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
　本文中における須恵器の編年観は、主にこの文献を参考とした。
7）奈良県立橿原考古学研究所 福西貴彦氏のご教示による。
8）註4）文献を参照
9）井関恵二（編）　2007『国史跡　珠城山古墳』桜井市教育委員会

第４節　纒向遺跡第153次（東田大塚古墳第５次）発掘調査報告

１．はじめに

纒向遺跡は古墳時代前期を中心とする時期の大規模な集落遺跡として知られている。その範囲は桜井市北部の大字太田・巻野内・辻・東田を中心とする東西約２km、南北約1.5kmの範囲に及び、遺跡の東縁は纒向川などにより形成される扇状地の大半を包摂し、西側は奈良盆地東南部の沖積地の一部を含んでいる。これまでに30年以上にわたって150次を超える調査が実施され、多くの外来系土器や特殊な遺構・遺物の存在が確認されている。また遺跡内には箸墓古墳をはじめとして、古墳出現期の大型墳墓が複数存在することが知られており、この地に３世紀代の日本列島における中心的な集落が存在したと考えられている[1]。

東田大塚古墳は纒向遺跡の西端に近い平地部に立地しており、現状では耕作地の中に径60～70m、高さ約７mの円形の高まりを確認することができる。またその南西側には長さ約16m、高さ１m程度の高まりが突出するように接続しており、これよりさらに南西側には周辺の地割に対して斜行する畦畔が続いている。こうした現状の地形・地割から、東田大塚古墳は南西方向に前方部を向ける全長100m前後の前方後円墳であると考えられてきた[2]。

纒向遺跡第153次調査は東田大塚古墳の第５次調査として、前方部前面付近の状況を確認することを目指して実施された。調査期間は平成19年12月10日～平成20年２月25日、調査面積は約72㎡である。

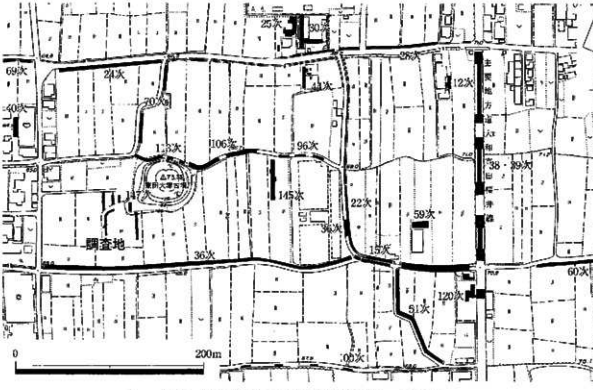


図27　纒向遺跡第153次調査地位置図（S＝1/4,000）

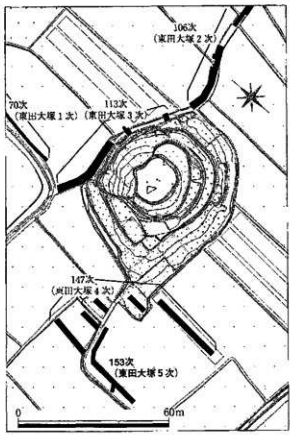


図28　調査トレンチ位置図（S＝1/1,500）

2．既往の調査

東田大塚古墳ではこれまでに、農道整備に伴って行なわれた3次にわたる調査と、墳丘形態の確認を目的として実施された平成18年度の調査の、計4件の発掘調査が実施されている。[3]

後円部の北西側で行なわれた第1次調査（縄向遺跡第70次、平成4年度）では、後円部より約20m離れた地点において南に落ち込む遺構が確認されているが、これは後述する調査成果から東田大塚古墳墳丘を巡る周濠状遺構に相当するものと認定されている。[4]後円部の北東側で実施された第2次調査（縄向遺跡第106次、平成9年度）では、墳丘盛土がはじめて検出され、後円部北東側の墳丘端が確認された。また幅約20mの周濠状遺構の存在が明らかとなり、その外肩部分で土器棺墓が検出されている。続く第3次調査（縄向遺跡第113次、平成10年度）では、後円部北西側で周濠状遺構や墳丘盛土、墳端が確認されたほか、墳丘盛土の下層において古墳築造以前の遺構が検出されている。

平成18年度の第4次調査（縄向遺跡第147次）では、前方部の北斜面と南側面を検出し、後円部から南西にのびる畦畔が前方部北側面に由来するものであることを確認した。これにより墳丘全長は108m以上を測ることが明らかとなった。また前方部南側では周濠状遺構の外肩を確認しており、その平面形態が主軸を挟んで対称とならない可能性が高くなった。[5]

以上のような調査成果や現状の地形から、東田大塚古墳は径約68mに復元される後円部を持ち、その周辺には幅20m程度かそれ以上の周濠状遺構が存在することが明らかとなった。

築造時期については、古墳築造以前の遺構が布留0式期の古相段階までのものであり、周濠状遺構の出土遺物が布留0式期新相段階に位置付けられることから、布留0式期の間（3世紀後半頃）に限定して考えることが可能となった。

3．調査トレンチの位置と形態

東田大塚古墳の前方部前面の確認を目的として、墳丘残存部南西側の水田・畑作地（桜井市大字東田158番地）の西側部分に調査トレンチを設定している。トレンチは畦畔に沿って屈曲する形態で、屈曲部より南側部分は南北方向に長さ23m、幅2m（以下では「南区」と呼称する）、北側部分はトレンチ幅が1.5mとやや狭く、南西から北東方向へ長さ約14m（以下では「北区」と呼称する）の規模で設

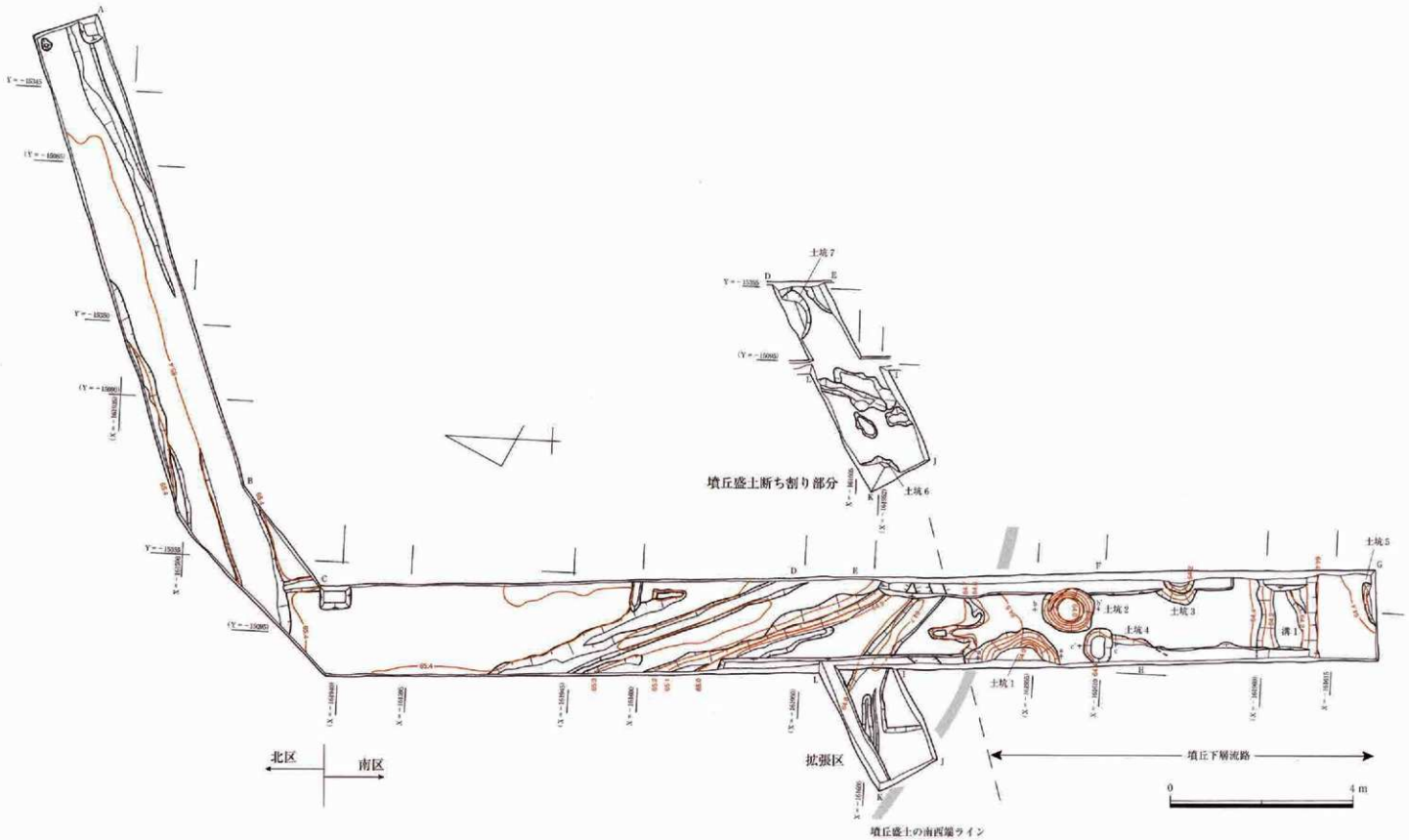


図29　トレンチ平面図（S＝1/80）

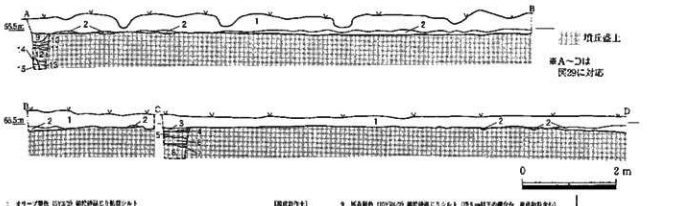


図30　トレンチ北側　南壁・東壁土層断面図（S＝1/80）

定した。その後南側部分では幅1.5m、長さ約２mの拡張を行ない〈以下では「拡張区」と呼称する〉、最終的な調査面積は約72㎡となっている。

4．確認された層序

北区の状況〈図30〉　現状の地表面から深さ約40cmまでは現在の耕作土（１層）が存在し、一部ではその下に薄く旧耕作土（２層）が見られた。これら耕作土の直下にはブロック混じりの黒褐色土やにぶい黄褐色土などが厚さ70cm以上にわたって存在していた〈３～13層〉。この黒褐色土・にぶい黄褐色土は南区にも続いており、後述するように東田大塚古墳前方部の墳丘盛土と解釈されるものである。このように近現代の耕作土の直下に墳丘盛土が残存していたことから、北区周辺では、比較的最近まで前方部が高まりとして残っていたものと推定される。

南区の状況〈図30・31〉　南区の北半部は北区と同様の状況にあるが、南半部では旧耕作土あるいはそれに由来する埋め土〈図31－２層〉が厚く存在し、その厚さは約60cmを測る。これは近世のある段階まで、南区の中央付近に南西に向かって下がる50cm程度の段差が存在し、その後段差の低い部分に土を入れ、水田が西側に拡張されたことに由来すると考えられる。北区でも見られた墳丘盛土は、段差の高い部分では厚さ約80cm分が残存し、段差の低い部分の一部でも20cm余りが存在していた。また段差の南西契では、墳丘構築後に形成された土層〈図31－４～８層〉が存在する。これらについては後で詳述したい。

なお８層の下層には暗灰黄色シルト層（78層）、暗灰黄色砂礫層（81層）などの、流水堆積層が続いている。これらは墳丘盛土の下にも続いており、東田大塚古墳よりも先行する流路堆積として理解することができる〈78～83層、墳丘下層流路〉。この墳丘下層流路は、トレンチ南端より北へ９m余りのところで北肩が確認されており、固くしまった黒色粘土層〈84層、基盤層〉を切り込んでいる。墳丘下層流路堆積の上面からは土坑３、溝１などの遺構が切り込んでおり、黒色粘土層の上面でも墳丘築

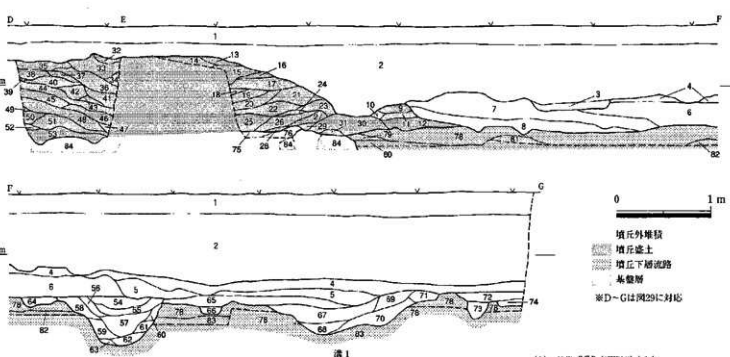


図31　トレンチ6号墳　墳丘断面図（S＝1/100）

（1）　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト

1　オリーブ黒色（5Y3/2）　締まり強くち密なシルト　　[現代耕作土]
2　明褐黄色（2.5Y4/3）　粘質が強くち密なシルト（第1a層堆積の構造が）　[墳丘土]
3　黒褐色（2.5Y3/2）　粘質が強くち密なシルト　　[主体部]
4　褐灰色（10YR4/1）　軽石多・中粒多（第1a層堆積の構造が）
5　褐灰色（10YR5/1）　褐灰色・褐粒多（第1a層堆積の構造が）　[墳丘外堤積]
6　黒褐色（10YR2/2）　褐粒多（第1a層堆積の構造が）
7　黒褐色（10YR2/3）　褐粒多（第1a層堆積の構造が）
8　黒褐色（10YR2/3）　褐粒多（第1a層堆積の構造が）
9　黒褐色（10YR3/1）　褐粒多（第1a層堆積の構造が）
10　黒褐色（2.5Y3/2）　褐粒多（第1a層堆積の構造が）
11　黒褐色（10YR3/2）　シルト質ち褐粒多
12　黒褐色（2.5Y3/2）　褐粒多（第1a層堆積の構造が）
13　黒褐色（2.5Y3/2）　褐粒多（第1a層堆積の構造が）
14　にぶい黄褐色（10YR4/3）　褐粒多（第1a層堆積の構造が）
15　黒褐色（2.5Y3/1）　シルト・褐粒多
16　オリーブ黒色（5Y4/2）　褐粒多（第1a層堆積の構造が）
17　黒褐色（2.5Y3/1）　シルト
18　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
19　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
20　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
21　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
22　にぶい黄褐色（10YR4/3）　褐粒多（第1a層堆積の構造が）
23　黒褐色（2.5Y4/1）　褐粒多（第1a層堆積の構造が）
24　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
25　にぶい黄褐色（10YR4/3）　褐粒多（第1a層堆積の構造が）
26　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
27　灰色（5Y5/1）　粘土ベース（現代盛土）
28　オリーブ黒色（5Y3/1）　褐粒多（第1a層堆積の構造が）
29　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
30　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
31　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
32　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
33　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
34　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
35　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
36　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
37　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
38　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
39　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
40　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
41　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
42　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
43　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
44　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
45　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
46　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
47　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
48　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
49　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
50　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
51　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
52　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
53　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
54　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
55　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
56　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
57　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
58　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
59　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
60　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
61　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
62　黒色（5Y2/1）　シルト～粘土　[墳丘下層流路]
63　オリーブ黒色（5Y3/1）　シルト質ち礫混
64　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
65　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
66　オリーブ黒色（5Y3/2）　シルト質ち礫混
67　灰色（5Y4/1）　シルト・褐粒多　[墳丘盛土]
68　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
69　黒色（2.5Y2/1）　粘土
70　黒褐色（10YR3/1）　褐粒多（第1a層堆積の構造が）
71　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
72　黒褐色（2.5Y3/1）　粘粒多（第1a層堆積の構造が）
73　オリーブ黒色（5Y3/1）　粘土（5Y3/2ブロック1%含む）
74　明褐灰色（2.5Y6/2）　褐粒多（第1a層堆積の構造が）　[墳丘盛土]
75　黒色（2.5Y2/1）　粘土（5Y3/2ブロック2%含む）
76　灰色（5Y4/1）　シルト・褐粒多（オリーブ黒ち～シルトブロック10%含む）
77　灰色（5Y4/1）　シルト・褐粒多（オリーブ黒ち～シルトブロック10%含む）
78　褐灰色（10YR4/1）　褐粒多（5Y3/2ブロック1%含む）
79　黒色（2.5Y2/1）　粘土（5Y3/2ブロック1%含む）
80　灰色（5Y4/1）　シルト（5Y3/2ブロック1%含む）
81　黒色（2.5Y2/1）　粘土（5Y3/2ブロック1%含む）
82　黒色（2.5Y2/1）　粘土（5Y3/2ブロック1%含む）
83　黒色（2.5Y2/1）　粘土（5Y3/2ブロック1%含む）
84　黒色（2.5Y2/1）　粘土（5Y3/2ブロック1%含む）

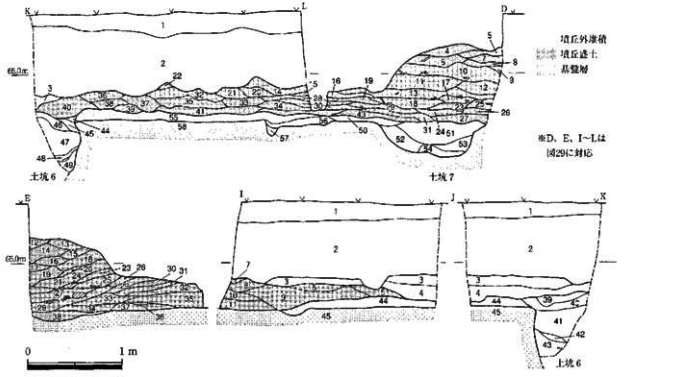


図32　墳丘盛土断ち割り部分　土層断面図（S＝1/40）

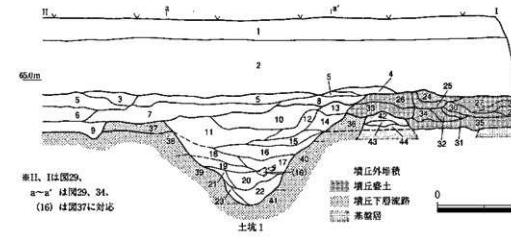


図33　トレンチ西壁　土坑1付近土層断面図（S＝1/40）

造に先行する遺構が確認されている。

拡張区の状況（図32）　南区南半の状況と基本的に共通しており、黒色粘土層（上段の58層、下段の45層、基盤層）の上に墳丘盛土、その上に暗灰黄色土、黒褐色土、厚い耕作土が堆積する。墳丘盛土の下層、基盤層の上面からは土坑6などの遺構が切り込んでいる。

5．検出遺構

（1）東田大塚古墳に関連する遺構

前方部端について　今回の調査では、東田大塚古墳前方部に相当する部分の墳丘盛土が確認されている。盛土の平面的な広がりを見ると、トレンチのうち北区の全体と南区の北半部、拡張区のほぼ全体まで、盛土の範囲が及んでいる。この盛土の南西端ラインを図29に示しているが、概ねそのラインは西北西－東南東方向に走るものである。調査当初、前方部前面の墳端ラインは北西―南東方向を指向するものと想定された。しかし今回確認された墳丘盛土端のラインは、当初の想定とはやや異なるものであった。これについては後で検討することとしたい。

周濠状遺構について　東田大塚古墳の周濠状遺構の存在については、すでに過去の調査において明らかとなっている。しかしその全体像は明らかではなく、少なくとも墳丘主軸を挟んで対称な形態ではないことがわかっている。今回の調査においても、周濠内の堆積層である可能性を有する土層が

確認されているが、これも含めて以下で見ていくこととしたい。

検出された墳丘盛土の南端付近の状況を見ると、南区の西壁に沿う位置では土坑1により切り込まれているが（図33）、東壁に沿う位置では盛土上端のラインが南側へ傾斜して収束し、その傾斜面に黒褐色～黒色の粘質シルト層（図31－6～8層）、その上層に砂礫層（4・5層）が覆い被さるような状況が確認できる。これらは土質や堆積の状況から墳丘盛土と判断されるものではなく、また層位関係から盛土より後出のものであることが明らかである。これらのうち下層にあたる7・8層などは粘質土ではあるが、第4次調査（縄向遺跡第147次）第1トレンチの周濠状遺構で見られた腐植土層などとは異なるものであった[61]。いずれにせよこの4～8層は、墳丘の外側に堆積していることは明らかである。以下ではこれらの層およびこれらに相当する土層を「墳丘外堆積」と呼ぶことにする。

次に墳丘盛土と、その基盤となる黒色粘土層・墳丘下層流路堆積の関係を見ていきたい（図31）。墳丘盛土は層序関係から、黒色粘土層（84層）や墳丘下層流路堆積（78～83層）の上面に築造されていることが明白である。過去の調査で墳端が確認された部分では、墳丘の下部は基盤層（あるいは古墳に先行する遺構埋土・包含層）で構成されていることがわかっている。すなわち墳丘際を掘削して削り出し、その上に盛土を構築していると推定することができる。しかし今回調査部分では、墳丘盛土下の基盤層上面レベルと、墳丘より外側と見られるトレンチ南端付近の墳丘下層流路堆積の上面レベルに大差が無く、上記のような削り出し部分が存在しないことがわかる。つまり、今回調査トレンチ内で前方部前面が推定される部分では、2m以上の高さを有したであろう前方部はすべて盛土により構築されていたと考えられるのである。

このように、前方部前面付近では墳丘構築に伴う掘削が行なわれた痕跡は見られず、付近に周濠状遺構が存在した可能性は極めて低いと言えるだろう。周辺は西側が低くなる地形環境にあり、仮にこの部分に周濠を推定するとすれば、前方部前面の西側に外堤の存在を想定しなければならない。しかし墳丘裾には上記の墳丘外堆積が見られ、明確な溜水層が形成されていない現状からすると、そうした想定は根拠を欠くものと言わざるを得ない。

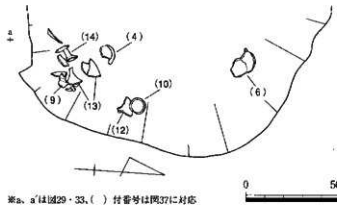
前方部の墳丘盛土　前方部墳丘盛土は基盤層の黒色粘土層上に厚さ約80cmが残存していたが、盛土の上面はすでに見たように近現代の段階にも削られており、本来の前方部の高さは不明である。第4次調査（縄向遺跡第147次）の成果から、クビレ部付近では2m以上の高さが存在したことが明らかであり、これを参考とすると少なくとも1m以上削平されていると考えられる。

墳丘盛土の土層断面は、拡張区と南区の一部の新ち割り部分において観察することができた（図31～33）。基盤層起源の黒色粘土ブロックやにぶい黄褐色シルトブロックを多く含んでおり、厚さ5～20cm程度に分層される盛土の単位が確認されている。その構築方法がもっともわかりやすく観察できる部分としては、南区の中ほど、図29中のE付近の状況が挙げられる。まず図31に示した範囲の北側部分（D－E間）を見ると、南低に向かって傾斜するように盛土されていることがわかる（32～53層）。いっぽうこれより南側では、概ね北側に向かって傾斜するように積み上げられる（13～29層）。また図32に示した墳丘盛土断ち割り部分の南壁では、東側が低くなるような積み上げ方である（12～37層）。

したがってこの南区中央付近では、北・南・西側からE地点付近に向かって順次盛土されている状況を考えることができる。

（2）東田大塚古墳築造前後の遺構

層位関係から東田大塚古墳築造に先行することが明白な遺構としては、墳丘盛土下で検出された土坑6・7、墳丘下層流路などが存在する。同様に層位関係から古墳築造以後に属することが明らかなのは、土坑1のみに限られる。このほか土坑2～5、溝1などの遺構が検出されているが、これらは層位的に東田大塚古墳との前後関係を判断することはできない。この前後関係については、後述する遺物の状況などを参考とし、検討することとしたい。



※a、a'は図29・33、（ ）付番号は図37に対応

図34　土坑1 上層土器出土状況（S＝1/20）

土坑1（図33・34）　南区南半部のトレンチ西壁に沿う位置において、この遺構の東半部分が検出されている。平面形は径1.6m以上の円形のものと推定され、断面形は底部にむかってすぼまる擂鉢状の形態で、検出面からの深さは約90cmであった。この土坑1は、上面は墳丘外堤積（図33－5～8層）により覆われており、北肩部分は東田大塚古墳の墳丘盛土上面から、南肩付近は墳丘下層流路堆積（36～41層）の上面より切り込んでいる。したがって土坑1は東田大塚古墳の墳丘築造後に掘削されたものであり、土坑1埋没後に墳丘外堤積が形成されていることが明らかである。

土坑内の埋土は上層・中層・下層の3層に大別が可能である。上層は黒褐色の砂質土（図33－10～15層）、中層はオリーブ黒色～黒色の粘質土（16～19層）、下層は腐植土層（20層）や粘質土層（22層）、砂礫層（23層）、などで構成される。このうち上層と中層では遺物が出土しており、特に上層では南肩に近い位置を中心に、比較的まとまった量の土器が検出されている（図34）。土器の詳細については後述するが、いずれも古墳時代前期に属するものと考えられるものであった。

このように土坑1では、土器の出土が見られたほかは特徴的な遺物は見られなかった。東田大塚古墳墳丘下層の流路堆積を掘削しており一定量の湧水が得られることから、井戸のような用途を持つものと推定しておきたい。

土坑2（図35）　南区の南半部、土坑1の南東側に近接する位置で検出されている。平面形態は径1.0～1.2mの円形に近いもので、断面形は半坦な底部から急角度で壁面が立ち上がる逆台形を呈している。検出面からの深さは65cm前後である。東田大塚古墳墳丘下層の流路堆積層（図31－78～83層）上面より切り込んでおり、埋没後に墳丘外堤積（図31－4～8層）により上面を覆われている。

埋土は上層・中層・下層に大別され、上層は粘土・シルトブロックを多く含んだ黒褐色土（図35－1～4層）、中層は黒褐色の粘質シルト（5層）、下層は砂礫やシルトブロックを含む黒褐色粘質土

（6～10層）で構成される。遺物は各所位に土師器小片が見られたほか、中段において小型の甕（図39－24）が完形に近い状態で検出されている。

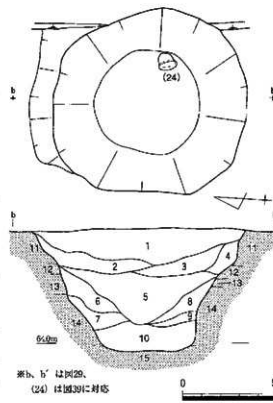
この土坑2は土坑1と同様、東田大塚古墳に先行する流路堆積層を掘削している。特に底面付近は流路堆積の中の砂礫層（15層）に達しており、湧水量は土坑1よりもかなり多いものであった。断面形態や埋土の状況などを考えあわせると、土坑2は素掘りの井戸であると理解できるだろう。

土坑3（図31）　南区の南半部、土坑2の南側約1.6mで検出されている。径1m以上の円形の平面形態を持つものと考えられ、底に向かって狭くなる擂鉢状の形態を呈している。検出面からの深さは約50cmである。上層は黒褐色の粘質土層（54～56層）、中層は黒色粘土層（57層）、下層はシルトブロックを多く含む粘質土層など（58～63層）で構成されている。土坑2と同様、東田大塚古墳下層の流路堆積上面より切り込んでおり、埋没後に墳丘外堤積により覆われている。

この十坑3からは古式土師器片が出土しているが、それらは残存率が低く、また量もそれほど多くはない。また検出範囲も一部分にとどまっており、今回の調査では土坑3の性格を推定し得る資料を得ることはできなかった。

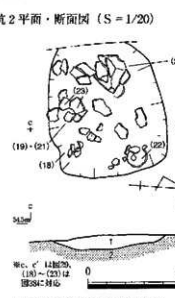
土坑4（図36）　南区の南半部、土坑2の南西に接する位置で検出されている。平面形は一辺70cm前後の隅丸方形に近いもので、深さ10cm程度が残存しているに過ぎなかった。土坑2・3と同様に東田大塚古墳下層の流路堆積上面で検出され、埋土上面は墳丘外堤積により覆われていた。埋土中からは図38に示した古式土師器が出土しているが、この遺構の性格を推定できるような資料は得られていない。

土坑5（図29）　トレンチの南端において、土坑の北肩がわずかに検出されている。土坑2～4と同様に墳丘下流路堆積の上面から切り込み、埋没後に墳丘外堤積により覆われている。



※b、b'は図29、(24)は図39に対応

図35　土坑2平面・断面図（S＝1/20）



※c、c'は図29、(18)～(23)は図38に対応

図36　土坑4平面・断面図（S＝1/20）

検出範囲がわずかであるため形態や時期は明らかではないが、土坑2や3と類似するものと推定される。

土坑6（図29・32）　拡張区北西隅部分の、東田大塚古墳墳丘下層において検出されている。黒色粘土の上面を覆う暗褐色砂層（図32上段－55層）上面より切り込んでおり、深さは少なくとも60cmを測るが、さらに深いものと推定される。埋土はシルトを含む極細粒砂～細粒砂が中心であり（図32上段－44～49層、下段－39～43層）、土師器甕（図39－25）などが出土している。検出範囲が限られており、用途については明らかでない。

土坑7〈図29・32〉　南区中央付近の墳丘盛土断ち割り部分で検出された。基盤層である黒色粘土層（図32上段－58）上面より切り込んでおり、埋没後にその上面に東田大塚古墳墳丘が築造されている。平面形は径1m程度の円形のものと考えられ、深さは約40cmを測る。埋土は主に極細粒砂～細粒砂で構成され（51～54層）、わずかに古式土師器片が出土している。

溝1（図29・31）　トレンチ南端より1.2m北側において、東西方向に走る幅1.5～1.8m、検出面からの深さ40cm余りを測る溝が検出されている。土坑2～5と同様に、東田大塚古墳に先行する流路堆積の上面より切り込み、墳丘外堆積により覆われている。埋土（図31－67～71層）は主に黒褐色あるいはオリーブ黒色粘質土で構成されており、流れの速い流水があったとは考えられない。なお埋土中からは少量の古式土師器が出土している（図39－26～30）。

〈3〉その他の遺構

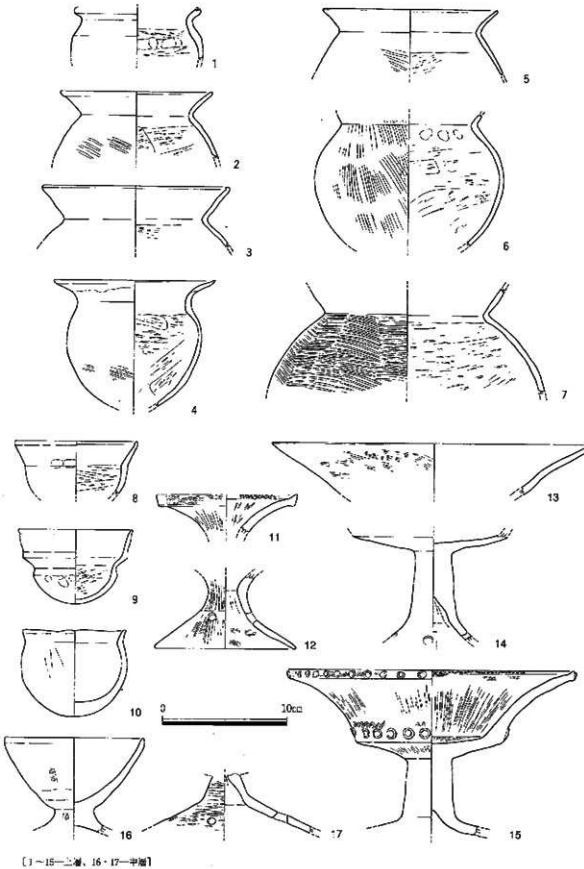
墳丘下層流路　南区の南半部に広がりをみせる流路堆積が確認されている（図31－75～77層、図33－36～41層）。この流路はすでに見たように、層序関係から東田大塚古墳築造に先行することが明らかである。トレンチ南端より約9mのあたりで基盤層の黒色粘土層を切り込む北肩が検出されているが、南肩についてはトレンチ内で確認されておらず、幅9m以上の規模を有することがわかる。

周辺地形より東から西へと流水があったものと推定される。流路内の埋土は砂礫層や黒褐色の腐植土層、暗灰黄色のシルト層などで構成される。一部断ち割りなどの結果、この流路堆積からは遺物は1点も検出されていない。

なお第4次調査（纒向遺跡第147次）の第1トレンチ南半部においても、同様の流路の存在が確認されている。この流路は東田大塚古墳との前後関係は明らかではなかったが、遺物が含まれていなかったことから古墳に先行する可能性が高いものと推定された。今回調査の流路と同様にトレンチ内では北肩のみが確認されており、概ね南東から北西方向に流れるものと考えられた。両者は30m余りの距離を隔てて検出されているが、その状況から見て一連のものである可能性が高いと言えるだろう。

6．出土遺物と遺構の時期

今回の調査ではコンテナケースで8箱分の古式土師器が出土している。図37～42では、これまで見てきた遺構に伴う遺物のほか、墳丘外堆積や墳丘盛土中に含まれていた土器を可能な限り抽出して図示している。なおこれらの土器の法量・形態的特徴・調整・色調ついては、出土土器観察表（表2）に



〔1～15—土師、16・17—須恵〕

図37　土坑1出土土器（S＝1/3）

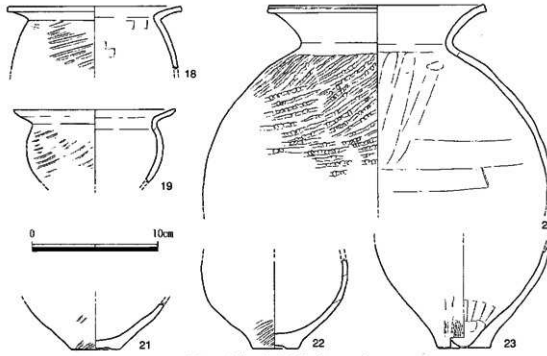


図38　土坑4出土土器（S＝1/3）

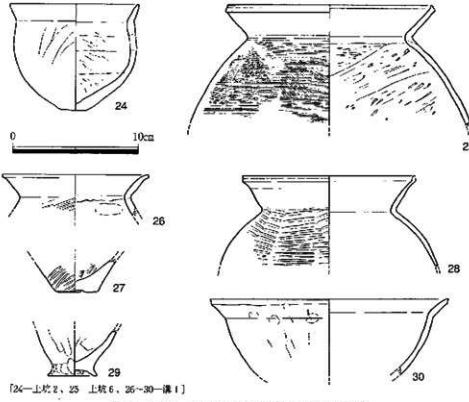
記することとし、以下では遺構・土層別に概要を確認し、その所属時期を検討したい。

土坑1出土遺物と時期（図37）　甕や壺、小型丸底鉢、小型器台、高坏などの器種が確認されている。このうち加飾の見られる高坏（15）などはやや古い様相のものと考えられるが、外面をタテハケにより仕上げる甕（6）や、口縁端部の内側が肥厚する甕（3）、複合口縁を有する小型丸底鉢（9）などは、布留0式期に属するものと考えられる。したがって土坑1の所属時期は、東田大塚古墳築造直後の布留0式期頃に考えることができる。

土坑4出土遺物と時期（図38）　体部に縄目状のタタキ痕を残す広口壺（20）のほか、体部外面にタタキ調整を施す甕、底部に穿孔を有する壺と思われる個体がある。これらは庄内式期を中心とする時期のものと考えられるが、さらに限定して考えることは難しい。ただし出土土器が東田大塚古墳築造時期よりも古い様相を示すことから、土坑4は古墳築造に先行するものである可能性が高いと言えるだろう。

その他の遺構出土遺物と時期（図39）　土坑2出土の小型甕（24）は庄内式期の古い段階にすでに見られる形態であり、庄内式期に属するものである可能性が高いと言えるだろう。土坑6出土の甕（25）は口縁部がわずかに内湾し、体部にヨコハケ調整が施されるという布留形甕の特徴を持つ一方で、口縁端部が上方につまみ上げられるという庄内形甕の特徴を有する。この個体は布留0式期古相に属するものと考えられるだろう。溝1出土土器は、口縁端部をつまみ上げるタタキ甕（28）など、いずれも庄内式期に属するものと考えられる。庄内式期のうちでも中頃から後半に属するものと推定される。

各遺構の時期は、概ね上記の遺物が示す時期と同様に考えられる。東田大塚古墳築造との前後関係については、土坑6は層序関係から先行することが明らかであるが、土坑2・溝1についても先行す



[24—土坑2、25　土坑6、26~30—溝1]

図39　土坑2・土坑6・溝1出土土器（S＝1/3）

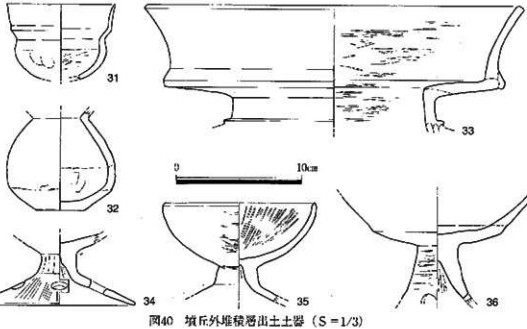


図40　墳丘外堆積層出土土器（S＝1/3）

る可能性が高いと言えるだろう。このほか出土遺物を図示できなかった土坑3・土坑5などについても、明確に布留式期にドる遺物が含まれていなかったことから、古墳築造に先行する可能性が高いと思われる。

墳丘外堆積出土遺物と時期（図40）　ここに示した土器は、いずれも墳丘外堆積の下層に相当する土層（図31－6～8層など）より出土したものである。複合口縁を持つ小型丸底鉢（31）は土坑1出

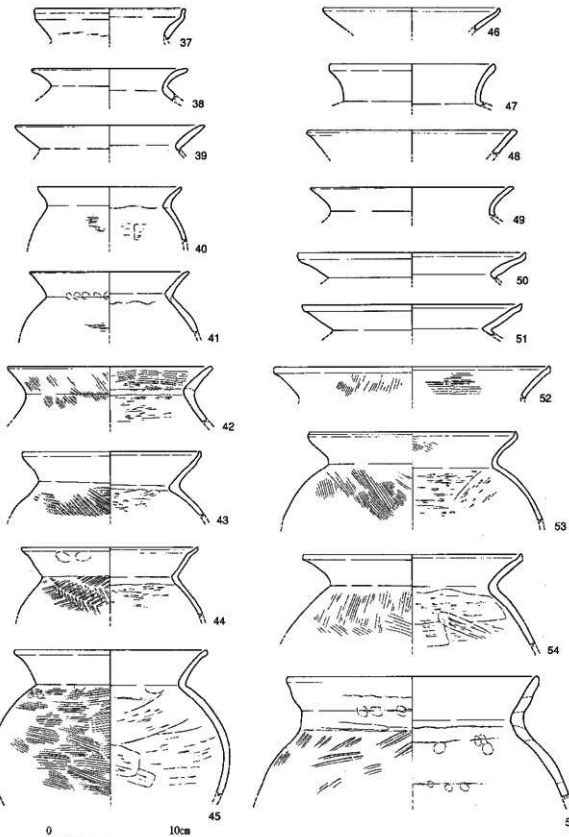
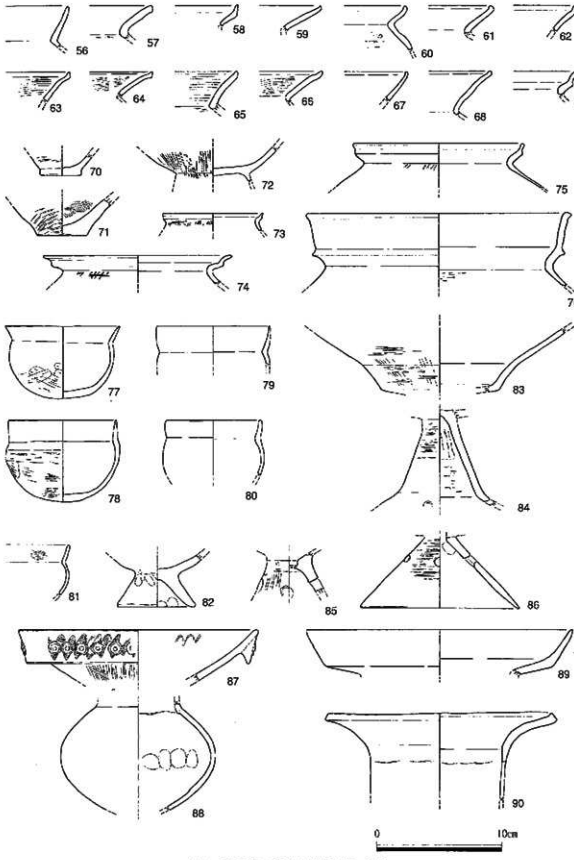


図41　墳丘盛土出土土器①（S＝1/3）



区42　墳丘盛土出土土器②（S＝1/3）

土のもの（9）に類似しており、同時期のものと考えられる。大型の複合口縁壺である（33）は二次口縁部が外反する形態であり、栃木分類の形態3に相当し[5]、布留1式期頃の時期が考えられる。このほかの土器についてはこれらよりも古い様相を持つものであり、墳丘外堤積の下層は概ね布留1式頃までに形成されたと考えてよいであろう。したがってこれらの層は、東田大塚古墳築造後の早い段階から形成されはじめたものと理解される。

墳丘盛土出土遺物と時期（図41・42）　今回の調査では墳丘盛土の一部を断ち割ったに過ぎないが、比較的多くの土器が出土している。甕は体部に矢羽根状のタタキ痕を持つ個体（44）など、多くは庄内式期の甕の特徴を有しているが、中には体部外面をヨコハケ調整で仕上げる個体（45）や口縁端部の内側が肥厚する個体（48）など、布留形甕の特徴を有するものがみとめられる。他の器種についてもやはり庄内式期新相の様相を持つ鉢体が目立つが、小型丸底壺（77）～（80）などは布留0式期に下るものと見てよいであろう。これらの遺物の示す時期は、これまで考えられてきた東田大塚古墳の築造時期（布留0式期）に矛盾するものではない。

7．墳丘の形態と築造方法について

今回の調査は、前年度の第4次調査（纒向遺跡第147次）に引き続いて東田大塚古墳の前方部形態の解明を目的とするものであった。以下で確認された遺構や土層の性格を踏まえ、東田大塚古墳の墳丘形態について検討することとしたい。

（1）墳丘形態について

前方部前面の墳端　今回の調査目的の一つは、東田大塚古墳前方部前面の墳端を確認し、墳丘全長を明らかにすることであった。過去の調査成果から、東田大塚古墳の前方部は後円部より南西側に向かってのびることがわかっている。従って墳丘主軸ラインは北東―南西方向を向いており、主軸に直交するであろう前方部前面の墳端ラインは、北西―南東方向に走るものと推定できる。しかし調査により得られた盛土端のラインは、西北西－東南東方向に走るものであり、当初の想定とはやや異なるものであった。このような結果が得られた要因について、以下のようなことが考えられるだろう。

まず考えられるのは、前方部の平面形態が、これまで想定されているものとは異なるものであるということである。上記のように、前方部が後円部の南西端に存在し、墳丘主軸が概ね北東―南西方向を向くものである可能性は高い。しかし現状では前方部北側面が後円部から約40mの地点まで検出されているのに対し、前方部南側ではクビレ部に近い位置が押さえられているに過ぎず、前方部前面付近の墳丘幅は明らかになっていない。仮に前方部幅が想定より狭いものと考えるなら、今回確認された墳丘盛土の端が、前方部南西隅に近い位置にあたる可能性も否定できない。

また前方部幅が従来の想定どおりのものであったとしても、前方部前面の墳端ラインが直線的なものではなく、突出部のようなものを有している可能性も考えられる。今回確認された盛土の端が、そうした突出部の側面に相当するのであれば、想定される墳端ラインとの齟齬は理解できる。

もう一つ考えられることとしては、前方部前面の墳端ラインは従来の想定どおりのものであり、今

回の調査地部分が何らかの要因により改変されているということである。既に見たように、墳丘盛土の外側に形成される墳丘外堤積は、古墳築造後の早い段階から形成されていると考えられた。しかし墳丘の崩落が早い段階に進行したと仮定すれば、墳丘外堤積の時期もそれほど新しくはならないであろう。

実際どのような要因によりこうした調査成果が得られているのか、現段階で判断することは難しい。今回の調査トレンチ幅は2m以下の狭いものであり、全長100mを超える墳丘の中ではわずかな部分に過ぎない。したがって今回得られた想定外の墳端ラインを過大に評価して解釈することは避けるべきであろう。現状では前方部前面ラインの方向は従来の想定どおりである可能性が高いと理解し、今後の調査において上記の問題点の解明を目指したい。

墳丘規模　図43に東田大塚古墳の墳丘復元案を示している。後円部および前方部側面形態の推定については、第4次調査の報告（註5文献）において記しているのでここでは省略し、墳丘規模についてのみ触れることとしたい。

第2次調査（縄向遺跡第106次）第1トレンチで確認された後円部北東端と、今回確認された墳丘盛土の南西端の間の距離は約120mを測る。したがって今回の調査成果から、東田大塚古墳の全長は120mかそれ以上であることが明らかとなった。先に見たように前方部前面の墳端は明確にされたと言い難い状況にあり、正確な墳丘全長は不明としなければならない。拡張区の中で墳丘盛土が収束しつつあることから、現状では墳丘全長は約120mと考えてよいと思われるが、正確な数値については今後の調査により明らかにすることとしたい。

（2）墳丘の築造方法について

墳丘築造前の環境　今回の調査においては、東田大塚古墳の築造に先行する遺構が複数確認されている。最も古く考えられるのはトレンチ南端の墳丘下層流路であるが、これは古墳築造段階では既に完全に埋没している。

このほか古墳築造の直前段階にあたる庄内式期の土坑や溝が検出されている。過去の調査でも、墳丘の断ち割り調査を行なった後円部北側（第3次調査）や前方部のクビレ部寄りの地点（第4次調査）では、墳丘下に存在する庄内式期～布留0式期の遺構が確認されている。また今回の調査では、墳丘盛土中から同様の時期の土器が多数出土している。これらの土器は、古墳築造に先行する時期の遺構に伴うものであったと推定される。

上記のようなことから、東田大塚古墳が築造された場所には、それ以前の遺構が比較的高い密度で存在し機能していたと考えることができる。したがって東田大塚古墳の築造にあたっては、これらの遺構は破壊されて機能を失い、墳丘盛土下に埋没する結果となったと考えられる。

墳丘の構築方法　今回の調査範囲内では、厚さ80cm程度の墳丘盛土が残存していたが、その下部に基盤層（あるいは古墳に先行する遺構埋土・包含層）の削り出し部分は見られなかった。過去の調査で確認されている墳端の状況を見ると、第3次調査（縄向遺跡第113次）の後円部北西端では、高さ1m近くの基盤層削り出し部分が存在し、第4次調査（縄向遺跡第147次）の前方部北側・南側の墳端

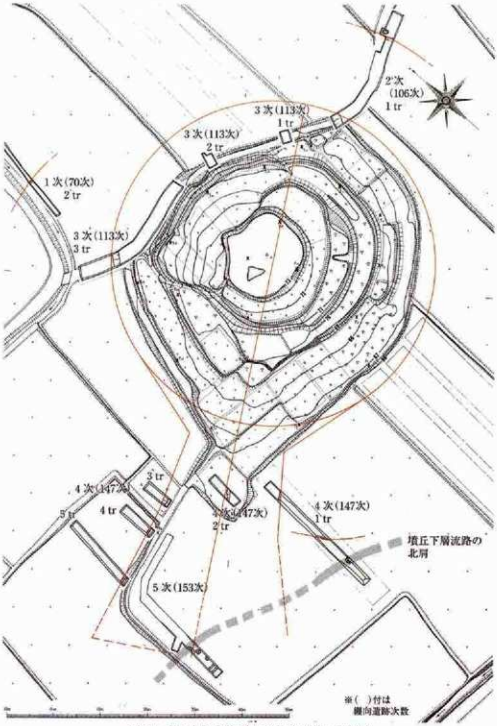


図43　東田大塚古墳 墳丘復元案（S＝1/800）

でも場所により差は見られるが0.5～１mの削り出し部分が存在している。しかし、第２次調査（繞向遺跡第106次）の後円部北東端では削り出し部分が確認されておらず、今回確認された状況と同様である可能性が考えられる。

このように東田大塚古墳では、墳丘の各部において構築方法が異なっていることがわかる。また墳丘の構築と関連するであろう周濠状遺構の掘削についても、これまでの調査成果から墳丘の周囲を均一に巡るものではないことがわかっている。東田大塚古墳は奈良盆地の東縁に位置しており、概ね東

側が高くて西側が低くなる地形環境にある。緩やかではあるがこうした傾斜地形にあることが、墳丘各所における構築方法の差を生じる要因として考えられるだろう。

8．まとめ

今回の調査では、東田大塚古墳の前方部前面付近の墳丘盛土を検出することができた。前方部前面の墳端ラインは明確にできなかったが、これにより墳丘全長は約120m、前方部長は約50mに推定することが可能となった。これまで東田大塚古墳は、後円部径：前方部長の比率が２：１となる「纒向型前方後円墳」[1]の一例と見られていたが、今回の調査成果からは、その比率はおよそ1.4：１になると考えることができる。すなわち東田大塚古墳は、「纒向型前方後円墳」とは異なる墳丘比率を持つものであると言うことができる。東田大塚古墳の築造時期は、纒向石塚や矢塚などの「纒向型前方後円墳」よりも一段階新しく、最古の定型化した前方後円墳とされる箸墓古墳と前後する時期に見られている。[10]上記のような墳丘の状況から東田大塚古墳は、「纒向型前方後円墳」から定型化した前方後円墳へという発展過程の中での、過渡的な存在として位置付けられるのではないだろうか。

今回を含めた５次にわたる調査を経て、少しずつではあるが東田大塚古墳の全体像が明らかになりつつある。しかし前方部形態の把握は、現状では不十分であると言わねばならない。前方部の南側面や前面の墳端ラインを確認し、その平面形態を明らかにすることが今後の課題である。

（福辻）

【注記】

1）石野博信（編）　2005『大和・脇庶遺跡』　学生社

2）橋本輝彦（編）　2006『東田大塚古墳』（財）桜井市文化財協会

3）ここで示している東田大塚古墳の既往の調査・古墳の評価に関しては、特に示したもの以外は註記２）文献を参考としている。

4）清水昭一　1993『纒向遺跡・第69・70次発掘調査報告書』桜井市教育委員会
橋本輝彦　2006「墳丘の測量」『東田大塚古墳』（財）桜井市文化財協会

5）福辻淳　2008『纒向遺跡第147次（東田大塚古墳第４次）発掘調査報告』『桜井市平成18年度民間補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会　以下第４次調査に関連する事項については、この文献を参考としている。

6）註５）文献参照。

7）「墳丘外堤帯」という呼称は、墳丘の外側に堆積するあらゆる土層を包括し得るものであり、本文中で意図する土層の性格を示す語としては最適とは言えないだろう。しかしこれらの土層は造構内の埋土ではなく、墳端から外側の一定範囲に形成されているものと考えられるため、こうした呼び方を採用することとした。

8）梅本康一　2006「東田大塚古墳出土の大型複合口縁壺検討」『東田大塚古墳』（財）桜井市文化財協会

9）寺沢薫　1988『纒向型前方後円墳の築造』『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズIV

10）橋本輝彦　2006「纒向古墳群の調査成果と出土土器」『東田大塚古墳』（財）桜井市文化財協会

表2　縄向遺跡第153次出土土器観察表

図番号	写真図版	出土遺構層位	遺物の種類	法量(cm)	形態的特徴	調整など	色調（外面）	残存	その他
図37－1	図版35－1	十坑1上層	土師器 甕	口径 (9.8)	口縁部が短く、肩部の張りは弱い。	(外)調整不明瞭 (内)口縁付近はヨコナデ、体部はケズリ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	口縁～肩部 1/4	
図37－2	図版35－2	〃	土師器 甕	口径 (12.0)	口縁はほぼ直線的に広がり、端部を丸くおさめる。肩部は丸みを帯びる。	(外)口縁付近はヨコナデ、体部はタタキ (内)口縁付近はヨコナデ、体部はケズリ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	口縁～肩部 1/4	
図37－3	図版35－3	〃	土師器 甕	口径 (14.7)	口縁部はほぼ直線的に伸び、端部の内面を肥厚させる形態。	(外)口縁付近はヨコナデ、体部はケズリ (内)口縁付近はヨコナデ、体部はケズリ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	口縁～肩部 1/6	
図37－4	図版35－4	〃	土師器 甕	口径 12.9	口縁部は外反して広がり、端部はやや上方へ屈曲する。体部は球形に近く、肩部の張りは弱い。	(外)口縁付近はナデ、体部はタタキ (内)口縁付近はナデ、体部はケズリ	灰白色 (10YR7/1)	口縁～胴部 1/2	
図37－5	図版35－5	〃	土師器 甕	口径 (13.8)	口縁部はやや外反し、端部をわずかにつまみ上げる形態。	(外)口縁付近はヨコナデ、体部はタタキ (内)口縁付近はヨコナデ、体部はケズリ	にぶい橙色 (10YR7/3)	口縁～肩部 1/8	
図37－6	図版35－6	〃	土師器 甕	器径 (15.2)	球形の体部を持つ。口縁・底部の形態は不明。	(外)口縁部はヨコナデ、体部は粗いタテハケ (内)口縁付近はヨコナデ、体部はケズリ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	体部 1/3	
図37－7	図版35－7	〃	土師器 坏		口縁部は直線的に伸びるが、端部の形態は不明。肩部は丸みを帯びる。	(外)口縁部はヨコナデ、体部はタタキ (内)口縁付近はヨコナデ、体部はケズリ	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	口縁～肩部 1/5	
図37－8	図版35－8	〃	土師器 小型鉢	口径 9.8	口縁部は直線的に広がる形態で、端部は上方につまみ上げられる。体部は半球形のものと考えられる。	(外)口縁～体部はナデ (内)口縁部はヨコナデ、体部はケズリ	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	口縁～体部 1/6	
図37－9	図版35－9	〃	土師器 小型丸底鉢	口径 (9.0)	やや外傾する複合口縁をそれ、体部は半球形を呈する。底部は丸底。	(外)口縁付近はヨコナデ、体部はナデ、指すサエ (内)口縁付近はヨコナデ、体部はケズリ	橙色 (7.5YR7/6)	全体 2/5	
図37－10	図版35－10	〃	土師器 小型丸底鉢	器高 6.9 口径 8.0 器径 8.5	小型の鉢あるいは甕とも見られる個体。口縁部は短く、端部は丸くおさめる。体部は球形に近い形態。底部は丸底。	(外)口縁部はヨコナデ、体部はタテナデか (内)全体にナデ調整と見られる	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	ほぼ完形	
図37－11	図版35－11	〃	土師器 壺	口径 10.5	口頸部は外反して広がる形態。その端部の外側には面が形成されている。	(外)口頸部はタテミガキ、その端部外側の面には波状文を施す (内)口頸部はタテミガキ、端部付近に波状文	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	口頸部 2/3	
図37－12	図版36－12	〃	土師器 小型器台	器径 11.1	脚部は上半が外反して広がり、それより下方では直線的に大きく広がる形態。中ほどに円形の透孔を3方向に配している。	(外)脚部はタテ方向のミガキ (内)脚上半にシボリ痕、下半にハケメが残る	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	脚部 1/2	
図37－13	図版36－13	〃	土師器 高坏	口径 25.7	口縁部はやや外反して大きく広がる形態。その端部は丸くおさめる。	(外)口縁部はナナメハケの後タテミガキか (内)タテ方向のミガキか	橙色 (5YR7/6)	口縁部 2/3	
図37－14	図版36－14	〃	土師器 高坏		中実の脚柱部を持ち、脚裾部は外反して広がる形態。	(外)(内)ともに調整不明瞭	橙色 (5YR7/6)	脚柱部付近 全周	
図37－15	図版36－15	〃	土師器 高坏	口径 22.7	坏部は、屈私の体部に大きく外反する口縁部が伴う形態。円柱状の脚柱部は中実で、脚裾部は外反して広がる。なお口縁端部外側の面と口縁下端の外面には、貼付竹管文が見られる。	(外)坏部の大半はタテミガキ、口縁端の面と口縁下端付近に波状文　脚部は不明瞭 (内)坏部の大半はタテミガキ、口縁端部付近には波状文を施す	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	脚裾部以外 4/5	
図37－16	図版36－16	土坑1中層	土師器 高坏	口径 11.0	塊形の坏部を持ち、その口縁端部は丸くおさめられる。脚部は坏部の底下より広がる形態。	(外)全体にタテハケの後にナデ仕上げ (内)坏部、脚部ともにナデ	浅黄色 (2.5Y7/3)	坏部 全周	
図37－17	図版36－17	〃	土師器 高坏		質く中ほの脚柱部を持つ杭脚の高坏。脚裾部は脚柱部より屈曲して大きく広がり、円形の透孔を4方向に配する。坏部の形態は不明。	(外)脚部はヨコ方向のミガキ (内)調整不明瞭	灰黄褐色 (10YR6/2)	脚柱部付近 全周	
図38－18	図版36－18	十坑4	土師器 甕	口径 (13.7)	口縁部はやや外反して広がる形態。端部には面が形成される。肩部の張りは弱い。	(外)口縁部はヨコナデ、体部はタタキ (内)口縁～体部はナデか	黒褐色 (10YR3/2)	口縁～肩部 1/3	

図番号	写真図版	出土遺構 層位	遺物の種類	法量(cm)	形態的特徴	調整など	色調（外面）	残存	その他
図38－19	図版36－19	土坑４	土師器 坏	口径（12.5） 胴径（10.8）	口縁部はほぼ直線的に広がる形態で、端部は丸くおさめる。体部は球形状と見られ、肩の張りは弱い。	(外)口縁部は調整不明瞭、体部はタタキ (内)調整不明瞭	にぶい橙色 (10YR6/4)	口縁～肩部 1/7	
図38－20	図版37－20	＊	土師器 坏	口径（17.1） 胴径（27.6）	口縁は外反して広がる形態で、端部には面を形成し、そこに弱い沈線が巡る。体部上半は丸みを帯びており、球形に近い形態の体部形態が確定される。	(外)口縁付近はヨコナデ、体部には横目状の痕跡を残すタタキが施される。 (内)口縁部、体部ともにナデ	にぶい黄橙色 (10YR5/3)	口縁～胴部 1/4	縄目状のタタキ痕
図38－21	図版36－21	＊	土師器 坏	底径 3.8	底部は突出するものではなく、底面の中央付近が凹む形態。	(外)体部はナデか (内)ナデか	にぶい黄橙色 (10YR5/4)	底部 全周	
図38－22	図版37－22	＊	土師器 坏	胴径（11.8） 底径 3.7	底部はやや突出する形態で、底面の中央付近が凹む形態。体部は球形に近い形態。	(外)体部下半はタタキ (内)ナデか	橙色 (5YR7/6)	底部付近 全周	
図38－23	図版37－23	＊	土師器 壺？	底径 4.1	底部はやや突出気味で、底面には径0.6cm程度の穿孔が底底前に開けられている。	(外)体部下半はタテハケの後にナデか (内)体部下半ナデ調整か、底部近くに板状工具によるであろう圧痕が見られる	灰黄色 (2.5Y5/2)	底部付近 全周	
図38－24	図版37－24	土坑２ Ｅ層	土師器 甕	器高 8.4 口径 10.1 胴径 9.7 底径 2.2	ほぼ直線的に伸びる短い口縁部を持ち、その端部は丸くおさめられている。胴部の張りは弱く、体部下半は丸みを帯びる。底部は突出しない平底。	(外)口縁部はヨコナデ、体部にタテナデ (内)口縁付近はナデと見られ、体部はケズリ	灰白色 (2.5Y7/1)	ほぼ完形	
図38－25	図版37－25	土坑６	土師器 鉢	口径（16.2）	口縁部はわずかに内湾する形態で、端部は上方へつまみ上げられる。肩部は丸みを帯び、球形に近い体部形態が確定される。	(外)口縁付近はヨコナデ、体部は横ねタテハケの後にヨコハケ (内)口縁付近はヨコナデ、体部はケズリ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	口縁～肩部 1/4	
図38－26	図版37－26	溝１	土師器 甕	口径（11.7）	口縁部はやや外反する形態で、端部は丸くおさめる。	(外)口縁部はヨコナデ、体部はタタキ (内)口縁部、体部ともにナデ	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	口縁～肩部 1/6	
図38－27	図版37－27	＊	土師器 甕	底径 3.2	底部は突出するものではなく、底面の中央付近が凹む形態。	(外)体部？端付近はタタキ (内)底部付近に放射状にハケメが見られる	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	底部 全周	
図38－28	図版37－28	＊	土師器 甕	口径（13.4）	口縁部は外反して伸びる形態で、端部は上方につまみ上げられる。肩部は丸みを帯びる。	(外)口縁部はヨコナデ、体部はタタキ (内)口縁部はナデ、体部は調整不明瞭	橙色 (2.5YR6/8)	口縁～肩部 1/4	
図38－29	図版37－29	＊	土師器 壺形鉢？	底径 3.7	底部はやや突出するものの、底面の輪郭部分がつまみ出され、底面の中央部が凹む形態。	(外)体部下半はナデ、底部付近はおさえ (内)体部下半はナデか	にぶい黄橙色 (10YR3/3)	底部付近 全周	
図38－30	図版37－30	＊	土師器 鉢	口径（18.9）	口縁部は短くやや外反し、端部の外側には面を有する。体部は丸みを帯び、半球形に近い形態のものと見られる。	(外)口縁付近はヨコナデ、体部は不明瞭 (内)口縁部、体部ともにナデ＜ヨコナデ	灰オリーブ色 (5Y4/2)	口縁～体部 1/6	
図40－31	図版38－31	墳丘外堤積下層	土師器 小型丸底鉢	口径（6.5）	やや外反する複合口縁を有し、体部に半球形を呈する。底部は丸底。	(外)全体にナデか (内)口縁部付近はナデ、体部はケズリ	橙色 (5YR6/6)	全体 1/6	
図40－32	図版38－32	＊	土師器 壺	胴径 8.6 底径 3.7	体部の下半で胴部最大径を測る下膨れの体部形態。底部は突出しない平底。	(外)体部の調整不明瞭　口縁から体部・底面にかけて赤彩が残存 (内)体部にナデ調整	灰黄色 (2.5Y7/2)	体部以下 全周	外面に赤彩
図40－33	図版38－33	＊	土師器 大型壺	口径（29.3）	複合口縁を有する大型の壺。頸部と体部の境界部分の外面に突帯が巡らされる。	(外)口縁部から頸部はヨコナデ (内)口縁部から頸部はヨコミガキ	にぶい黄橙色 (10YR5/4)	口縁～頸部 1/5	
図40－34	図版38－34	＊	土師器 高坏	脚径（11.9）	短く中空の脚柱部を持つ低脚の高坏。脚裾部は脚柱部より屈曲して大きく広がり、円形の透孔を４方向に配する。	(外)脚柱部にタテ方向ナデ、脚裾部にタテハケ残る (内)脚部はナデか	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	脚柱部付近 全周	
図40－35	図版38－35	＊	土師器 高坏	口径 11.8	半球形に近い塊形の坏部を持つ低脚の高坏。短く中空の脚柱部を有し、その下端から屈曲して広がる脚裾部を持つ。	(外)坏部はヨコミガキ、脚部は調整不明瞭 (内)坏部はタテミガキ、脚部はナデか	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	坏～脚上半 全周	

図番号	写真図版	出土遺構 層位	遺物の種類	法量(cm)	形態的特徴	調整など	色調（外面）	残存	その他
図40－36	図版38－36	堆元外堆 積下層	土師器 高坏		口縁部が直線的に外側上方へ伸びる坏部を持つ。脚部は中空の脚柱部と脚裾部の境界が不明瞭で、円形の透孔が3方に配される。	(外)坏部は調整不明瞭、脚部はヨコミガキ (内)坏部は調整不明瞭、脚柱部にシボリ痕	橙色 (7.5YR6/6)	脚柱部付近 全周	
図41－37	図版38－37	堆元痛土	土師器 壺	口径（11.6）	口縁部は外反する形態で、端部近くで上方へ屈曲する。端部は丸くおさめられる。	(外)口縁部はナデ、その下端にはタタキ痕か (内)口縁部はナデ調整	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	口縁部 1/7	
図41－38	図版38－38	〃	土師器 壺	口径（11.8）	口縁部は外反して広がる形態で、端部は丸くおさめられる。	(外)口縁部はヨコナデ、体部は調整不明瞭 (内)口縁部はナデ、体部はケズリか	橙色 (5YR6/6)	口縁～肩部 1/10	
図41－39	図版38－39	〃	土師器 壺	口径（14.6）	直線的に伸びる口縁部。その端部は丸くおさめられる。	(外)口縁部はヨコナデ (内)口縁部はヨコナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	口縁部 1/8	
図41－40	図版38－40	〃	土師器 壺	口径（11.2）	口縁部はわずかに外反する形態で、端部は丸くおさめられる。肩部は丸みを帯びる。	(外)口縁部はナデ、体部には細かいヨコハケ状のものが残存 (内)口縁部は不明瞭、体部はケズリ	橙色 (5YR6/6)	口縁～肩 1/7	
図41－41	図版38－41	〃	土師器 甕	口径（12.4）	口縁部はほぼ直線的に伸び、端部をわずかに外傾へつまみ出す形態。肩部は丸みのある形態。	(外)口縁部はヨコナデ、体部はタタキ (内)調整不明瞭	浅黄橙色 (10YR8/3)	口縁～肩 1/8	
図41－42	図版38－42	〃	土師器 甕	口径（16.0）	口縁部はやや厚手ではぼ直線的に伸び、端部は丸くおさめられる。	(外)口縁部から体部上端付近にナナメハケ (内)口縁部はヨコハケ、体部はケズリ	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	口縁～肩部 1/5	
図41－43	図版39－43	〃	土師器 壺	口径（14.0）	口縁部はわずかに内傾して、端部をつまみ上げる形態。肩部はやや丸みを帯びる。	(外)口縁部はヨコナデ、体部はタタキ (内)口縁部は調整不明瞭、体部はケズリ	にぶい橙色 (10YR6/4)	肩部付近 全周	
図41－44	図版38－44	〃	土師器 壺	口径（13.9）	口縁は外反して広がる形態で、端部はつまみ上げられる。	(外)口縁はナデ、体部には矢羽根状のタタキ痕 (内)口縁付近はナデ、体部はケズリ	橙色 (5YR7/6)	口縁～肩部 1/4	
図41－45	図版39－45	〃	土師器 壺	口径（15.0） 胴径（18.8）	口縁部は外反する形態で、端部は外面がやや肥厚する。体部は丸みのある形態。	(外)口縁部はヨコナデ、体部はヨコハケ (内)口縁部はヨコハケ、体部はケズリ	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	口縁～胴部 1/3	
図41－46	図版39－46	〃	土師器 壺	口径 13.7	口縁部は直線的に広がる形態で、端部はつまみ上げられる。	(外)口縁部はヨコナデ (内)口縁部はヨコナデ	浅黄色 (7.5YR8/3)	口縁部 1/7	
図41－47	図版39－47	〃	土師器 壺	口径（14.3）	口縁部は中ほどでは内湾気味であるが、端部付近は外反する。口縁端部には不明瞭な凹を有し、弱い沈線が巡らされている。肩部は大きく張るものではない。	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ　ヨコ方向の砂粒の動きがみられる。	灰白色 (7.5YR8/2)	頸部付近 全周	
図41－48	図版39－48	〃	土師器 壺	口径（16.0）	口縁部は直線的に伸びる形態。口縁端部は内側に肥厚する。	(外)口縁部はヨコナデ (内)口縁部はヨコナデ	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	口縁部 1/8	
図41－49	図版39－49	〃	土師器 壺	口径（15.6）	口縁部は外反して広がる形態。口縁端部は丸くおさめる。	(外)(内)ともに調整不明瞭	明褐色 (7.5YR5/6)	口縁部 1/6	
図41－50	図版39－50	〃	土師器 壺	口径（17.9）	口縁部はやや外反して広がる形態で、口縁端部はつまみ上げられる。	(外)口縁部はヨコナデ (内)口縁部はヨコナデ、体部はケズリ	灰黄褐色 (10YR4/2)	口縁部 1/8	
図41－51	図版39－51	〃	土師器 壺	口径（17.3）	口縁部は直線的に伸びる形態で、口縁端部は外側上方へつまみ上げられる。	(外)口縁部はヨコナデ (内)調整不明瞭	にぶい橙 (7.5YR6/4)	口縁部 1/5	
図41－52	図版39－52	〃	土師器 壺	口径（21.6）	口縁部はやや外反して広がり、口縁端部はつまみ上げられる形態。	(外)口縁部はタテハケの後ヨコナデ (内)口縁部はヨコハケの後ヨコナデ	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	口縁部 1/8	
図41－53	図版39－53	〃	土師器 壺	口径（16.3）	口縁部はやや外反する形態。その端部はつまみ上げられ、外側に沈線が巡る。肩部は丸みを帯びており、球形に近い体部形態が推定される。	(外)口縁部はヨコナデ、体部はナナメハケ (内)口縁部はナナメハケの後ヨコナデ、体部はケズリ	浅黄色 (7.5YR8/4)	口縁～肩部 1/5	

図番号	写真図版	出土遺構 層位	遺物の種類	法量(cm)	形態的特徴	調整など	色調（外面）	残存	その他
図41－54	図版39－54	竪穴住土	土師器 甕	口径 17.2	口縁部はわずかに外反する形態で、端部はつまみ上げられる。肩部はやや丸みを帯びる。	(外)口縁部はヨコナデ、体部はタテ・ナナメハケの後ナデ (内)口縁部はヨコナデ、体部はケズリ	橙色 (5YR7/6)	口縁～肩部 全周	
図41－55	図版39－55	〃	土師器 甕	口径 (19.6)	口縁部はやや厚手で大きく広がるものではなく、口縁端部は丸くおさめられる。肩部はやや丸みを帯びる。	(外)口縁部はヨコナデ、体部はタタキ (内)口縁部はヨコナデ、体部はナデ	橙色 (2.5YR6/6)	口縁～肩部 1/4	
図42－56	図版40－56	〃	土師器 甕		口縁部はわずかに内傾して、端部はややつまみ上げ気味の形態となっている。	(外)口縁付近はヨコナデ (内)口縁付近はヨコナデ	橙色 (5YR7/6)	口縁部 1/12以下	
図42－57	図版40－57	〃	土師器 甕		口縁部はやや厚手で外反して広がる形態。端部には不明瞭な面が形成される。	(外)口縁付近はヨコナデ (内)口縁部はヨコナデ、体部はケズリ	橙色 (5YR7/6)	口縁部 1/10以下	
図42－58	図版40－58	〃	土師器 甕		口縁部は外反した後に上方へ屈曲する形態。端部は丸くおさめられる。	(外)口縁部はヨコナデ (内)口縁部はヨコナデ	褐灰色 (7.5YR5/1)	口縁部 1/10以下	
図42－59	図版40－59	〃	土師器 甕		口縁部はほぼ直線的にひろがり、端部を上方へつまみ上げる形態。	(外)口縁部はヨコナデ (内)口縁部はヨコナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	口縁部 1/10以下	
図42－60	図版40－60	〃	土師器 甕		口縁部は短く内湾する形態で、端部はつまみ上げられる。胴部の張りはあまり強くない。	(外)調整不明瞭　体部はタタキか (内)調整不明瞭	黄灰色 (2.5Y4/1)	口縁～肩部 1/10以下	
図42－61	図版40－61	〃	土師器 甕		口縁部は直線的に伸びる形態で、端部は内傾上方へ肥厚する。	(外)口縁部はヨコナデ (内)口縁部はヨコナデ	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	口縁部 1/10以下	
図42－62	図版40－62	〃	土師器 甕		口縁部はやや外反する形態。その端部はつまみ上げられ、外側には沈線が巡る。	(外)口縁部はヨコナデ (内)口縁部はヨコナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	口縁部 1/10以下	
図42－63	図版40－63	〃	土師器 甕		口縁部は外反し、端部をつまみ上げ、その外側に弱い沈線が巡らされる。	(外)口縁部はタテハケの後ナデ (内)口縁部はヨコハケの後ナデか	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	口縁部 1/10以下	
図42－64	図版40－64	〃	土師器 甕		口縁部は外反し、端部をつまみ上げる形態。その外側には面が形成されている。	(外)口縁部はタテハケの後ヨコナデ (内)口縁部はヨコハケ、ヨコナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	口縁部 1/10以下	
図42－65	図版40－65	〃	土師器 甕		口縁部は外反する形態で、端部はややつまみ上げられ、外側に不明瞭な面が形成される。	(外)口縁部はヨコナデ (内)口縁部はヨコハケ、体部はケズリ	暗灰色 (N3/)	口縁部 1/10以下	
図42－66	図版40－66	〃	土師器 甕		口縁部はほぼ直線的に広がる形態で、端部は外側上方にややつまみ上げられる。	(外)口縁部はタテハケの後ヨコナデ (内)口縁部はヨコハケ、端部付近はヨコナデ	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	口縁部 1/10以下	
図42－67	図版40－67	〃	土師器 甕		口縁部はわずかに内湾し、内側上方へつまみ上げる形態。	(外)口縁部はヨコナデ (内)口縁部はヨコナデ	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	口縁部 1/10以下	
図42－68	図版40－68	〃	土師器 甕		口縁部は外反して広がる形態で、端部は内側に肥厚する。	(外)口縁部はヨコナデ (内)口縁部はヨコナデ	橙色 (5YR6/6)	口縁部 1/12以下	
図42－69	図版40－69	〃	土師器 S字甕		S字状の口縁部を持つ。口縁端部は丸くおさめられる。	(外)口縁部はヨコナデ (内)口縁部はヨコナデ	灰白色 (10YR8/2)	口縁部 1/10以下	東海系
図42－70	図版40－70	〃	土師器 甕	底径 3.2	底部は突出する形態で、底面は平坦である。	(外)体部下端付近はタタキ (内)底部付近はナデ	灰黄褐色 (10YR4/2)	底部付近 全周	
図42－71	図版40－71	〃	土師器 甕	底径 3.8	底部はやや突出し、底面の中央付近が凹む形態。	(外)体部下端付近はタタキ (内)底部付近はハケメ	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	底部付近 全周	
図42－72	図版40－72	〃	土師器 S字甕		丸みのある体部の下端に、やや外側に広がる脚台部が付く形態。	(外)体部下端、脚台部上端はタテハケ (内)調整不明瞭	灰黄褐色 (10YR4/2)	体部下端 全周	東海系
図42－73	図版40－73	〃	土師器 S字甕	口径 (7.9)	口縁部はS字状の形態であるが、上半部の外反は強いものではなく、ほぼ上方に立ち上がっている。	(外)口縁部はヨコナデ、体部はタテハケ、ヨコ方向の沈線 (内)口縁部～体部はナデ	灰褐色 (7.5YR4/2)	口縁付近 1/5	東海系

図番号	写真図版	出土遺構 層位	遺物の種類	法量(cm)	形態的特徴	調整など	色調（外面）	残存	その他
図42－74	図版40－74	墳丘盛土	土師器 S字甕	口径（14.8）	S字状の口縁部を持つ。口縁端部は丸くおさめられる。	(外)口縁部はヨコナデ、体部はタテハケ、ヨコ方向の沈線 (内)口縁部～体部はナデ	橙灰色 (7.5YR4/1)	口縁～胴部 1/5	東海系
図42－75	図版40－75	〃	土師器 S字甕	口径（13.2）	S字状の口縁部を持ち、その端部は丸くおさめられる。胴部付近は大きく広がる形態。	(外)口縁部は調整不明瞭、体部はタテハケ (内)調整不明瞭	灰白色 (10YR8/1)	口縁～肩部 1/4	東海系
図42－76	図版40－76	〃	土師器 甕	口径（20.5）	やや外反する複合口縁を有し、その上端には不明瞭な面が形成される。また口縁の屈曲部外側には鋭く突出する稜が巡る。	(外)口縁～体部はヨコナデ (内)口縁部はヨコナデ、体部はケズリ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	口縁～胴部 1/8	山陰系
図42－77	図版40－77	〃	土師器 小型丸底鉢	器高 5.7 口径 9.0 胴径 8.3	半球形に近い体部に軽く外傾する口縁部が付く形態。口縁の端部は丸くおさめられる。底部は丸底。	(外)口縁～体部上半はナデ、体部下半はケズリ (内)口縁部はヨコナデ、体部はケズリ	橙色 (5YR6/6)	全体 4/5	
図42－78	図版40－78	〃	土師器 小型丸底鉢	器高 6.5 口径 8.5 胴径 9.0	半球形に近い体形に短く直立する口縁部が付く形態。口縁の端部は丸くおさめられる。底部は丸底。	(外)口縁付近はナデ、体部はケズリ (内)口縁～体部はナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	全体 3/5	
図42－79	図版41－79	〃	土師器 小型鉢	口径（8.6）	口縁部はわずかに外傾して内湾する形態で、端部は丸くおさめられる。	(外)口縁～体部はヨコナデ (内)口縁～体部はヨコナデ	橙色 (2.5YR6/8)	口縁～胴部 1/7	
図42－80	図版41－80	〃	土師器 小型鉢	口径（7.4） 胴径（8.6）	丸みのある体部に短く内湾する口縁部が付く。口縁端部は丸くおさめられる。	(外)(内)ともに調整不明瞭	橙色 (7.5YR6/6)	口縁～体部 1/8	
図42－81	図版41－81	〃	土師器 小型鉢		丸みのある体部に、外傾して内湾する口縁部が付く。口縁端部は丸くおさめられる。	(外)口縁付近はタテハケの後ナデか (内)口縁部はヨコハケ、体部はナデか	橙色 (5YR6/6)	口縁～体部 1/10以下	
図42－82	図版41－82	〃	土師器 （脚台部）	脚径 6.6	裾の脚台部と推定される。脚台部はやや外反して広がる形態で、端部は丸くおさめる。	(外)体部下端～脚台部はナデ (内)体部下端はナデ、脚台部はナデ・オサエ	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	脚台部 全周	
図42－83	図版41－83	〃	土師器 高坏		口縁部が外傾して立ち上がった後、外側に短角してさらに外傾し、大きく広がる形態。	(外)口縁部はタテハケの後ヨコナデか (内)調整不明瞭	橙色 (5YR7/6)	坏部中ほど 1/4	
図42－84	図版41－84	〃	土師器 高坏		脚柱部は「ハ」字状に広がる形態で、そこから屈曲して大きく広がる脚裾部を持つ。短角部の直下には、円形の透孔が2方に配される。	(外)脚柱部上半はヨコミガキ、下半はナデか (内)脚柱部下半はケズリ、上半にはシボリ痕が見られる	にぶい橙色 (7.5YR7/4) 橙色 (7.5YR7/6)	脚柱部 全周 脚台部上半 全周	
図42－85	図版41－85	〃	土師器 小型器台		受部から脚部に円孔が貫通する倒体。脚台部には円形透孔が4方に配される。	(外)脚台部はタテ方向のミガキ (内)脚台部はナデなど			
図42－86	図版41－86	〃	土師器 小型器台	脚径（12.4）	受部から脚部まで円孔が貫通する形態の小型器台。脚台部は「ハ」字状に直線的に広がり、その上半部に円形透孔が4方に配される。	(外)脚台部はヨコミガキ (内)調整不明瞭	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	脚台部 1/4	
区42－87	図版41－87	〃	土師器 壷	口径（16.8）	口縁部はやや内湾するもので、端部付近の外側に断面三角形の粘土を貼付けて垂下させる形態。垂下部分の外側には貼付け管文が見られる。	(外)口縁部はタテミガキで、垂下部分外側に波状文を施す (内)口縁端部近くに波状文を施す	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	口縁部 1/8	
区42－88	図版41－88	〃	土師器 壷	胴径（12.3）	体部は、中ほどがやや外側に張り出す偏球形に近い形態を呈している。	(外)体部はナデか (内)体部はナデ・オサエ	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	体部 1/3	
区42－89	図版41－89	〃	土師器 壷	口径（21.0）	口縁部は、外側に大きく広がった後、屈曲して外側上方へ伸びる二重口縁である。口縁端部は丸くおさめられる。	(外)(内)ともに調整不明瞭	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	口縁部 1/8	
区42－90	図版41－90	〃	土師器 壷	口径 17.6	頸部はほぼ垂直方向に伸びるもので、口縁部はそこから外反して大きく広がる形態。口縁端部付近は上方へつまみ上げられる形態。	(外)(内)ともに調整不明瞭	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	口縁～頸部 全周	東四国系

※法量のうち、（ ）付のものは復元値を示している。

第５節　纒向遺跡第154次（矢塚古墳第３次）発掘調査報告

１．はじめに

纒向遺跡第154次（矢塚古墳第３次）調査は、昨年に引き続き実施した纒向古墳群のうちの一つである矢塚古墳の範囲確認を目的とした発掘調査である。

今回の調査地は、桜井市大字東出251番地の１・268番地の１・269番地の１に位置している（図44）。現在は耕作地となっているそれぞれの番地内に合計５ヶ所のトレンチを設定し、部分的な拡張も含めて最終的に調査面積は127.5㎡となった。現地調査は平成19年12月17日より掘削を開始し、平成20年３月13日にトレンチの埋め戻しが終了した。なおすべての作業は人力で行った。

矢塚古墳は、平成18年度に実施した第148次調査の結果から前方後円墳である事が確認されているが[1]、纒向石塚古墳などと同様に纒向型前方後円墳の規格を持つと推定した場合[2]（図45）には、本来の前方部前面の位置は現在残存する水田畦畔の西側まで伸びると考えられる。この事を踏まえた上で今回の調査ではトレンチを配置し、目的としては矢塚古墳の全長と前方部幅・周濠の形状を確認するため、調査地の前方部推定位置に１・２・３・５トレンチを設定した（図46）。また後円部南側の周濠についても、古墳南側の水路を越えるかどうかを確認するため、４トレンチとして１ヶ所設定した。

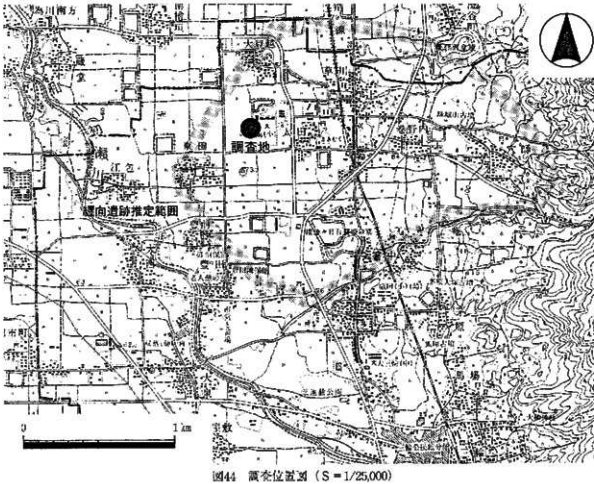


図44　調査位置図（S＝1/25,000）

これまで矢塚古墳は2回の調査が行われている。第1次調査は昭和46年の縄向遺跡第6次調査であり[5]、後円部東側の墳丘の一部と幅約20mの周濠が検出され、後円部周濠内からは庄内3式期と考えられるほぼ完形品で構成される土器群が計14個体が出土している。また東に隣接する縄向小学校内で確認された縄向大溝と呼ばれる幅約5mの溝のうち、北東～南西に走る北溝の延長部分が、後円部周濠に接続する形で見つかっている。第2次調査は昨年度の縄向遺跡第148次調査であり、これまで考古学的には未確認であった前方部本体と前方部南側の周濠が検出された他、前方部の墳丘盛土が良好な状態で残っており、その断ち割り調査により周濠の底のレベルと墳丘下の地山のレベルに差が少なく、ほぼ平坦に近い事が確認されている[4]。

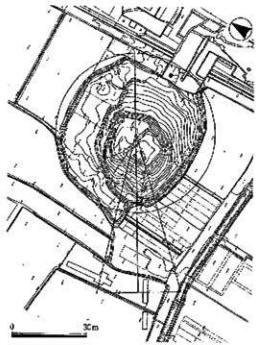


図45　縄向型推定復元図（S＝1/1,500）

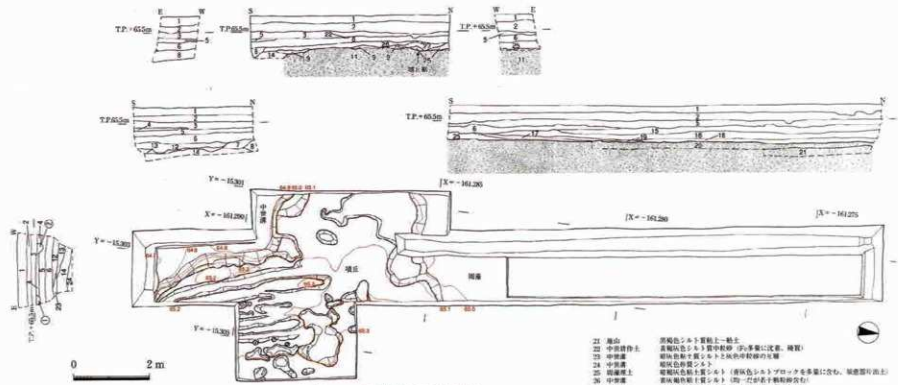
2．調査の概要

〔1〕各トレンチの概要

＜1トレンチ＞

推定される前方部の位置とその北側の周濠規模を確認するために設定したトレンチである。南北に長く幅2m×長さ20mの範囲を掘削したところ、トレンチ南から約7mの範囲で地山である黄灰色極細粒砂を検出した。この地山が前方部墳丘と考えられるが、その根拠としては、検出された地山の平面プランが墳丘裾の推定ラインに近い位置で確認された事が挙げられる。これを受けて、その墳形ラインの延長部分と第148次調査の事例のような墳丘盛土の有無および残存状況を確認するため、トレンチ南側の一部で東西に拡張を行った。その結果、西側の拡張区からは墳丘裾の延長部を検出し、東側からは盛土は残存していなかったものの、墳丘の続きが検出された（図47）。なお墳丘裾の海抜高はT.P.+約64.9mであり、それより内側に残存する墳丘の海抜高はT.P.＋65.0～65.3mを測る。

図46　トレンチ配置図（S＝1/1,500）



1 現代耕作土　暗オリーブ灰色小礫混じりシルト
2 近一中世耕作土　黄灰褐色小礫混じりシルト
3 中世耕作土　灰褐色小礫混じりシルト
4 中世耕作土　暗灰褐色小礫混じり砂質シルト
5 中世耕作土　暗灰褐色砂質シルト（Fe多量に沈着）
6 中世耕作土　灰褐色粘土質シルト
7 中世溝　暗灰色小礫混じり粘土質シルト
8 中世溝　暗灰色粘土質シルト（黄灰色の極細粒砂ブロックを若干含む）
9 中世溝　暗灰色小礫混じりシルト質粘土（植物遺体と中世土器片を含む）
10 中世耕作土　暗灰色粘土質シルト
11 地山　暗黄灰色小礫混じりシルト質極細粒砂
12 中世溝　暗灰色粘土（灰色極細粒砂のブロックが混じる）
13 中世溝　灰色細粒砂
14 中世溝　暗灰色小礫混じり粘土質シルト（植物遺体多量、ミトレンチの＊層と同時異層か）
15 開墾埋土　黄褐色小礫混じりシルト質粘土（Fe多量に沈着、瓦色器片出土）
16 開墾埋土　黄灰褐色小礫混じりシルト（灰色中一細粒砂ブロックを多量に含む、瓦色器片出土）
17 開墾埋土　灰色細粒砂～小礫（瓦色器片出土）
18 開墾埋土　暗黄灰色粘土（古式土師器片出土）
19 開墾埋土　暗灰色粘土質シルトと暗黄灰色粘土のブロック層
20 地山　暗黄灰色砂質粘土～暗黄灰色シルト質細粒砂
（土壁上面に黄灰色が沈着、全体に黄灰～黄褐色の小礫が含まれる）
21 地山　黄褐色シルト質粘土～粘土
22 中世耕作土　黄褐灰色シルト質中粒砂（Fe多量に沈着、硬質）
23 中世溝　暗灰色粘土質シルトと灰色中粒砂の互層
24 中世溝　暗灰色砂質シルト
25 開墾埋土　暗黄灰色粘土質シルト（黄灰色シルトブロックを多量に含む、瓦色器片出土）
26 中世溝　黄灰褐色粘土質シルト（均一だが若干細粒砂含む）
27 中世溝　暗灰色小礫混じり砂質シルト（砂礫を多く含む）

(1) 中世土師溝　灰褐色粘土質シルト
(2) 中世土師溝　黄灰色粘土質シルト

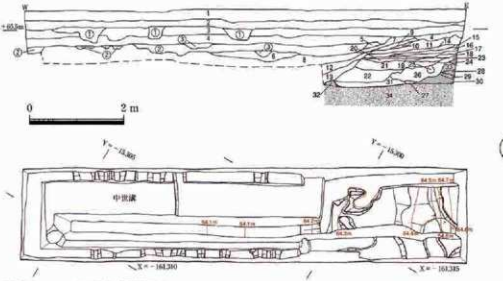
図47　1トレンチ平・断面図（S＝1/100）

周濠については、明確に地山を掘り込んだ段差を持っておらず、緩やかなスロープ状に、なおかつ浅く掘削されている事が確認された。周濠埋土は最深部で厚さ約50cmで4層から構成されており（図47断面）、この内の第15～17・25層までは須恵器大甕胴部片が少量出土し、第18・19層からは古式土師器片が出土している。

このほかトレンチの南端と西拡張区から、地山から垂直に掘り込まれる瓦器・土師皿などの中世遺物が出土する溝状の遺構が検出された。検出された方向から前方部前面に沿って掘削された遺構と思われるが、推定される前方部前面のラインと比較してやや弧を描く事から、程度は不明だが墳丘を削平しているものと考えられる。なお検出面から約40cmまでは掘削を行ったものの、トレンチ際で崩落の危険もあったため完掘はできなかった。

＜2トレンチ＞

前方部前面の墳丘位置を確認するために幅2m×長さ9.5mで設定したトレンチで、G.L.－約70cmの深さから前方部墳丘盛土に類似する黒褐色シルト～粘土と黄灰色細粒砂～シルトと青灰色シルトなどのブロック層と流水砂を伴う中世溝を確認した（図48）。ブロック層は当初墳丘と考えたが、瓦器椀や土師皿が混入しており、墳丘盛土が二次的に堆積した土層である事が解った。このためブロック層を除去し本来の墳丘が残存しているかを確認したところ、その検出面から約50～90cm下でトレンチ東



1 現代耕作土　オリーブ灰色小礫混じりシルト
2 近～近世耕作土　黄褐色小礫混じり粉質シルト
3 近～中世耕作土　黄褐色小礫混じり砂質シルト
4 中世耕作土　黄灰褐色小礫混じり砂質シルト（Fe沈着、硬質、層の上方に細粒砂を多量に含む）
5 墳丘盛土2次施工　灰褐色小礫混じりシルト
6 中世溝　灰～黄灰色細粒砂
7 墳丘盛土2次施工　暗褐灰色(粘質)混じりシルト（炭片多量・焼土多粒に含む）
8 中世溝　暗灰色シルト質細粒砂～シルト（植物遺体多量に含む）
9 墳丘盛土2次施工　暗灰色中粒砂混じりシルト
10 墳丘盛土2次施工　暗褐灰色粗粒砂混じりシルト（青灰色シルトブロックと黒褐色シルトブロックを若干含む）
12 中世溝　暗灰色小礫混じりシルト（編集～粗粒砂を若干含む）
13 中世溝　暗灰色シルト質細粒砂
14 墳丘盛土2次施工　灰色シルト（黄灰～青灰色シルトブロックを多量に含む）
15 墳丘盛土2次施工　灰色シルトと灰色粗粒砂のブロック層
16 墳丘盛土2次施工　黒褐色シルトと青灰色シルトのブロック層
17 墳丘盛土2次施工　暗灰色粗土質シルト（及び灰色シルトブロックを含む）
18 墳丘盛土2次施工　黒褐色シルトと青灰色シルトのブロック層
19 墳丘盛土2次施工　暗灰色シルトと灰色中粒砂のブロック層（ウエ小区に厚い）
20 墳丘盛土2次流堆土　暗灰色シルト質土
21 墳丘盛土2次施工　灰色細～細粒砂（層の上側に厚い砂が堆積、小礫を若干含む、流水砂）
22 墳丘盛土2次施工　灰～褐色小礫～粗粒砂
23 墳丘盛土2次施工　暗灰褐～青灰色シルトのブロック層
24 墳丘盛土　灰色細粒砂
25 墳丘盛土2次施工　灰～褐色小礫～粗粒砂
26 墳丘盛土2次施工　黒褐～青灰色シルト
27 墳丘盛土2次施工　青灰色小礫～粗粒砂
28 墳丘盛土　灰色粗粒砂
29 墳丘盛土　暗褐灰色シルト質中～細粒砂
30 墳丘盛土　灰～灰白色小礫～細粒砂
31 墳丘盛土2次施工　灰色小礫～極粗粒砂
32 地山　黄褐色粘土
33 墳丘盛土　褐灰色シルトと褐灰色シルトのブロック層
34 地山　青灰色シルト（22図4正面下5cmまでで掘削する）
① 中世遺構　灰色粘質細粒砂混じりシルト
② 中世遺構　暗褐色小礫混じり粘土質シルト
③ 中世遺構　暗褐色粗粒砂混じりシルト

図48　2トレンチ平・断面図（S＝1/80）

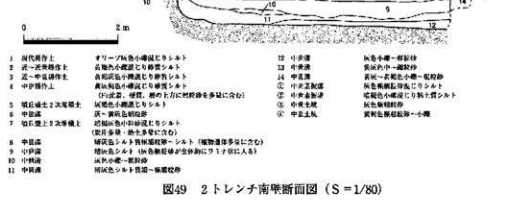


図49　2トレンチ南壁断面図（S＝1/80）

個から約1.5m幅で、中世遺物の出土しない主に砂礫で構成される土層（図48、24・28～30層）が検出された。大幅に削平されているものの、これが墳丘になると考えられる。なおこれらの土層は繩向遺跡で共通の地山である青灰色シルト層（図48・34層）上に堆積している。溝については検出面から底面までに最終的に約1.2mまで掘り下げ、中からは13世紀前半の瓦器椀や輸入陶器片が出土している（図58）。

＜3トレンチ＞

2トレンチ西側の延長線上に設定したトレンチで、前方部前面の周溝外側のラインの検出が期待された。大きさ幅2m×長さ7mで掘削を行った結果、繩向遺跡で地山として度々検出される黒～黒褐色粘土がG.L.－約50cmと比較的浅いレベルで検出された。またトレンチの西側から約2mの位置から瓦器・土師皿などの遺物を含む深さ約80cmの中世溝が検出された（図50）。溝の埋土は上層が砂質シルト～シルトで下層が砂層であり、堆積層の類似と出土遺物とを

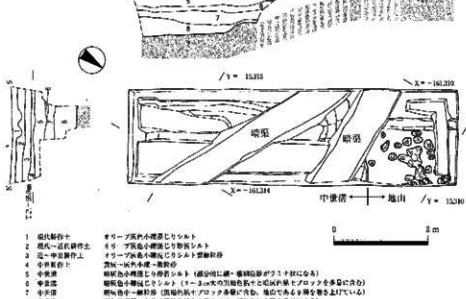


図50　3トレンチ平・断面図（S＝1/80）

合わせて考えると、2トレンチで検出された溝と同一のものと推測される。なお古墳の周濠に関連する遺構は確認できなかったが、これは中世溝の削平によると考えられる。

＜4トレンチ＞

後円部南側の周濠の範囲を確認するために設定したトレンチである。比較的掘削深度は浅く、G.L.－約30cmで地山となる黄灰色細粒砂層が検出されたが、周濠は確認できなかった。しかしながら、第1次調査で検出されていた継向大溝北溝の延長部と考えられる溝と土坑・ピットなどを検出する事ができた（図51･52）。

大溝1　北東から南西方向に検出され、幅は約6.5mを測る（平面図破線部分）。継向大溝の北溝の延長と考えられる。今回は矢塚古墳の墳形確認が主体であり、大溝は直接古墳には関連していないため、遺構の上面検出のみで完掘は行わなかったが、一部側溝を掘り下げた際には破片が多いものの、多量の古式土師器が出土している（図54）。

大溝2　検出した大溝1

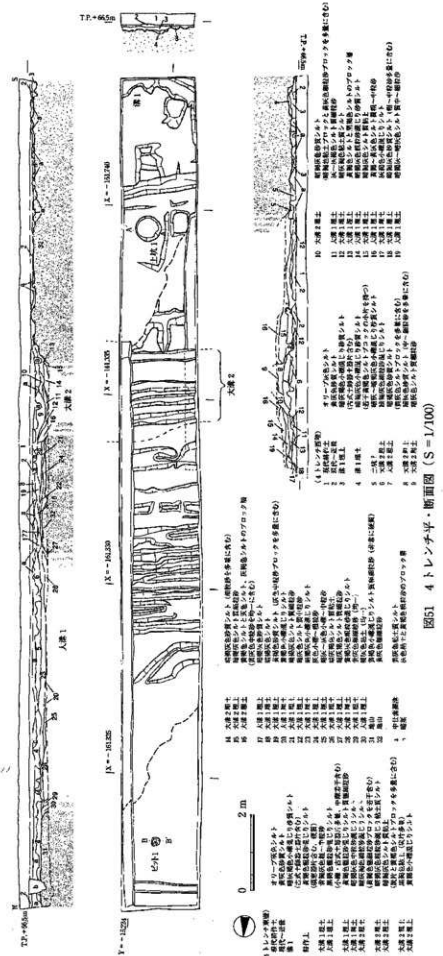


図51　4トレンチ平・断面図（S＝1/100）

の南側で重複して検出された東西に走る幅約3mの溝で、断面から大溝1埋没後に掘削された事が確認されている（図51）。

溝1　トレンチ南壁際で検出された溝で検出幅約50cm、深さ約20cmを測る。その位置から大溝に接続すると考えられ、古式土師器片が若干出土している。

土坑1　トレンチ南側の大溝1南岸で確認された径約70cmの円形の土坑で、深さ約20cmを測る（図52）。土坑中央から甕・鉢などの古式土師器片が出土している（図56）。

ピット1　トレンチ北側の大溝1北岸で検出されたピットで、径約20～30cm、深さは約10cmであった（図52）。遺物は出土しなかったため時期は不明であるが、中世耕作土層下から検出されており、それ以前の遺構となる。

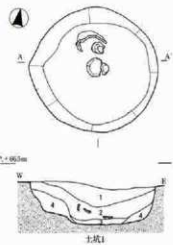


図52　4トレンチ土坑1・ピット1断面図（S＝1/20）

＜5トレンチ＞

1トレンチで検出した前方部北側の墳丘形状の成果を受け、その東側での前方部墳丘のラインの追加確認のため、幅1m×長さ4.5mで設定したトレンチである。掘削の結果、トレンチ南側のG.L.－約20cmからブロック土で構成される前方部墳丘とその裾部分、周濠を検出する事ができた（図53）。墳丘は硬質な盛土が厚さ約80cm残っており、黄褐～黄灰色シルト～粘土と黒褐～黒色シルト～粘土を主体とし、水平方向に大まかな単位に分けられるなど第148次調査で確認した前方部墳丘の盛土の様相と類似が見られ、遺物も若干出土している。周濠は、一部墳丘盛土起源のブロック土が混入するものの、主としてやや砂を含むシルト～粘土が約40cm堆積していた。また1トレンチと異なり、出土した遺物は古式土師器片のみであった。なお周濠下面で検出した地山の高さはT.P.＋約64.9mで、墳丘盛土直下

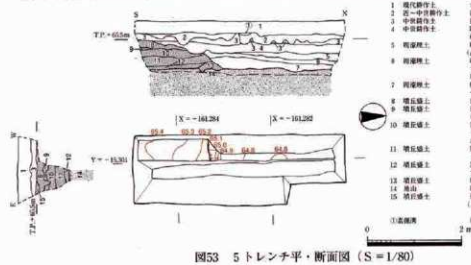


図53　5トレンチ平・断面図（S＝1/80）

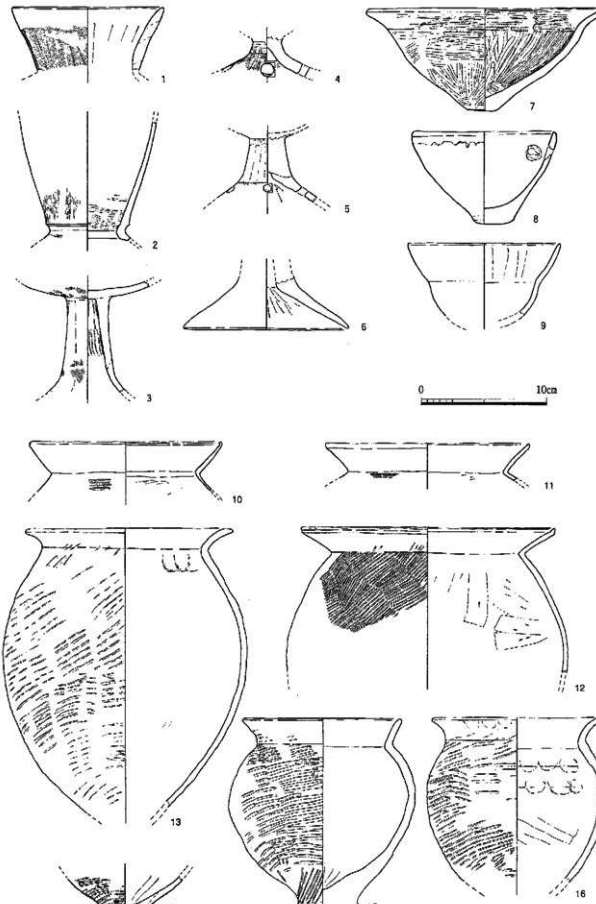


図54　4トレンチ大溝1出土遺物（S＝1/3）

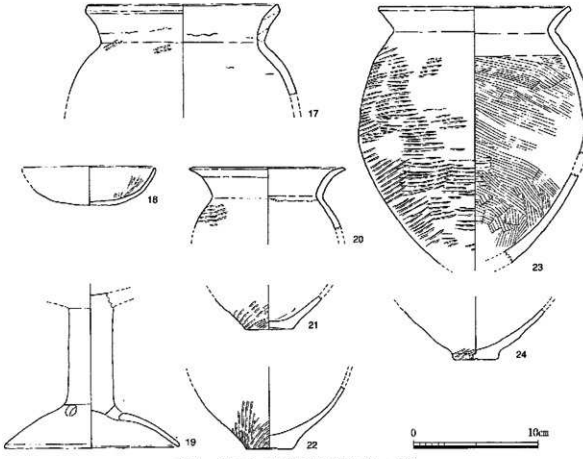


図55　4トレンチ大溝2出土遺物（S＝1/3）

の地山の高さもほぼ同一であった。

（2）出土遺物

今回の調査で出土した遺物のうち、その大半を占めるのは4トレンチで検出した大溝の検出面付近に伴うもので、次いで中世溝の遺物が多く見られた。時期決定の際に問題となる矢塚古墳の周濠や墳丘から出土した遺物は僅かな胴部破片資料のみある。第148次調査と同じく第6次調査で出土した完形土器群から推定される時期を補足する程度の非常に少ない出土量であったため、1・5トレンチの周濠出土遺物については図化することができなかった。

図54－（1）～（16）は4トレンチ大溝1、図55－（17）～（24）は4トレンチ大溝2、図56－（26）～（29）は4トレンチ土坑1出土遺物、図57－（30）～（43）は4トレンチ大溝1・2出土遺物、図58－（44）～（48）は3トレンチ中世溝出土遺物

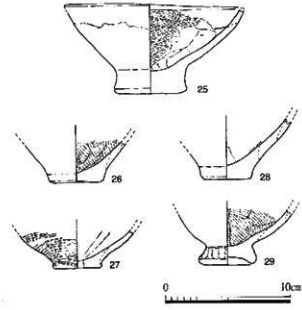


図56　4トレンチ土坑1出土遺物（S＝1/3）

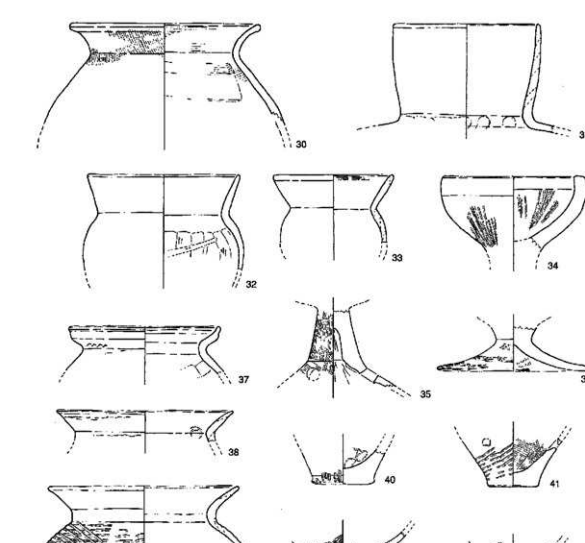


図57　4トレンチ大溝1・2出土遺物（S＝1/3）

である。図57は大溝の1と2が明確になっていない段階の取り上げであったため、両方の溝の遺物が混入している可能性があり、大溝1・2出土としている。図54－（1）～（2）は壺口縁部で（2）は頸部直上に稜線がある事から山陰系と考えられる。図54－（3）～（6）は高坏脚部で（4）は細いミガキが密に施される低脚高坏である。図54－（7）～（9）は鉢で（8）は口縁部直下に一ヶ所外面から穿孔されている。図54－（10）～（16）は甕で（10）は大和形、（11）・（12）は河内形、（13）～（16）は五様式系甕である。図55－（17）は壺で、外面にタタキ痕を残し器壁は厚い。図55－（18）は鉢で脚等は付かないが、胎土が浅黄橙色と在地の胎土ではない事から外来系と考えられる。図55－（19）は高坏でやや内彎する脚部を持つ。図55－（20）～（24）は甕でいずれも五様式系甕である。図56－（25）は鉢で外

面はナデ、内面は主にハケで調整されているが、部分的にケズリが施される。図56－(26)～(29)は甕で、五様式甕は(27)のみで残りは外面ナデ、内面はハケで調整されている。図57－(30)～(33)は壺、図57－(34)～(36)は高坏である。この内(34)は同時期の高坏と比べ、器壁が厚く口径もやや小さくなっている。図57－(37)～(43)は甕で、(37)は受け口状口縁を持つ近江系である。(36)は口径が胴部径に近い寸胴なタイプの甕と考えられ、(40)は内外面ともナデで調整される。(39)・(41)～(43)は五様式系甕で(41)は外面から穿孔されている。図58－(44)は玉縁白磁壺で、(45)・(46)は土師皿、(47)・(48)は瓦器椀である。瓦器椀はいずれも暗文が隙間なく密度が高く施される。

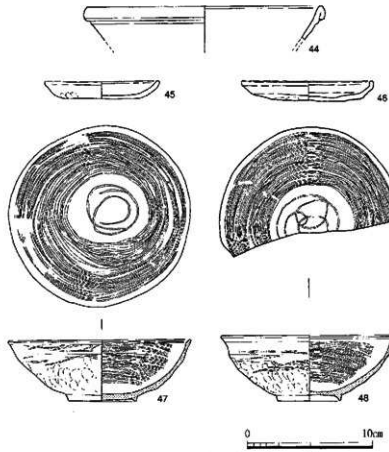


図58　3トレンチ中世溝出土遺物（S＝1/3）

3．調査の成果

前方部形状　1トレンチでは、前方部北西隅の墳丘を検出する事ができた。このうち前方部北西裾ラインについては、今回平面的に検出できた墳丘と周濠埋土との境目がそれにあたると想定しているが、これは昨年度の調査で確認された墳丘盛土と周濠底面との関係と、1トレンチの墳丘と周濠埋土の境目の海抜高がT.P.＋約64.9mであり、最も近い5トレンチでの墳丘裾となる盛土と地山の境目も同様にT.P.＋約64.9mと両者の海抜高に差がない事を根拠としている。前方部前面の位置については、前述した2・3トレンチで大規模な中世溝が検出されている事もあり、周濠と同じく削平を受けている可能性が高いと考えられる。

これらより1トレンチ及び2トレンチで検出した墳丘の位置から、残存する前方部前面の幅を復元すると約30m、前方部長は約28m、古墳の現存長は約93mであるが、特に全長については本来さらに数m長かったと考えられる（図59）。なお墳丘については昨年と同じく周濠と盛土下面の地山の高さに差が約10cm程しかなく、やや低い2トレンチでも高さの差については同様であった。よって前方部については地山削り出しはほとんどなく、すべて盛土による墳丘築造の可能性がさらに高くなったと考える。

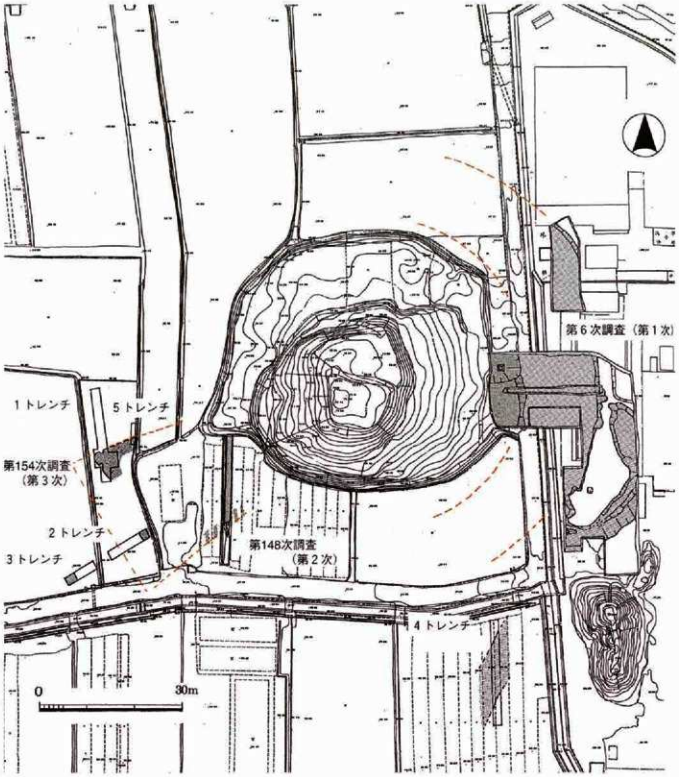


図59　矢塚古墳推定復元ライン（S＝1/800）

周濠　１・５トレンチの前方部墳丘北側で周濠を検出する事ができた。ただし北側の周濠外側は今回の調査地内では検出できなかったため、周濠の平面形は依然として不明のままとなっている。１トレンチで確認した周濠埋土の内、古式土師器だけが出土する土層はトレンチ北側の最下層にあたる厚

さ約10cmの暗褐灰色粘土だけであり、その上層からは須恵器片が出土している。なお5トレンチの周濠堆積である5～7層とも古式土師器のみが出土している。前方部前面裾は、中世溝に削平されていると推測されるが、周濠が掘削されていたであろう範囲については3トレンチの西側で地山である黒～黒褐色粘土を確認しているため、それより東側にしか存在しえないと考えられる。これは墳形が撥形墓となる根拠ともなっている。

なお周濠出土の土器は、五様式系甕・庄内形甕は見られるが布留形甕がないなど昨年度の調査と同様な結果となっており、第1次調査で出土した庄内3式期の土器群と時期の齟齬はないと考えられる。

中世溝　2・3トレンチで検出された13世紀前半の瓦器片が出土する砂層を伴う溝で、トレンチを跨いで検出された幅は約16mと広く、1トレンチで検出された落ち込み状遺構も同一のものであると考えられる（図60）。また中層に植物遺体を含む粘土質シルトの土層も確認された事から極弱い流水もしくは止水域となっていた時期もあったと考えられる。

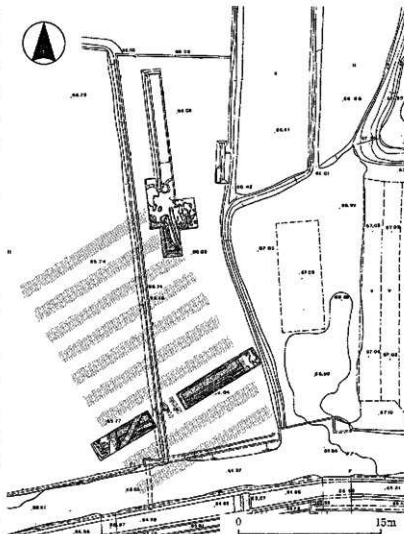


図60　中世溝検出図（S＝1/400）

4．まとめ

今回は、前方部墳丘及び周濠の一部を調査する事ができた。調査で確認できた矢塚古墳の墳丘長は約93mで、前方部前面は中世段階に溝掘削による削平を受けていると思われるものの、全長3：後円部径2：前方部長：1の比率となる継向型前方後円墳の規格の範疇に収まる可能性が高いと考えられる。

今後の課題としては、未だ未調査の矢塚古墳の後円部北側と周濠の形状と、今回の調査で問題点として残った前方部北側の周濠外側のラインの確認が挙げられる。（松宮）

【註記】

1）松宮昌樹　2008「矢塚古墳第２次発掘調査」『平成18年度国庫補助による発掘調査報告書』 桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書30集　桜井市教育委員会

2）橋本輝彦　2004「矢塚古墳の測量調査」『平成15年度国庫補助による発掘調査報告書』 桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書25集　桜井市教育委員会

3）石野博信　1971「巻向矢塚古墳」『巻向』桜井市教育委員会

4）平成18年度調査地内では前方部がすべて盛土で築かれており、段差が生じる程の地山成形を行っていない事が解っている。

5）註４）と同じ

風呂坊4号墳墳丘（西より）

トレンチ掘削前の状況①
（北西より）

トレンチ掘削前の状況②
（北より）

流土層断面（北より）

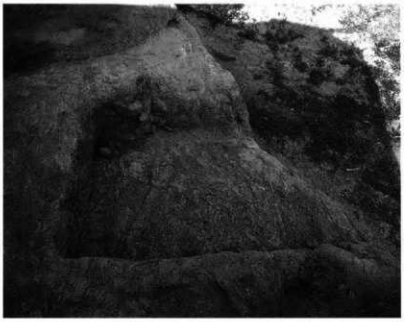
埋葬施設上面検出状況（北より）

墓壙埋土断面（北より）

墓壙埋土中の遺物出土状況（西より）

鉄釘出土状況①（西より）

鉄釘出土状況②（北より）



植外土器出土状況①（西より）

植外土器出土状況②（南より）

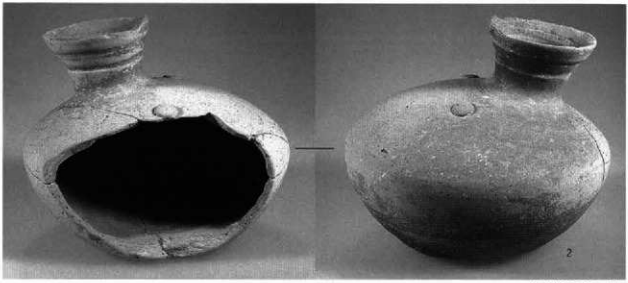
植外副葬土器①（南より）

植外副葬土器②（上が北）

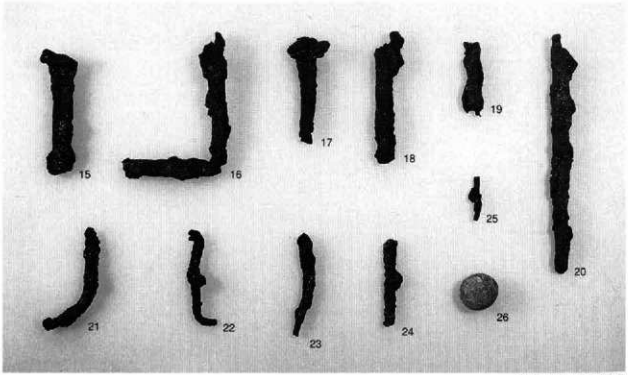
墓壙完掘後の状況①（西より）

墓壙完掘後の状況②（北より）

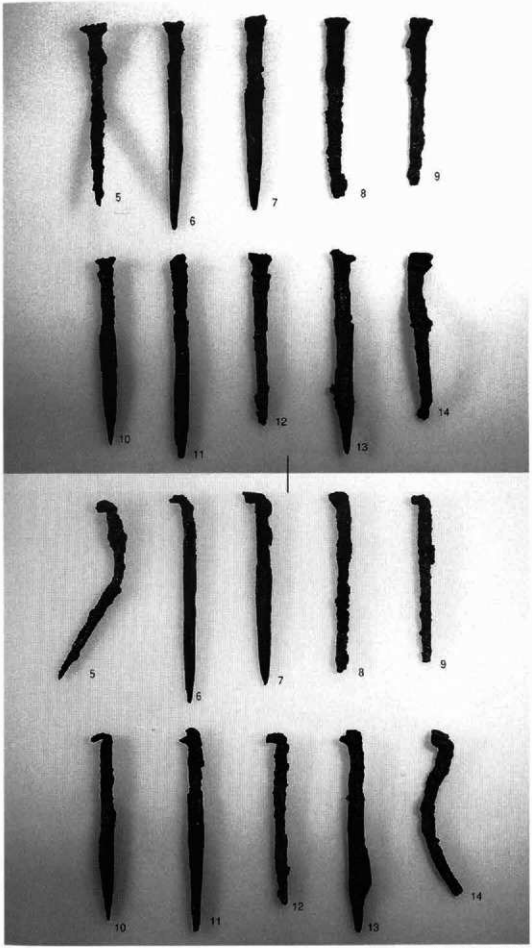
トレンチ全景（北西より）



埋葬施設出土土器



流土層出土金属製品



埋葬施設出土鉄釘

洪水堆積層　上面検出状況①（東より）

洪水堆積層　上面検出状況②（西より）

流水・滞水層　上面検出状況①（東より）

流水・滞水層　上面検出状況②（西より）

流水・滞水層掘り下げ後①（東より）

流水・滞水層掘り下げ後②（西より）

トレンチ東端の土層断面（北西より）

トレンチ中央付近の土層断面（北西より）

トレンチ西端の土層断面（北東より）

旧耕作土・洪水堆積層出土土器

流水・滞水層下層出土土器

遺構上面検出状況①（北西より）

遺構上面検出状況②（西より）

柱列１上面検出状況（南より）

柱列２上面検出状況①（南より）

柱列２上面検出状況②（北より）

柱列３上面検出状況（南より）

Pit 1 土層断面（西より）

Pit 2 土層断面（西より）

Pit 3 土層断面（西より）

Pit 6 土層断面（南より）

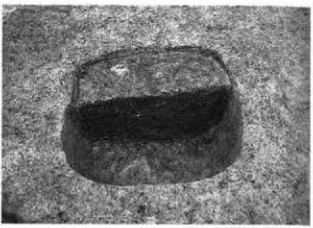
Pit 7 土層断面（南より）

Pit 8 土層断面（南より）

Pit 9 土層断面①（南東より）

Pit 9 土層断面②（北西より）

Pit10土層断面（西より）


Pit11土層断面（西より）

Pit12土層断面（東より）

Pit14土層断面（南より）

Pit15土層断面（南より）

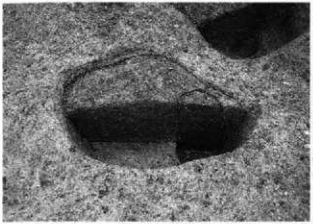
Pit 5 土層断面（北より）

Pit 5 遺物出土状況（北より）

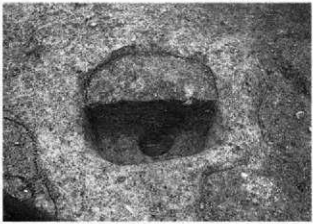
Pit18遺物出土状況（南より）

Pit 4 土層断面（北より）

Pit13土層断面（西より）



Pit16土層断面（北より）



Pit17土層断面（北西より）

Pit19土層断面（北より）

Pit20土層断面（北西より）

Pit23土層断面（南より）

Pit25土層断面（西より）

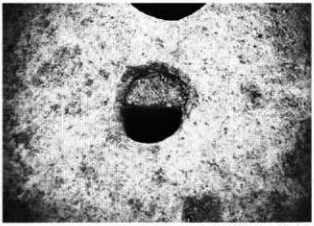
Pit26土層断面（南より）

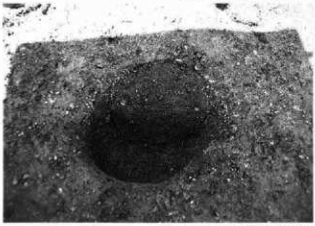
Pit27土層断面（西より）

Pit29土層断面（北西より）

Pit30土層断面（西より）

Pit31土層断面（東より）


Pit32土層断面（西より）


Pit33土層断面（西より）

Pit34土層断面（東より）

竪穴住居 上面検出状況（南より）

焼土・炭化物集中部分（東より）

焼土集中部分の遺物出土状況（東より）

焼土・炭化物層断面（北より）

住居床面検出状況（南より）

床面遺構完掘後の状況（南より）

竪穴住居 完掘状況（南より）

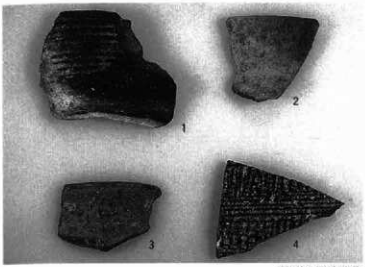
竪穴住居 土層断面（南東より）

落ち込み１付近の土層断面（東より）

縄文包含層断面（北より）

トレンチ全景①（西より）

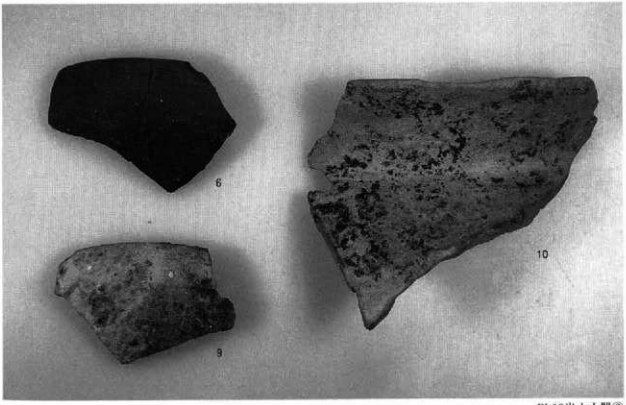
トレンチ全景②（北西より）



柱列2関連遺物

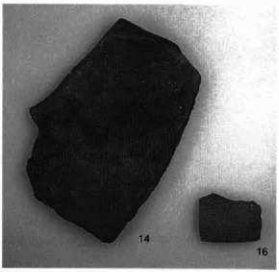
Pit 5 出土土器

Pit18出土土器①



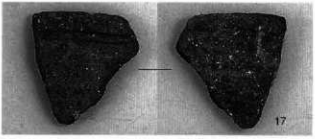
Pit18出土土器②

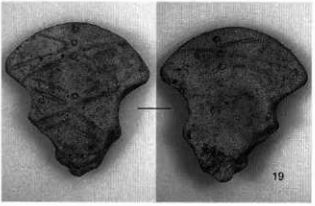
Pit29出土土器



Pit35出土土器

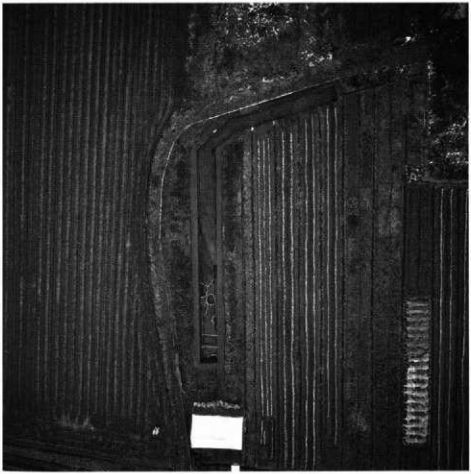
竪穴住居出土土器





縄文包含層出土遺物

トレンチと東田大塚古墳
墳丘（南西より）



拡張前のトレンチ全景
（上が北）

トレンチ掘削前の状況（南より）

南区の遺構上面検出状況（南より）

土坑１・土坑２上面検出状況
（南西より）

土坑1上層遺物出土状況①（西より）

土坑1上層遺物出土状況②（東より）

土坑1土層断面（東より）

土坑2土層断面（西より）

土坑2遺物出土状況（西より）

土坑2完掘状況（西より）

土坑3土層断面（西より）

土坑4遺物出土状況（西より）

溝1遺物出土状況（西より）

トレンチ北区全景（南西より）

北区南壁の土層断面（西より）

トレンチ南区全景（南より）

墳丘盛土と墳丘外堆積（北西より）

南区東壁の墳丘盛土断面（西より）

拡張区・墳丘断ち割り部分北壁（南より）

土坑6土層断面（南より）

墳丘盛土・土坑7土層断面（南より）

墳丘盛土断面（北より）

拡張区 墳丘盛土断ち割り部分
（南西より）

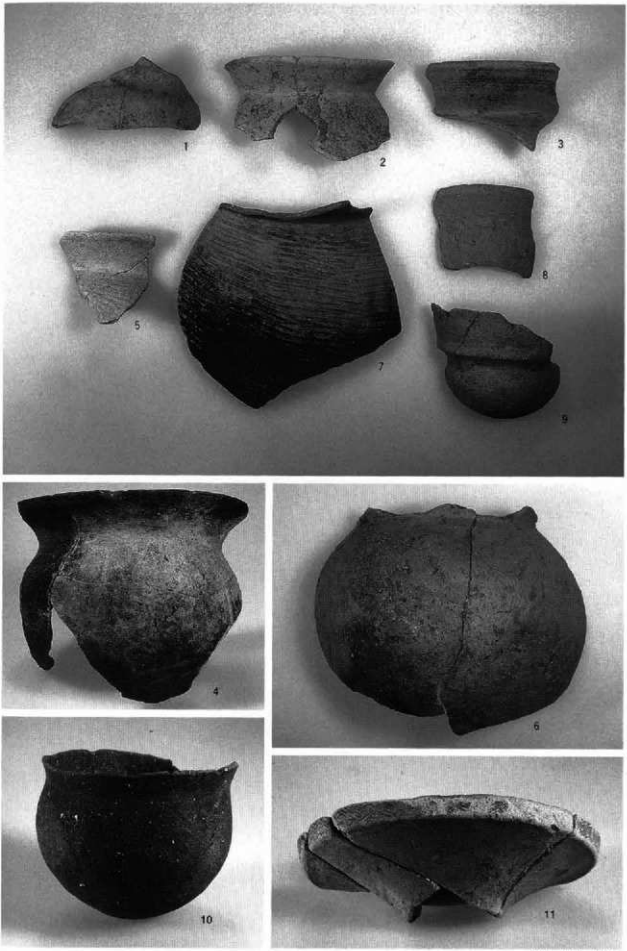
拡張区西端土層断面（東より）

拡張区西壁・南壁土層断面（北東より）

土坑1周辺の土層断面（南東より）

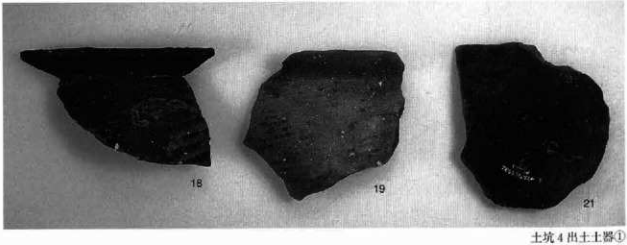
南区北端の墳丘盛土断面（西より）

北区北東端の墳丘盛土断面（西より）



土坑1出土土器①

土坑1出土土器②

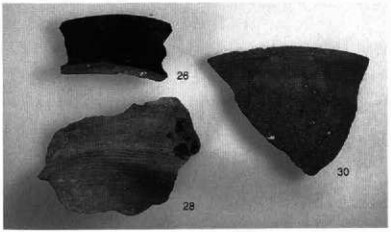


土坑4出土土器①

土坑4出土土器②

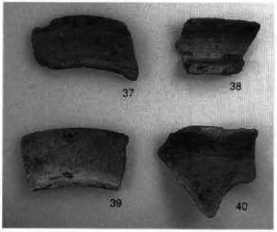
土坑2出土土器

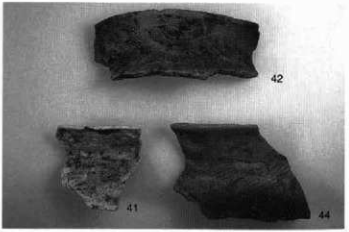
土坑6出土土器



溝1出土土器

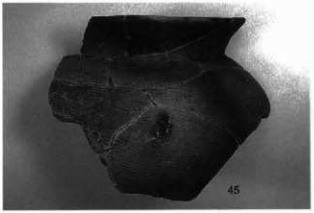
墳丘外堆積層出土土器

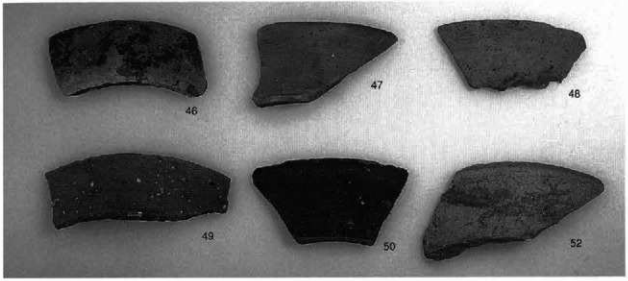


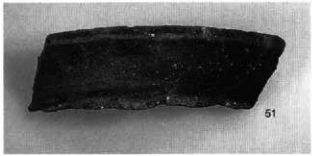


墳丘盛土出土土器①

43


45

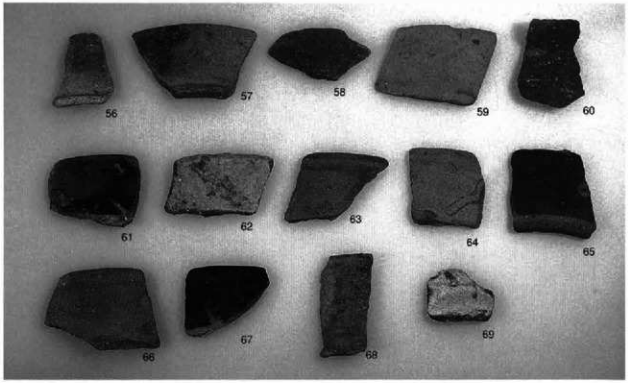

46
47
48
49
50
52

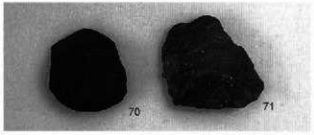

51

53

54

55

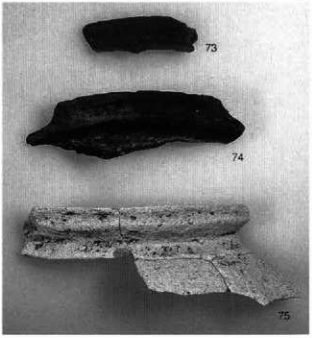

56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69


70
71

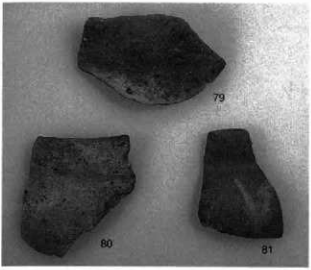
72

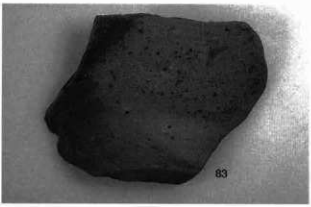
76

77


73
74
75

78

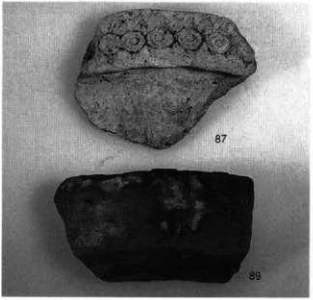

79
80
81

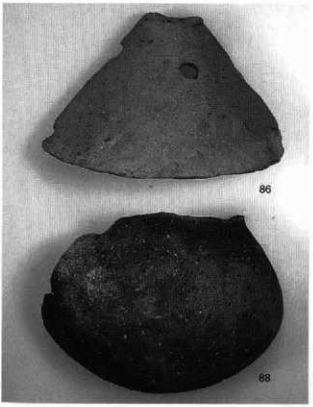

83

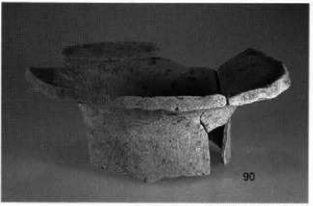
82

84

85


87
89


86
88


90

1・5トレンチ全景（南より）

前方部墳丘検出状況（南より）

前方部墳丘検出状況（西より）

周溝断面（北より）

2トレンチ全景（西より）

墳丘盛土・二次堆積層断面（南より）

墳丘裾検出状況（西より）

二次堆積層断面（北より）

3トレンチ全景（東より）

中世溝断面（北より）

4トレンチ全景（南より）

大溝2断面（東より）

大溝２断面（東より）

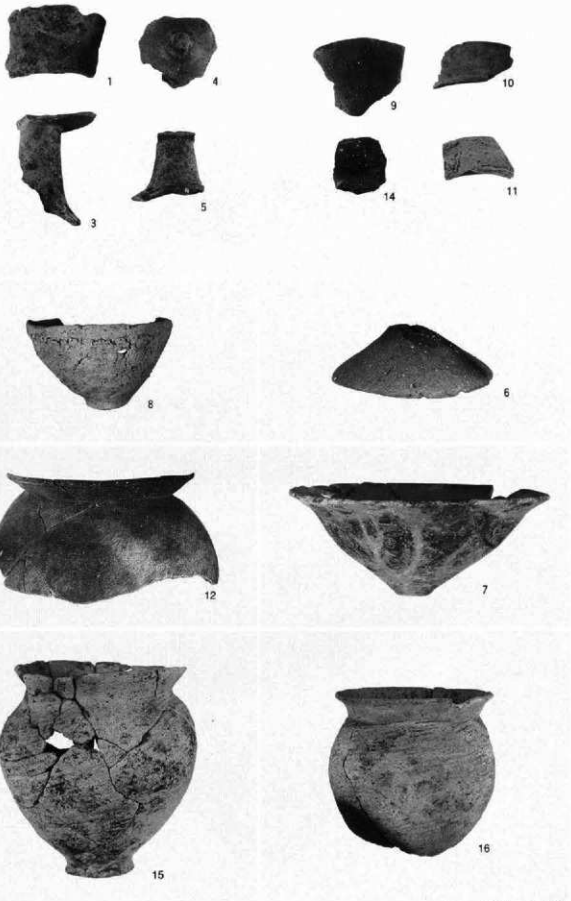
大溝１遺物出土状況①（東より）

大溝1遺物出土状況②（東より）

土坑1断面（南より）

土坑1完掘状況（南より）

5トレンチ全景（北より）



4トレンチ大溝1出土遺物

17

20

21

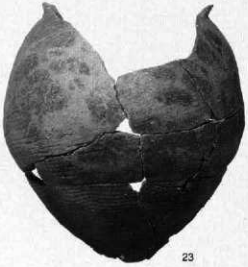
18

22

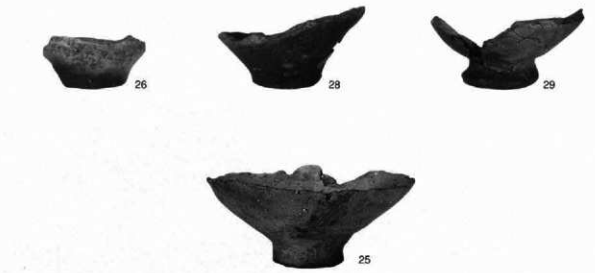
24

2

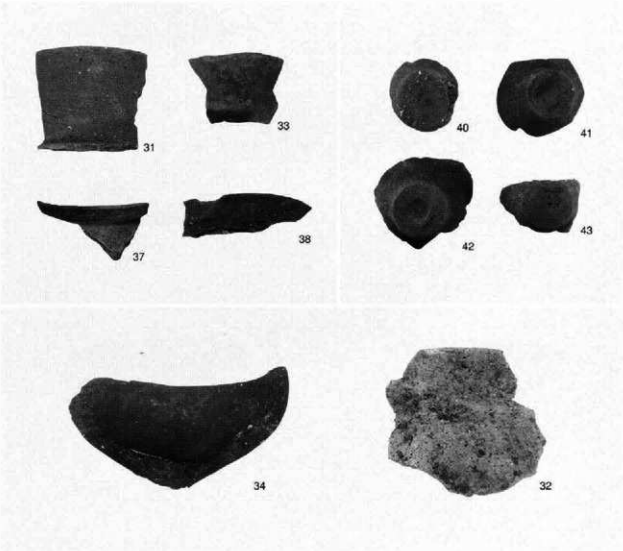
19


23

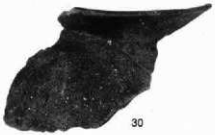
4トレンチ大溝1・2出土遺物



4トレンチ土坑1出土遺物



4トレンチ大溝1・2出土遺物


30

39

35

36

47

48

44

上段：4トレンチ大溝1・2出土遺物
下段：3トレンチ中世溝出土遺物

報告書抄録

書名	桜井市平成19年度国庫補助による発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第31集
編著者名	松宮昌樹　狭辻淳（編集）
編集機関	桜井市教育委員会　文化財課
所在地	〒633-0074　奈良県桜井市芝58-2　TEL 0744-42-6005　FAX 0744-42-1366
発行年月日	2009年　2月　27日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
風呂坊古墳群第3次	桜井市阿部681－3他	29206	14-B 54～56	34° 30′ 11″	135° 50′ 42″	20070604～20070621	9㎡	道跡自然崩落に伴う
纒向遺跡第151次	桜井市穴申1040	29206	11-D-487	34° 32′ 18″	135° 50′ 29″	20070709～20070810	55㎡	個人住宅建築に伴う
纒向遺跡第152次	桜井市巻野内415－2	29206	11-D-487	34° 32′ 48″	135° 50′ 45″	20070828～20070920	144㎡	個人住宅建築に伴う
纒向遺跡第153次	桜井市東田158	29206	11-D-487	34° 32′ 36″	135° 49′ 58″	20071210～20080225	72㎡	重要遺跡範囲確認調査
纒向遺跡第154次	桜井市東田251…1他	29206	11-D-487	34° 32′ 45″	135° 50′ 0″	20071217～20080313	127.5㎡	重要遺跡範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
風呂坊古墳群第3次	古墳	木棺墓	鉄釘、須恵器、土師器	7世紀代の木棺直葬墓
纒向遺跡第151次（箸墓古墳周辺第17次）	古墳、集落遺跡	古墳前期の流水・滞水層	土師器	
纒向遺跡第152次	集落遺跡	竪穴住居、柱穴列、縄文包含層	須恵器、土師器縄文土器・土製品	
纒向遺跡第153次（東田大塚古墳第5次）	古墳、集落遺跡	東田大塚古墳前方部盛土、土坑	土師器	東田大塚古墳の前方部盛土を確認
纒向遺跡第154次（矢塚古墳第3次）	古墳、集落遺跡	矢塚古墳前方部、周濠、纒向大溝	土師器	矢塚古墳の前方部形状を確認

桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書　31集

桜井市

平成19年度国庫補助による
発掘調査報告書

発行　桜井市教育委員会
文化財課
〒633-0074　奈良県桜井市芝58－2番地
TEL　0744－42－6005
FAX　0744－42－1366

年月日　平成21年2月27日

印刷　株式会社明新社
〒630-8141　奈良市南京終町3－464